

INTERDISCIPLINARY RESEARCH PROJECT:  
CREATION OF EAST ASIAN KYOUSEI STUDIES  
TO LIVE TOGETHER IN COLLABORATION

**CEAKS** 調査報告書

人間の安全保障／人の移動チーム

# 富山における 外国人の子どもたちの教育 — 子どもたちの声と支援をめぐる動き —

交響する  
アジア

編集代表 小倉利丸  
編集委員 田上栄子、青木由香

平成25年3月

## はじめに

富山大学「東アジア『共生』学創成の学際的融合研究」は、2010年度から3年間のプロジェクトとして開始された。本報告書は、この融合研究のなかでも、富山県を対象として、地域における外国人との共生という課題について、とりわけ富山に暮す外国で生まれ育ち、親とともに来日した家族の子どもたちの現状を把握し、地域が解決しなければならない「共生」の実現にとっての妨げとなっているのはどのようなことなのかを明らかにすることに挑戦したものである。日系ブラジル人の家族の子どもたちが本研究では主要な調査の課題とされているが、かれらが直面している生活や学校での困難は、日本で生まれ育った「日本人」にはありえない深刻な問題を孕んでいる。国籍や民族 出生地、あるいはどこで暮すのか（移民として暮らすのかどうか）は、子どもたちが選択できるものではない。にもかかわらず、これらの要因が深刻な差別や偏見を生み出し、子どもたちの将来をも大きく左右してしまう。これは当事者の親や家族の問題であるとみなすことはできない。むしろ、本報告書は、かれらが暮す地域の人びとが、国境を越えて移動する人びとの文字通りの意味での「共生」を実現する上でのもう一方の主体となるべきことを示唆してもいる。

本研究の主要な担い手は、富山県で実際に外国生まれの子どもたちの日本語教育などに携わっている教育現場の実践者たちである。この意味で、本研究は、大学という研究機関が地域の専門家とのコラボレーションによって成り立ったものであり、大学が地域に開かれることの一つの試みであると同時に、地域研究は大学の研究者の特権に属すべきものではなく、むしろ、現場の〈知〉との共同作業がいかに豊穡な成果をもたらすものであるかをも示しうるものである。

本書の各報告等は、それぞれの執筆者の調査、研究の成果であり、その見解は各執筆者に帰属するものであることは言うまでもない。同時に、本研究を実施する際に、多くの皆さんの協力なくしては実現できなかった。とくに、富山に暮す外国人の子どもたちとそこご家族の皆さんには言葉に尽くせない大きな協力をいただいたことを、この場を借りて、深く感謝するものです。

2013年2月  
東アジア「共生」学創成の学際的融合研究  
人間の安全保障、人の移動プロジェクト  
小倉利丸

# 目 次

はじめに

第1章 「ドキュメンタリー上映会&トークイベント “デカセギ” の子どもたちの今」	
1.1. イベント実施までの経緯	1
1.2. イベントのちらし	3
1.3. ディスカッションの記録	5
1.4. 孤独なツバメたち—子育て編—デカセギ第二世代の母親2人の選択	14
第2章 富山県の状況	16
第3章 子どもたちの進学	
3.1. 問題のありか	21
3.2. 高校入試特別措置に向けた動き	22
3.3. 進学説明会の実施について	24
3.4. 富山県教育委員会の対応 —外国籍を有する生徒の高校進学に係る支援・啓発について—	26
3.5. 全国の状況	27
第4章 「外国人の子どもの教育・進学に関する意識調査」結果	32
第5章 支援の現場	
5.1. 概観	42
5.2. 学校現場	
5.2.1. 高岡市における外国人児童生徒教育の取組	45
5.3. 地域のボランティア教室	
5.3.1. 勉強お助け隊	46
5.3.2. アレッセ高岡（高岡外国人の子どものことばと学力を考える会）	49
5.3.3. 「ワイワイにほんご・たいこうやま」子どもクラス	51
5.3.4. サポートセンター	
5.3.4.1. 外国籍こどもサポートプロジェクトについて	53
5.3.4.2. 多文化こどもサポートセンター	56
5.3.4.3. 高岡市野村地区サポートセンター「多文化子ども勉強室」	57
5.4. 「子どもラーニングサポート北陸」の試み	58
第6章 「富山県多文化共生推進プラン」と多文化共生施策 ～日本人にも外国人にも暮らしやすい、世界に開かれた「元気とやま」の創造にむけて～	60
第7章 富山県在住の「元子ども」たちへのインタビュー	62
第8章 創造/想像的異文化の主体としての移民の子どもたち	82
【巻末資料】 活動の記録	86
【巻末資料】 調査票	87

あとがき

# 第1章 「ドキュメンタリー上映会&トークイベント “デカセギ” の子どもたちの今」

## 1.1. イベント実施までの経緯

田上栄子（トヤマ・ヤポニカ）

### 1.1.1. プログラム

日 時	2012年5月20日（日）
場 所	高岡市ふれあい福祉センター
内 容	第一部 13:30-15:00 映画上映 ドキュメンタリー映画「孤独なツバメたち ～デカセギの子どもに生まれて～」 第二部 15:15-16:45 ディスカッション 津村公博（浜松学院大学）、パブロ・ナダヨシ・ロリン（Minority Youth Japan 代表） 鈴木ユリ（映画出演者）、二瓶博子（高岡市外国人相談員）、青木由香（アレッセ高岡代表） 小倉利丸（富山大学経済学部） 司会：田上栄子（トヤマ・ヤポニカ） 通訳：エヴェルソン・レモス

### 1.1.2. イベント開催の趣旨

富山県の外国人登録者数は2008年のリーマンショック以降減少傾向にあったが2011年にはわずかに増加に転じている。これまでも、そしてこれからも身近なところに隣人として外国人住民がいるにもかかわらず、言葉の壁や就業形態などの理由により、日本人住民にとって「見えない」存在となってしまう。彼らがどのような状況にあり、どのような悩みを抱えているのかなど、日本人住民が知る機会はほとんどなかった。特に、子どもたちの教育の問題は、多くの深刻な問題を抱えているにもかかわらず、「義務教育ではない」という理由から見過ごされてしまったり、取り組みに当たっても問題がなかなか解決できずいたりする場合はしばしばみられる。そして、子どもたち自身、その状況を客観的に認識し、声を上げるような術を獲得できないでいる。

2012年現在まで、富山県では、増え続ける外国につながる子どもたちへの支援に対し、学校、地域ともそれぞれが努力を重ねてきた。例えば、地域においては「年少者日本語教育」について複数の団体によって、基礎的な知識や先進的な指導例など、支援にあたって必要な事柄について勉強会、講演会等が数年にわたり実施されてきた。これらの企画の目的は、富山県に広く散在している子どもたちの言語・学力の状況を理解し、よりよい支援の在り方を支援者が学んで、支援のすそ野を広げることや、支援のネットワークを創出することが目的であった。それは一定の成果を上げ、実際に目に見える形となって現れたのが、2011年度に行われた高校入試特別措置を求める動きであったのだろうと考える。（3章）

このような状況にあって、私達は、年少者支援の在り方について、新たなステップを模索したいと考えた。それは、見えない存在になってしまっている子どもたちや今は青年となった「元子ども」たちに見える存在とすること、その過程で彼らをエンパワメントしていくことである。本イベントでは、当事者である「元子ども」の青年たち自身に自らの体験を語るという形で声をあげてもらい、日本人へ発信してもらおう。そこで、まずは外国人または外国につながる子どもたち自身がこの問題を個人の問題ではなく、社会の問題として認識すること、そして外国人・日本人の双方が、共に暮らす社会における共通の問題であるという認識を持ち、問題解決に向けて共に考え行動を起こせるようになることを望む。本イベントの実施はその第一歩である。

### 1.1.3. ドキュメンタリー映画「孤独なツバメたち」とディスカッション

この映画は浜松学院大学の津村公博氏、映画監督の中村真夕氏が、浜松の5人の日系ブラジル人4世の2年半を追ったドキュメンタリーである。5人の青年たちが自分たちの居場所を求めて懸命に生きようとする姿が描かれている。映画のチラシには「彼らは幼い時、デカセギの親と共に日本にやってきた。日本で生まれ育っても、ブラジル国籍のため義務教育が保障されておらず、多くの子どもたちは中卒か、中学も中退して、工場で働いている。夢があってもそれを叶えるすべを知らず、安定した仕事にもつけない。しかし彼らは、どんなにつらくても、生き生きとして、底抜けに明るい。」とある。これまでほとんど自らを語ることのなかった青年たちの現実を青年たちの視点で描いた映画である。第一部ではこの映画を参加者全員で同じ場で鑑賞する。そして映画への共感（あるいは異論）をきっかけとして、富山県、特に高岡・射水の青年たちに自らを語ってもらい、そして議論を起こしたいと考えたのが第二部のディスカッションである。浜松より当事者である「Minority Youth Japan<sup>1</sup>」代表パブロ・ナダヨシ・ロリン氏、映画の出演者の一人である鈴木ユリ氏が来てくださった。第二部の議論に彼らが直接参加してくれたことの意義は大きい。

富山での議論を活発にするために、富山の青年たちの状況や思いを主催者側として知っておきたく、事前に高岡でインタビューも実施している。インタビューの詳細は7章で、ディスカッションの詳細は1.3.で報告する。

### 1.1.4. イベントを終えて

参加者は150人程度で、そのうちブラジルをはじめとする南米系の外国人の参加者は3割程度であった。最後にアンケートに見られる参加者の代表的な感想を抜粋する。

#### ◆当事者の声について

- ・日本人より日系の方、特にティーンエイジャーの方と同年代のパネリストの方との討論をもっと聞きたかった。
- ・子供だった人たちの生の声を聞いたのは、とてもよかったし、うれしかった。彼らの言うことが、よく理解できたし、今私たちが出会ってることの、表裏を感じた。(映画での青年たちのよく世の中を見ているのにとっても感心した。あの若さで、すごい人生観だと思った。)

#### ◆もっと当事者たちのことを知り、互いに分かり合うことが必要ではないか

- ・「マイノリティー」のことをよく知る必要(マイノリティーに対する態度、マイノリティーの生徒たちに対する学習支援)があると感じました。
- ・相手の気持ち、文化、理解しあう。出来そうだが、難しい。

#### ◆今後も継続的に取り組んでほしい

- ・外国人の問題も、その多くは日本人が同様にかかえる問題ではないだろうか。しかし、日本人と違い、外国人の選択肢の少なさが問題をより難しくしていると思う。知らないことを知るには勇気が必要になる。メッセージを伝える活動は、より人を動かすパワーが必要になる。この活動も、より多くの人をまきこんでいくような力強いムーブメントになってほしいと思う。
- ・何度も何度も価値を共有できる場をつくって、今より少しでも前進できればと思う。
- ・Continuem sempre, pois é importante p/a desenvolvermos uma sociedade com diversidade. Sou brasileiro e gosto muito do Japão. (これからも継続してください。多様性のある社会の発展のために重要なので。私はブラジル人ですが、日本が大好きです。)

<sup>1</sup> 「Minority Youth Japan」

2008年に浜松学院大学の学生たちを中心に結成された日系ブラジル人、フィリピン人、日本人の若者たちのグループ。マイノリティーの若者たちが、様々な活動を通して社会人としての基礎能力を高めることを活動の目的としている。これまでに映像制作、外国人のソフトボールチームの設立、世界の平和を願うフリーハグなどの活動を通して、浜松から全国に多文化共生の未来を発信している。(映画の資料より)

1.2. イベントのちらし

ドキュメンタリー上映会&トークイベント

# "デカセギ"の子どもたちの今

二つの故郷の間で揺れ動く、

日系ブラジル人の若者たちの

知られざる青春

富山に住むデカセギの子どもたちの  
今とこれからについて考える

2012.5.20 SUN 日

時間 13:00～16:45 入場無料  
(事前登録不要)

会場 高岡市ふれあい福祉センター1F  
多目的ホール

ドキュメンタリー映画上映

「孤独なツバメたち～デカセギの子どもに生まれて～」

& ディスカッション



主催/富山大学「東アジア「共生」学創成の学際的融合研究」(CEAKS)、トヤマ・ヤボニカ、アレッセ高岡

リサイクル適性 A  
この印刷物は、日本環境のマーク  
で印刷されています。

ドキュメンタリー上映会&トークイベント

"デカセギ"の子どもたちの今

# 孤独なツバメたち

～デカセギの子どもに生まれて～

(2011年)

監督 / 津村公博、中村真夕  
撮影 / 津村公博、中村真夕、村井隆太、木村伸哉、佐藤アユミ・パウラ  
編集 / 中村真夕  
支援 / 国際交流基金  
配給 / アルゴビクチャーズ

■カラー / 88分 / 日本語、ポルトガル語

〈映画内容〉

## 二つの故郷の間で揺れ動く、 日系ブラジル人の若者たちの知られざる青春

「日本で将来の夢はない、ブラジルに帰っても外国人あつかいされる…」  
—そんな日系ブラジル人の子供たちが静岡県浜松市にはたくさんいる。彼らは幼い時、「デカセギ」の親とともに日本にやってきた。日本で生まれ育っても、ブラジル国籍のため義務教育が保障されず、多くの子どもたちは中卒か、中学も中退して、工場で働いている。夢があってもそれを叶えるすべを知らず、安定した仕事にもつけない。しかし、彼らは、どんなにつらくても、生き生きとして、底抜けに明るい。2008年秋、突然、おとずれた不況で仕事を失い、ブラジルに帰ることを余儀なくされる。そこには、あきらめきれない夢、引き裂かれた愛、そしてもう一つの故郷でやり直そうという思いがあった…

「孤独なツバメたち」は、浜松学院大学の津村公博教授と映画監督の中村真夕氏が、浜松そしてブラジルで孤独な渡り鳥のように、自分の居場所を求めて生きようとしている5人の若者たちの2年半を追ったドキュメンタリー。

この映画を入り口にして、富山に住むデカセギの子どもたちの今とこれからについて、一緒に考えませんか？

〈会場〉高岡市ふれあい福祉センター1F 多目的ホール

〒933-0935 富山県高岡市博労本町4番1号 TEL.0766-21-7888

●市内巡回バス コミュニティバス(こみち) ●JR高岡駅より徒歩20分

■主催 / 富山大学「東アジア「共生」学創成の学際的融合研究」(CEAKS)、トヤマ・ヤボニカ、アレッセ高岡

■お問合せ / トヤマ・ヤボニカ(田上) TEL&FAX.076-423-2737 japonica@fsinet.or.jp  
アレッセ高岡(青木) alece\_takaoka@hotmail.co.jp  
富山大学(小倉) ogura@eco.u-toyama.ac.jp

## The Program on May 20

〈2012年5月20日(日) プログラム〉

**入場無料**  
(事前登録不要)

[13:00] …………… 開場

[13:30~15:00] ……………

**ドキュメンタリー映画上映**

[15:00~15:15] …………… 休憩

[15:15~16:45] ……………

**ディスカッション**

- ・津村 公博 (浜松学院大学教授)
- ・小倉 利丸 (富山大学教授、CEAKS人間の安全保障チーム代表)
- ・パブロ・ナダグシ・ロリン (Minority Youth Japan代表)
- ・二瓶 ひろ子 (高岡市役所)
- ・青木 由香 (アレッセ高岡代表)

司会者 / 田上 栄子 (トヤマ・ヤボニカ)



### 1.3. ディスカッションの記録

#### ◆はじめに

(田上) 最初に15分ほど、津村さんから浜松の様子を、パブロ君からどんな活動しているかを少し詳しく話してもらいたと思います。よろしくお願いします。

(津村) 今日は田上さん、青木さん、富山大学の小倉先生をはじめ、このような形でお招きいただきまして、本当に感謝しています。それから中日新聞のNさん、ありがとう。

私がぺらぺら話すよりは、隣にいるパブロ・ナダヨシ君に話してほしいと思います。このドキュメンタリーは、2006年からの調査の副産物と言っていいかもしれません。調査の中で彼らと出会って、彼らの生き方に感動し、彼らの生き方を追跡調査した結果です。ですから、本当に普通の青年たちを描いていると思います。よくおしかりを受けるのですが、「高等教育まで進んだブラジルの精鋭たちがいるではないか。なぜ彼らのような、ロールモデルになる人を選んでドキュメンタリーにしなかったのですか」という言われ方をします。そもそも調査の中で協力してもらって、僕には全く分からなかった世界を見せてくれた、街で会った普通の青年たちの生き方に僕も感動したのです。私の報告は本当に面白くないのですが、つまらない研究会や学会だけではなく、もっと一般の人たちに伝えたいという気持ちで、調査の流れの中で出会った5人の青年たちをこのような形で皆さんに紹介させていただくことになりました。

そもそも、外国人の子どもたちが働いているという許せない状況が2001年から分かってきました。出稼ぎの子どもが働いていいのかということです。ここにコミュニティーの方たちがいると思いますが、12歳ぐらいから働き始めることが僕は許せなかったし、議論があると思います。私の最初の企画は、ここに来ているブラジルのコミュニティーの方たちも、学校で受け入れられなかったら働いても仕方ないのではないのかということです。そういう形で、地域の中で子どもたちがどんな生活をしているのか、学校を離れた子どもたちがどうなっていくのかを知りたくて、夜の街に出て彼らのインタビューを始めました。

#### ◆外国人にとっての日本での居場所

(田上) 津村先生は、恐らくたくさんブラジル人の青年たちのことを知っていると思いますので、また後で教えてください。

次に、パブロ君はMinority Youth Japanというグループをつくっていますが、そこで何をしているのか、どうしてそれをつくったのか説明してもらえますか。

(パブロ) Minority Youth Japanをつくったきっかけとして、もともとは友達のグループのプレゼンサというものがありました。どんどんみんな成長してきて、その間に知り合った津村先生から、「友達の間でいるだけではなくて、コミュニティーに対して何かできるのではないか」という提案をしていただき、みんなでMinority Youth Japanという団体をつくることに発展しました。

Minority Youth Japanでは、外国人の若者に対してサポートをしています。通訳をはじめ、日本語教室やポルトガル語教室、フットサル教室では「スポーツの日」というものがあります。そういうことをすることでコミュニティーと交流を増やす場所でもあるし、特に居場所のない若者がたくさんいるので、そういう人たちが頼りにできる団体としても頑張りたいと思っています。

(田上) 居場所がなかったので作りたかったというのが、今日のキーワードの一つかと思います。パブロ君にとって、学校は居場所ではなかったのですか。学校自体の様子を紹介してもらえますか。

(パブロ) 私は中学校までしか出ていませんが、学校での友達もいましたし、いい経験でした。しかし、やはり外国人ということで気遣いもあります。どうしても自然にはなかなかうまくフィットしませんでした。私たちの居場所というか、私たちが自由に思ったことをもう少し言える、行動できる場所として、プレゼンサでは同じ意見を持った人同士で行動できました。Minority Youth Japanはプレゼンサの成長版というか、仲間だけではなくてコミュニティも入れてというものです。

(田上) ユリ君は学校の時、どうでしたか。何か苦労したことなどありますか。

(鈴木) 自分は高校を中退したのですが、最初に日本に来たときは広島県のブラジル人の結構少ない地域にある〇〇小学校に通いました。そこでは、自分ともう一人しかブラジル人がいませんでした。小学校時代から苦労はしていませんが、逆にブラジル人が少なくて珍しく、皆さんと結構仲良くなりました。中学校は、広島を出て浜松の△△中学校へ行き、外国人だからかはよく分かりませんが、外国人であることで目を付ける先生がいて、なかなかうまくやっっていけなくてストレスがたまる部分もありました。自分のことがいろいろあまり気に食わない日本人の生徒たちとけんかして、退学になったこともあります。別に学校が自分の居場所ではないと感じたこともないですし、普通に自分が明るくていい人ならみんなはついてくる感じだったからいい思い出はたくさんあるので、日本の学校を出てよかったと思っています。

(田上) 前の二人は非常に穏やかに学校のことを話してくれましたが、自分の周りにはこうだったということがあればどんどん発言してください。

(フロア 1) 私は学校で通訳をしていますが、ユリさん、パブロさんに聞きたいことがあります。私も毎日問題を抱えている子どもたちと付き合っていますが、実際にそういう時代を経て大人になって、大人から見た学校の問題について語っていただきたいと思います。自分たちは学校でどういう問題があったのか教えてください。

(鈴木) 私が学校に行っていたころは、問題があったときは親から隠そうとしました。学生当時は自分は一人前の男だと思っていて、自分の起こしたことで親に心配をかけるわけにはいかないと思っていました。今振り返ってみると、一人で問題を解決しようと思ったのはそれほど正しくなかったのではないかと思います。誰か相談に乗ってくれる方がいれば、自分の人生は違う方向に展開していたのではないのでしょうか。学校でそういう仕事をされているなら、そういうことを踏まえてブラジル人の面倒を見てもらえればうれしいです。

#### ◆周囲の人間からのサポートが重要

(フロア 2) 質問に入る前に、ここにいる親の方々を代表して、開催者に感謝したいと思います。高岡市は浜松市に似たような町になってきているのではないかと思うので、このような会はとても貴重な機会だと思います。

親や大人からの支援、サポートが必要だという話ですが、親としてはできるだけいい育て方をしたいのですが、分からないこともたくさんあります。話をしようと思っても、子どもが言うことを聞かないこともあります。ユリ君に聞きますが、親はどのように振る舞えばいいと思いますか。

(鈴木) 私も今、親になって、自分でもそういう問題を考えます。分かっているつもりではありませんが、一応こういうふうに私の娘たちを育てられればいいと思う理想的な答えをお話しします。

子どもは、親は年を取って今のことをあまり分かっていないと思っています。今の時代を生きている自分は、とにかく楽しみたい、とにかく遊びたいという気持ちもあります。今、私が親になって考えるのは、親が子どもの立場に立って、自分が同じ立場であればどうかと考えるといいと思います。そのためには、ある程度の謙遜が必要です。プライドを捨てて、子どもの側に立って話し合うことが一番大事ではないでしょうか。親だから自分の言うことをしろというのではなく、同じ立場で話し合ったらどうかと私は思います。

(田上) 親子関係について、ユリ君自身の話の中に親との対立ということが出てきましたが、もう少し後で考えたいと思います。

ユリ君が親に対してどう思うかは、親になったユリ君が今話してくれたとおりで感動的なのですが、学校でどのような問題があったかというところに話を戻して、学校時代はどうだったのか、会場の方で話してくれる人はいますか。

(フロア 3) 私は高岡の小学校と中学校を出ていますが、最初に日本に来たときは全く日本語が分かりませんでした。小学校に入って、最初に受けたのはいじめです。何を言っているのか分からないし、先生に話そうにも話せないの、結局けんかしてなぐったりしました。するとやっとな先生が来て、「それをしてはいけません」と言うのですが、それも分からないので、先生が親に電話して家に来ます。親も日本語は分からないのですが、「けんかは駄目だよ」と言われて、また学校へ行くのですが、やっぱり何を言っているのか分かりません。勉強しようにもずっと黒板を眺めているだけで、分かりません。

私はブラジル人と日本人の間に生まれたのですが、いじめやつらいことがありました。今、子どもが4人いますが、一番上の子どもにも同じようなことがたまにあります。

(田上) 学校での生きにくさみたいなものはありますか。

(フロア 4) 日本に来てもう8年たちました。学校生活ではいろいろなことが起きて、つらいこともいいこともありました。ブラジルから来て中学校に入ったとき、14歳でした。当時は日本人だらけでブラジル人はとても少なく、ほかの日本人から「この人は一体何者だ」という目で見られたのです。この人は日本語が話せないから差別して、役に立たないからこちらに置いておこうという目でみんなに見られました。でも、私はここで暮らすしかないから、いろいろな人に相談したり、先生たちにも話したりしているうちに、いろいろな人から信頼されて勉強する気分になりました。親の仕事が苦しいことを毎日頭の中において、「会社に入ったらこんなにつらいのか。学校でつらい思いをしているけれど、親と比べたらそんなにつらくない」と思い、仕事も学校と同じ感じかとずっと思っていました。そして中学校を卒業して高校に入り、バイトを始めました。親と同じ会社でしたが、やはり会社も学校と同じ感じだったのです。ブラジル人だからこの人はこの仕事をやらなければいけないとか、外人だからと差別されていました。

今の子どもたちは、「おれは学校を辞めて仕事をして自分でお金を稼ぐから、やりたいことをやれる」と思って、そこでみんな終わってしまっています。もっと勉強したらもっといい就職が見つかるとか、学校のことには全く気付かないのです。ですから、相談に乗ってくれる人や親の信頼も必要です。自分だけがつらい思いをしているとずっと考えているのは間違いです。子どもと親との相談が大事だし、友達をつくるのも大事なことだと思います。だから、親や信頼していた先生や友達がいないと、僕は今ここにはいないと思いますし、日本語も話していないと思います。

(田上) 学校の中で信頼できる人に出会えたということですか。

(フロア4) はい。

(田上) パブロ君はどうですか。学校がどうなればよいと思っていますか。

(パブロ) 僕の場合、少し感じたのは、外国人だからと日本人と少し違った対応をされるときには、僕は違う人なのだなと思いました。多分そこで居場所がどんどんなくなってくるのです。僕はみんなと同じ学校に来て、みんなと同じ授業を受けているのに、外国人だから少し違うのかなと思うと、「自分の居場所ではないのだな」とか「もう学校に来たくないな」と思うこともありました。

学校の先生たちは、外国人であっても同じ対応をすることです。日本人とブラジル人ではなくてみんな同じ生徒として、「ここはみんなの学校だ」と区別はしない。しかし日本語は分からないから、後で翻訳したり、翻訳された書類をあげたりしてほしいのです。最初はみんなと同じだという気持ちを表現したらいいと思います。

(田上) 津村先生はいかがですか。たくさんの青年たちに接していると思いますが、彼らにとって学校とは何だったかという語りなどはありましたか。

(津村) 今の二人の話聞いていても、決して学校は否定していません。それでも何か物足りないというか、自分たちの居場所を学校にも求めているのですが、例えばユリはSLGやプレゼンサという集団をつくりました。学校で満たされない部分はあるのでしょうか。

#### ◆ドキュメンタリーに対する意見

(フロア5) 私自身もよく似た活動をしていますので、非常に興味を持って来ました。まずは、ドキュメンタリーの中で青年たちがもう少し伝えなければいけないことがある。私には伝わってきませんでした。やはりどこの国にも外国人の居住者はいて、その国籍を持つのも一つの選択肢ですし、持たないで母国に帰ることも一つです。これは世界中に今200カ国ある中で、ブラジルだけが特別ではありません。

この若者たちの今の年齢は聞いていて分かりました。親になっていらっしゃることも分かります。そうすると、学校での在り方に問題があるのであれば、誰にこれを訴えなければいけないのか。市の行政であったり国であったり、その訴える場所も知ってほしいのであれば、それなりのやり方を今やっというらっしゃるし、その中の状態でマイナス点があればここで知りたかったです。

それから環境はそれぞれ違いますが、ほかの国の状態を子どもたちにも教えてあげてほしいです。親子問題はどこの国にもありますから別問題です。そうではなくて、今いるブラジルの子どもたちが小学生、中学生、高校生、大学生もしくは社会人になって本当に困っていることをどうやって解決したらいいかという今の具体策を先に挙げて、意見を求めていただきたかったと私は思っています。

それから「幸せ度」と申しますか、GNPとGNHがよく言われます。各国によって違うかもしれませんが、同じ与えられた70年や80年の年数には差がありません。私もそうです。ですから、本当の自分の今の生き方、こうやっているという生の声を聞きたいです。

それから映像もそうですが、支援者も行政も企業です。いろいろなことをして活動しています。できればそういうところとネットワークを結んでいただけたらありがたいと思っています。

(田上) ご意見ありがとうございます。外国人の国籍がいろいろあることは知っていますし、行政との連携ができれば、もちろん私たちはこの上もないことです。ただ、それには非常に難しい問題がいろいろあると思います。教育委員会にしてもそうだと思います。その第一歩だと思っています。小さな一歩です。

とにかく今日は、今ご質問された方から当事者の語りがよく見えないということもあったと思いますが、映画も含め、ここにいる私たちも含め、その点に対して最大限、非常に努力しているつもりです。問題点も絞っているつもりです。もし進行上、至らないところがありましたら、それはおわび申し上げます。

(フロア 6) 今日、私がここに来た目的で一番大事なことは、実は高岡の野村にブラジルの子どもたちが非常に多いのです。それで、去年から小学生に土曜日を利用して国語や算数を教えることをスタートしたのですが、子どもが来なくて困っています。一生懸命教えようという先生たちがいるのに、来ません。それはいろいろな理由があると思いますが、そういう場面をつくったのに私たちは本当に苦労しています。小学校の宿題、国語や算数を教えようというって4人も5人も待ち構えているのですが、全然来ない週もあります。雪が降ったから来ない、雨が降ったから来ない。ブラジルの大人というのはどういう考えを持っているのか、教えてほしいです。

(田上) ご意見、ありがとうございます。いろいろと広報を頑張るということでまず収めたいと思います。

(田上) 私たちは今回このイベントを企画する前に、高岡の青年たちにいろいろたくさん話を聞きました。そして苦しいことがたくさんあった、いろいろなことがあったとたくさん語ってくれました。ユリ君は映画の中で昔ギャングだったという話が出てきますが、あの時代の気持ちはどうだったのか、教えてもらえますか。

(鈴木) 先ほどの話に戻りますが、映画を通して誰かにメッセージを送るといったきれいな事を言うつもりは全くありません。ただ、津村先生に出会って、映画内で自分の今までの経験を語っただけです。ですので、これが教材としてとらえられて、今、日本でブラジル人が背負っている問題を私の背中に押し付けられても困ります。

ギャングの時代は遊んでお金をもうけて、その当時は大変楽しかったです。しかし、つかまって、自分がお金をもうける手口の先に被害者がいて、それだけではなく自分の親や周囲の人、妹や弟たちもそうですが、自分一人ではなく必ず周りに人がいて、その人たちに迷惑を掛けることでいろいろな人を苦しめている事実を初めて知ってから、自己中心的な考えで楽しかったことや、被害者がどんな思いをしようとお金をもうけることを優先したことを反省していますし、もうやるつもりはありません。そうする価値がないのです。別に突っ張っていても、それで一人前の男だとか格好いいという意味では全然ありません。ですから、楽しかったけれど、価値はありませんでした。人間にはもっとそれなりの価値があることが今になって分かりました。

## ◆お互いに歩み寄る努力

(パブロ) 今、ユリが話したことに関連しますが、算数や国語などの宿題をサポートする教室をつかったけれども生徒が全く来ないという先ほどの質問に対して、少し言わせていただきたいと思います。

自分も Minority Youth Japan の中で、浜松市の援助を受けてポルトガル語教室、日本語教室、そして英語教室をさせていただいていますが、やはりなかなか来ない日もあります。家庭の事情もあつたり

と、みんないろいろあるのです。もちろん、ただ行きたくないというときもあります。それは自分も本当に感じますが、実際に僕も誰も来ないと「みんな、やる気がないね」「もうこんなことはやらなくてもいい。もうやめよう」と思ったことはあります。しかし、やはりそういうものは本当にやりたいのであれば、生徒たちにその大切さ、実際に学校だけではなくて、せつかくそういう教室があるのに行かないのはよくない、これは本当に大事であなたの将来のためだということを主催者が伝える。本当にそれをやりたと思っている人というのは・・・。

(フロア 8) ブラジルの親の考えです。

(パブロ) 親の考えですか。もしかしたら、その大切さが分かっているだけでありませんか。

(フロア 8) 子どもは分からないから、親が教えてやらなければいけません。親の考えです。

(パブロ) 僕にもルーマニア人の生徒がいて、授業には来るのですが、なかなかまじめにやりません。それで親に電話して話したら、なぜまじめにやらないのか、なぜ毎日来ないのかという事情が分かりました。僕が言ってもそれはケース・バイ・ケースなので、本当に真剣にやっつけたいと思います。実際に親を呼んで直接お話しすると一番分かると思います。「私はこういうことをやりたいと思っています。あなたたちの息子さんにぜひ来てほしいのですが、考えはどうですか。私たちはあなたたちをサポートしたいのです」と中に入った方がいいと思います。ただ来ないから「何だよ」と思うのではなくて、もう少し距離を縮めることが非常に大事だと思います。

(田上) 間違っていたら言ってください。結局ユリ君の話は日本人、支援者、それから学校などとブラジル人との距離が遠いという話でしたよね。つまり中にも入っていない、見ていないのに何か問題があるのではないかと、何か悪いのではないかと感じてしまうという意見だったと思います。これに関して何か意見がある方はどうぞ。

(フロア 9) 今日はどうもありがとうございました。今の話を聞いていて、ブラジルから来ている人に日本語などを教えることはとてもいいことですが、「なぜブラジル人は来ないのか」とか「だから日本人はこうなのだ」という考え方こそ距離を広げているので、お互いに話してみて「どうしたのですか」と声を掛けられるなど歩み寄っていくことが大事かと思いました。それは外国人だろうが日本人だろうが一緒だと思います。

僕は高岡の瑞龍寺というお寺の近くで「コミュニティーハウス『ひとのま』」という場所を開いています。そこは小さい子どもから高齢者まで、それこそ外国人でも障害者でも誰でも来ていいという家で、日本人でも生きづらさを抱えている人がたくさん集まっています。最初に居場所の話がありましたが、今、日本にはひきこもりの若者が 100 万人いるといわれていて、日本人でも非常に生きづらい社会になってしまっています。そういう若者と毎日のように触れ合っています。みんなが生きづらい状況になっているのがなぜなのかは分かりませんが、僕は日本人なので、もっとみんなが生きやすい社会をつくっていかねばいけないと思い、誰でも来られる場所をつくりました。そこで何か生まれるのではないのでしょうか。今、生きづらいと思っている人こそが新しい社会をつくるヒントを持っているのではないかと思うし、そういう場所がたくさんできていくといい僕は思っています。「外国人だからどうだ」とか「ブラジルの人はどう思っているのか」という見方ではなくて、同じ人間なので歩み寄っていく姿勢が大事だと思いました。

(田上) ありがとうございます。今の話の中で、中に入っていない、お互いに知ろうとしていないということ、それから日本人側にも同じような問題があって、生きにくくなっているという指摘だったと思いますが、この点に関してご意見のある方はいらっしゃいますか。

(フロア 10) このようなイベントは、最高に大事で貴重だと思います。この二人の若者が勇気を持ってここで顔を見せていることを、私は非常に尊敬しています。津村先生も、日本のことではなくてもコミュニティ全体、ブラジル人全体、日本人全体、社会のための仕事をされていて、私はそれを非常に尊敬しています。私はこの方々と同じ勇気を持っていませんが、今日、このイベントに参加させていただいて、勇気を出さないことはとても自己中心的ではないかと反省しました。これからもこういうイベントなどをどんどん続けてほしいです。これからも富山に何回も来ていただきたいと思います。

ここでドキュメンタリーの映画を見て、日本にいるブラジル人は日本が大好きだということが明らかになったのではないかと思います。確かにお互いに分からないこと、理解できないことがたくさんあると思いますが、日本のいいところは、言葉が分からなくても、仕事分からなくても、本当に丁寧にいろいろ教えてもらえることです。確かに人間はみんな一緒ではないので、そんなに優しくない人もいますが、できるだけことはしていただいていると思います。

われわれブラジル人は日本のことが大好きだと知らせてほしいです。私には息子が二人いますが、小さいころに来て、ブラジルに帰ったことがありません。私も今この年になっていますが、ブラジルに帰ったら自分の人生がどうなるか分からないので帰るつもりはありません。日本が大好きです。

(田上) ありがとうございます。とにかくお互いに分かり合うことがまず一歩だと本当に思います。パブロ君、お願いします。

(パブロ) 確かに、これはこれからの第一歩に過ぎないと思います。課題は多く残っています。今のドキュメンタリーは私だけではなく多くの方々の手でつくられたものです。これからもマイノリティーとして、ブラジル人として頑張っていきたいと思います。ご理解をいただきまして、今回、その気持ちを表していただいて本当にありがたいと思います。

## ◆まとめ

(田上) 本当にありがとうございます。青木さんから一言。

(青木) 先ほど「ひとのま」の方がちらっとおっしゃっていましたが、日本人にも同じ問題があります。差別やいじめの経験を高岡の若者のお二人が語ってくれましたが、実際に日本人だけの集団でもありますよね。勉強が分からなくて自分に自信をなくしてしまって、居場所がないと感じている子がいるのは日本人も同じです。実は、就労問題も同じなんですけど、そういう日本人が抱えている問題を、外国人は色濃く凝縮して抱えていると思います。外国人の子どもたちの問題に取り組むことは、そういう日本人の抱えている問題に取り組むことと同じだと私は思っています。ユリ君の「認められたいためにギャングをやっている」という言葉がすごく心に残りましたが、人に認められたいという気持ちや自分の居場所がほしいという気持ちは映画にも出てきたし、同じ気持ちを抱えている子どもが高岡にもたくさんいます。

いろいろな子どもと今まで出会って来て、不登校になったり、問題行動を起こしたりして、ドロップアウトする子がたくさんいました。居場所がないと、そういう周辺化した子たちで集まります。クラスで友達はなかなかできなかつたけれど、不良は友達になってくれたと言うんです。やはり子どもにとっ

て人間関係が一番大事だと思いますし、そのためには、自分に自信を持ってほしいと思います。どうやっていくかは難しいですが、いじめや差別をなくしたいです。でも、まずは、自分に自信を持ってもらうために、言葉や勉強をこれからもサポートしていきたいと思っています。

(二瓶) ブラジルと日本の文化の違いは大きいです。例えば、ブラジルでは「ありがとう」は1回しか言いませんが、日本では何回も言います。そこでもトラブルがあるのです。ですから、一番大事な文化を理解し合って信頼することだと思います。

(田上) 時間が少し過ぎてしまいましたので、まとめに入らせてください。会場で「最後に一言」という方はいらっしゃいますか。

(フロア 11) 今日は非常に楽しみで来ました。二瓶さんとはもう 15 年になります。彼女はブラジルから来ていますが、彼女のおしとやかな物言わず我慢する性格は、私とは全く正反対で驚いています。それでずっと長い間お互い理解してきています。私は国際ソロプチミストという女性の世界的なボランティア団体で、高岡では二瓶さんを通じて、もうなくなりましたがブラジルの就学前の幼稚園の子どもたちのサポートや、去年からやっとアレッセに少しサポートできるようになりました。とにかく理解し合うのは一緒です。人間ですから 10 年前も 20 年前も同じで、今は理解するしかありません。高岡市や行政の方もやっと多文化共生を少し認めるようになってきている時代なので、やはりこれは話し合うしかないと思います。

とにかく褒めることです。私はデザイン関係の専門学校をされていて、留学生も来ていますが、来ない子もいます。ただ、在留資格などのために成績や出席日数が落ちかけて必死になっていますが、それよりも何よりも褒めて楽しく授業をすれば必ず来ます。そして、下手でもどんどん日本語を使うようにしながら楽しく褒めていけば、みんな前向きになって勉強しますので、お互いに心を許して褒め合っていて楽しくすればいいと思います。先ほどユリ君が「楽しかった」と言ったのはそのとおりだと思います。楽しかったからそこにいたのだと思います。だから、普通にしていなくても楽しくなればいいのかと思うので、これをもっと進めてください。

(田上) 最後に津村先生、小倉先生、お願いします。

(津村) 今日は重ねてありがとうございます。私は彼らと出会って、むしろ彼らから元気と力をもらっています。僕は酒が好きですが、だらしがないのでいつも彼らに「少し酒を控えろよ」と言われています。僕もつらいときがあって、断念したこともいろいろありますが、彼らから「頑張れよ」「頑張ろうぜ」と力をいつももらっているのです。彼らと会えてよかったと思います。今日はありがとうございました。

(小倉) 今日はどうもありがとうございました。僕は富山大学の人間で、主催者側の一人ですので、皆さんに感謝します。

最初に、今日はいろいろな話がありまして、一つは文化の違いがあると思いました。僕も日本人ですから、これから「ありがとう」は1回だけにしようと思いました。

それから、富山に住んでいる外国人で一番数が多いのは中国人、2番目がブラジル人です。私たち日本人は、この富山に住んでいる中国人たちと同じようにコミュニケーションしようとしたときに中国語を勉強するのでしょうか。ポルトガル語を勉強してブラジル人たちとコミュニケーションを取ろうと考えるのでしょうか。そうではなく、みんなが日本語を勉強するべきだと思ってしまう。その考え方をどこかで変えなければいけないと僕は思いました。実際にそれができるかどうかという問題は非常に難しいですが、ポルトガル語や中国語を勉強しなくてはいけないと思っても思わなくてもいいのは日

本人です。しかし、ブラジル人や中国人たちは日本語を勉強しなければならないという状態に置かれています。その環境の違いは非常に大きいのです。そのことを身に染みて感じる必要があるだと思います。

それから映画を見ていて、僕は大学の教師なので非常に複雑な気持ちになりました。16歳から20歳代前半ぐらいの人たちがこの映画に出てきて、自分の人生を語り、自分が置かれている境遇について自分なりに分析し、自分の将来についても語っています。そして家族のこと、日本のこと、自分の故郷という難しいですがブラジルのこと、さまざまなことを必死になって考えて語っています。そういうことが、例えば今の普通に高校や大学に行った日本人の若者にできるだろうか、それだけのことを語れるだろうかと僕は感じました。多分、語ることは非常に難しいと思います。なぜなら、そんなことは考えなくてもいいからです。つまり、高校に行き、大学に行き、そして普通に就職していい会社に入るという路線に乗れば、何も考えなくてもいいのです。逆に言えば、何も考えないことがこの日本の中でうまくやっていく一つの方法なのです。それでいいのでしょうか。

そこで、僕は「それでいい」と言いたいけれども、それは自分の魂の半分を売ることだと思います。そういう社会になっている今の日本をつくっているのは、少なくとも主権者である私たち日本人の責任だろうと思います。先ほども話がありましたが、今、日本の社会には1年間に3万人の自殺者がいます。それは、世界的に見ても非常にとんでもなくリスクが大きい社会です。その中で若い人たちにリスクを負わせていることを、私のような世代はどうしても考えざるを得ないと思います。今の若者たちに一番多い死亡原因は、当然、事故死です。しかし、それに次いで多いのは自殺です。一番これからエネルギーに生きていかなければいけない人たちが、自分で自分の命を絶つ。それが今の日本の社会です。その中で最もつらい状況に置かれているのは、日本の中のマイノリティーの人たちだと思います。

本当であれば、大学はこういうことをもっときちんとサポートしなければいけません。それが富山大学はきちんとできてこなかったと思うので、これをきっかけにして何かできることをやっていかなければいけないと私は思っています。私は学長でも何でもありませんが、今後こういうことをやりたい、富山でこういう活動してみたいということがあれば、ぜひまたご相談いただければと思います。どうもありがとうございました。

(田上) 皆さん、どうもありがとうございました。だいぶ時間が過ぎてしまいましたが、これから日本が成熟していくために何をしなければいけないか、今のディスカッションの中から少し見えたような気がします。一人一人の行動の変化につながればと思っています。どうもありがとうございました(拍手)。

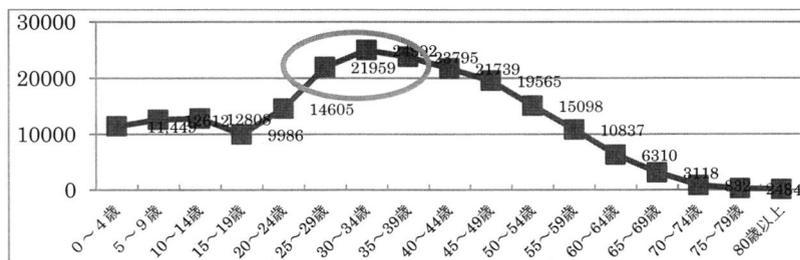
## 1.4. 孤独なツバメたち -子育て編- デカセギ二世世代の母親 2 人の選択

津村公博 (浜松学院大学)

ガブリエラ (22) は、デカセギ目的で来日したブラジル人の子どもで、いわゆるデカセギ二世世代の若者である。同じ二世世代の若者と出会い、みゆう (1 歳) をもうけた。ガブリエラは、昼間は大学に籍を置く大学生だ。高校の時、一年休学して大手家電量販店で働いた経験がある。2008 年末の経済不況の影響で父親が仕事を失い、ガブリエラが働いて家族を支える必要があったからだ。ようやく父親が仕事に就いた時に高校に復学して、今までの遅れを取り返すように勉強して大学に合格した。ガブリエラと一緒に住む彼 (子どもの父親) は、非正規雇用の派遣労働者であるため仕事がない時も多い。経済的に不安定であるため、ガブリエラは大学での授業の後に夜間に塾で講師のアルバイトをする日もある。その間、子どもを彼の母親が預かっている。くたくたに疲れて彼の母親宅に寄り子どもを連れて帰る時に、子どもと一緒に過ごせない自分が情けなく自然と涙があふれる。

スザーナ (20) も、幼い子どもが 2 人いる。ガブリエラとスザーナは親友だ。2 人はいつでもお互いの子育てを相談し励まし合ってきた。子どもの将来についても毎日のように話し合った。そんな中、スザーナは子どもの将来を考えてブラジルに帰国する決心をした。スザーナ自身は日本の公立学校は外国人である彼女には学力も何も期待されていないと感じ、やがて勉強する意味や学校に籍を置く意味を見つけれなくなった。14 歳で中学校を退学<sup>1</sup>して働き始めた。彼女の周りにも中学校を退学して工場で違法<sup>2</sup>に働き始める子どもがいた。しかし、今は学校を退学したことを後悔している。「日本の学校は、外国人の子どもに本気で勉強させようとはしない。デカセギの子どもだからやがて国に帰ると思っているから。外国人の子どもに正面から向き合おうとしない日本の社会の中では、外国人の子どもは将来はないと思う。私のように欲しくない。子どもをしっかり受け止めてくれるブラジルで教育を受けさせ、ブラジル人として育てたい」と強い口調で話した。

1990 年 (平成 2 年) の出入国管理及び難民認定法 (以下入管法という) 改正で多くの日系ブラジル人の労働者が日本に渡ってきた。入管法改正当初は、単身で来日して短期間でお金を貯めて帰国した。しかし、徐々に家族を呼び寄せて生活する者も増えてきた。幼くして連れて来られた子どもや日本生まれの子どもたちは、20 歳前半から 30 歳後半になった。法務省登録外国人統計表 (国籍別: ブラジル) では、「25 歳~39 歳」の年齢層に属していると考えられる。この年齢層の登録者数は他の年齢層よりも多く、7 万人 (70,746 人) を超えており、ブラジル人の外国人登録者数全体の 37% に上る。



(「2011 年法務省の登録外国人統計表 (国籍別: ブラジル)」から作成)

日本で教育を受けたデカセギ第二世代の若者の中には、親が帰国しても日本に留まり生活をする者も多いことも、青年層の年齢が高い要因の一つであろうと推測される。

ガブリエラもスザーナもそのようなデカセギ第二世代の青年たちだ。彼らは、日本で青年期を迎え子どもを産んで育てる時代になった。しかし、第二世代の若者たちの子育ては厳しい。デカセギ労働者はブラジルの拡大家族を離れて日本での単一家族でのデカセギ生活が始まる。異なる文化での慣れない生活から地域で孤立化するなか母親も含めて兄弟も働き始め家族の共有する時間が少なくなり家族の役割も担うことが少なくなる。デカセギにより家族結合がゆらぎ、親が離婚をして兄弟が家を出るなど家族がバラバラになることも珍しくない。

2008年の経済不況は、輸送用機器を中心とした企業の集積地を直撃しデカセギ労働者から仕事を奪った。日本政府が再雇用を望めない厳しい雇用環境にあるデカセギ労働者に対して一定額の帰国支援金を支給する支援<sup>3</sup>を実施したこともあり、デカセギ家族の中には帰国する者と日本に留まる者に分かれ、さらなる家族の分散化を招く結果となった。そのため、家族の分散化により子育てを家族に頼ることができない者も多い。さらに、デカセギ第二世代の若者の中には、結婚しないまま子どもを育てる者も少なくない。ブラジル人同士が日本国内で結婚する場合、母国と日本の両方へ婚姻届を出す必要があり、婚姻手続きの面倒を避ける者も多い<sup>4</sup>。なかには、子どもを産んだ後に結婚しないまま別れてしまうケースもある。ガブリエラは、近い将来彼と婚姻の手続きを始めるつもりだ。「(ブラジル人は)子どもができたために一緒になる。正式な結婚をしていないから夫婦や親としての自覚がない人も多い」と正式な婚姻関係の重要性を言う。ガブリエラとスザーナの子どものかかりつけの小児科の院長は、「彼らの親たちは、子育ては家族や同じデカセギの人たちで助け合っていた。しかし、その子どもたちの子育ては孤立している。日本人の若い母親たちの子育てサークルにも入らない」と語る。

ガブリエラはスザーナが日本を離れる日の朝、スザーナを見送った。彼女は、日本で子どもを育てるつもりだ。「一人になってしまった。ブラジルで子育てをするスザーナにうらやましい気持ちもある。正直、子どもはどちらの国で育てるべきか気持ちが揺れる時もある。しかし、今は大学を出て一生懸命働いて日本でみゆうを育てることが私の責任。だから、この選択を絶対に後悔したくない」

<sup>1</sup> 日本の義務教育は、日本国籍を有しない外国人の子どもには適用されていない。

<sup>2</sup> 一方、労働基準法や職業安定法など労働関係法案は、外国人にも適用される。労働は労働基準法の56条(最低年齢)で「使用者は、児童が満15歳に達した日以降の3月31日が終了するまで、これを雇用してはならない」としており、中学校に在学中には働くことはできない。

<sup>3</sup> 「我が国での再就職を断念し、母国に帰国して、同様の身分に基づく在留資格による再度の入国を行わないこととした者及びその家族」を対象に帰国支援を実施した。

<sup>4</sup> 出生登録証明書、独身宣誓書、証人2名による宣誓書等の他ブラジルから直接、婚姻要件具備証明書なども取り寄せる必要がある。

## 第2章 富山県の状況

米田 哲雄（子どもの日本語グループ）

### 2.1. 富山県に住む外国人の子ども

#### 2.1.1. 富山県に住む外国人児童生徒総数（市町村別、学校種別）は次のようである。

表1 外国人児童生徒総数（小・中・高校の総数）

	2007年度			2008年度			2009年度			2010年度		
	小	中	高	小	中	高	小	中	高	小	中	高
富山市	56	30		69	25		55	38		55	30	
高岡市	128	36		151	57		150	46		150	50	
魚津市	1	0		1	0		2	0		2	0	
氷見市	3	1		7	2		5	2		5	0	
滑川市	5	0		6	1		0	1		0	0	
黒部市	5	1		11	0		3	1		3	1	
砺波市	11	2		14	2		10	7		10	4	
小矢部市	2	5		1	5		7	1		7	0	
南砺市	14	1		10	2		15	3		15	8	
射水市	73	19		95	21		115	30		115	24	
舟橋村	0	0			0		0	0		0	0	
上市町	2	0		1	0		1	0		1	0	
立山町	0	1			1		0	1		0	0	
入善町	0	1		3	0		2	1		2	0	
朝日町	5	0		2	1		4	2		4	4	
計	305	97	25	371	117	44	369	133	39	339	121	47
*公立高校			19			21			22			27
私立高校			6			23			17			20

出典 富山県多文化共生推進プラン改訂版 2011 学校基本調査

富山県に住む外国人児童生徒数は507人である。この中には、オールドカマーの子どもたちが含まれる。

#### 2.1.2. ポルトガル語やタガログ語・ウルドゥ語など非漢字圏の子どもが多くいる（表2）

「外国人児童生徒総数」表1と「日本語指導が必要な児童生徒数」表2を見ると、リーマン・ショック以来、ポルトガル語話者が少なくなり、それが2010年30人程度の減少となっている。

ウルドゥ語が第2位であることに目を向けたい<sup>1</sup>。伏木港を中心とする貿易関係者が多く、定住化が進んでいる。しかしながら、ウルドゥ語に関する子ども対象の具体的な指導教材はほとんどない。このため、効果的な日本語指導がままならない状態である。現在富山大学極東研究センターが東アジア方面の子どもに関わることで、国立国語研究所の「移民コミュニティの言語生活研究会」がウルドゥ語を母語とする子どものことに関心を寄せている。この言語グループに翻訳などでの自助努力と学校関係者の経験蓄積を期待したい。なお、2011年から富山県教育委員会がウルドゥ語版「外国人の高校進学」説明ガイドを出している。ウルドゥ語話者の中には、既に高校進学の時期を迎える者がいるから、時宜を得た動きである<sup>2</sup>。

表2 外国人児童生徒・市町村別・母語別 2010年<sup>3</sup>（言語については、指導必要数の内訳）

	外国人児童生徒数 ①	日本語指導が必要な者②	日本語指導が必要な者②の内訳					必要な子割合 ①/②×100
			ポルトガル語	タガログ語	ウルドゥ語	中国語	その他	
富山市	92	50	12	13	7	11	7	54
高岡市	172	122	104	4	7	7		71
魚津市	2	2		2				100
氷見市	6	1				1		17
滑川市	2	2		2				100
黒部市	3	1				1		33
砺波市	15	5	4			1		33
小矢部市	7	4	4					57
南砺市	17	7	3			3	1	41
射水市	135	112	50	16	28	3	15	83
舟橋村	1	1				1		100
上市町	1							
立山町								
入善町	2	2	1			1		100
朝日町	8	4				3	1	50
合計	463	313	178	37	42	32	24	68

出典 富山県多文化共生推進プラン改訂版 2011年

日本語指導が必要な児童生徒数と外国人児童生徒の割合を見ると、数の多い高岡市は71%、射水市83%、富山市54%となる。特徴的なのは射水市で、日本語指導が必要なもののかなりがウルドゥ語話者である。

### 2.1.3. 第2世代に目を向けよう

国際結婚<sup>4</sup>の増加により、富山県でも出生した子供が増えており（表3）、年平均80名である。容貌から日本人と思われる場合もあれば、一見して分かることもある。養育の中心が母親である状態を考えれば、母親の言語能力、文化的態度が子どもの成長と深く関わる。これは従来の学校の指導観では対応できない課題を生む。例えば、絵本の読み聞かせが難しいとか、十分な日本語の環境ではないとか、生活習慣に独自性が見られるとか、それは大いに教育に影響をもたらす。しかし、この点の影響はあまり関係者に自覚されていないし、日本では研究も少ない。

\*数値はあくまでも出生時のものであり、その後の社会的移動によって変動する。

表3 富山県で出生した外国人の子ども（親の両方または片方が外国人の子） 出典 国勢調査

	出生年									
	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
→										
現在中学校在籍	64	128	81							
	3年	2年	1年							
→										
現在小学校在籍	82	69	89	89	82	99	108			
	6年	5年	4年	3年	2年	1年	就学前			

## 2.2. 日本語指導が必要な児童生徒数

富山県には、日本語が十分分からず、学習の進まない子どもたちが313人いる。

表4 日本語指導が必要な児童生徒数

		全国 19位	全国 18位	全国 17位	全国 18位
		2004年度	2006年度	2008年度	2010年度
小学校	外国人児童数	226	272	371	339
	日本語指導の必要な児童数	134	224	281	240
	外国人児童数に対する比率%	59.3	82.4	75.7	70.8
	「指導が必要な児童」がいる学校数	39	57	60	53
中学校	外国人生徒数	99	83	117	121
	日本語指導の必要な生徒数	61	52	67	71
	外国人生徒数に対する比率	61.6	62.7	57.3	58.7
	「指導が必要な生徒」がいる学校数	21	24	33	30
県立高校	外国人生徒数	26	25	44	47
	日本語指導の必要な生徒数	2	0	1	0
	外国人生徒数に対する比率	7.7	0	0	0
	「指導が必要な生徒」がいる学校数	2	0	1	0
計	外国人児童生徒数	351	380	532	509
	日本語指導の必要な児童生徒数	197	276	351	313
	外国人児童生徒数に対する比率	56.1	72.6	66.0	61.5
	「指導が必要な児童生徒」がいる学校数	62	81	94	84

文部科学省調査 計には特別支援学校1校、2人を含む(以下同じ)

出典 文部科学省「日本語指導が必要な外国人児童生徒の状況」

富山県の「日本語指導が必要な外国人児童生徒」数は全国17～19位である。従って比較的外国人児童生徒の「多い」県と言える。

日系外国人定住化が進み、少子高齢化等から国際結婚が増え、さらに留学生受入数が多くなって外国人児童生徒の増加が顕著になってきたこと、富山県は比較的製造業が盛んな地域であることの結果といえる。入国管理法の変更以来20数年を経て、当然のことながら中学生年齢の増をもたらし、一部は高校で学ぶ時期に入っている。にも拘らず、学校現場では問題意識が希薄であり、対策は遅れている。そこで、2010年を中心に富山県の特徴を取り上げ、課題を明らかにしたい。

### 地域の特徴

- 外国人児童生徒が多いのは次の3地域である。  
高岡市172人、射水市135人、富山市92人、この3市で86%を占める。  
この中で、日本語指導が必要な外国人児童生徒は  
高岡市122人、射水市112人、富山市50人で計284人91%である。
- 富山県は外国人散在地域と言われているが、この3市は集住都市と言った方が良い<sup>5</sup>。
- 日本語指導必要数の言語別ではポルトガル語178人 ウルドゥ語42人 フィリピン語(タガログ語)37人 中国語32人。この4言語で92%である。
- 大まかな地域的傾向 高岡市は日系南米人が多い。射水市は東アジア貿易に係る関係者が多い。富山市は中国籍が多く、国際結婚が目立つと同時に、多国籍の人々が住む地域である。

- ・ 県内 84 の小中学校に日本語指導が必要な児童生徒が在籍する。これは小中学校の 63.2%に当たる。
- ・ 表 5 は、数の多い 3 市の 1 校あたり平均人数である（2010 年）。

表 5 外国人児童生徒の 1 校あたり人数

いまや外国人が学校にいるのは特別なことではなく、普通の状態になっている。それ故にか、外国人と言っても「特別な配慮はしない、それが平等である。」という声が出ることもあり、学校や教員によっては、外国人の子どもを「見ない子」「見えない子」にしてしまう恐れがある。

	小学校	中学校
高岡市	5.6	4.2
射水市	7.7	3.4
富山市	0.9	1.2

## 2.3. 外国人児童生徒を支える態勢

### 2.3.1. 直接外国人児童生徒と接する教員は、学級・教科担任の他に日本語教員と支援者の 2 種がある。

表 6 富山県の子どもと支援者数

		子ども数 2010 年度	支援者 2011.7		
			加配教員 12 人	適応指導員 5 人	相談員 19 人
小学校	日本語指導が必要な児童数	240			
	支援者等のいる(行った)学校数	53	10 校	10 校	39 校
中学校	日本語指導が必要な児童数	71			
	支援者等のいる(行った)学校数	30	2	6	13
高校	日本語指導が必要な児童数	0			
	支援者等のいる(行った)学校数	0	0	0	0
計	日本語指導が必要な児童数	313			
	支援者等のいる(行った)学校数	84	12	16	52
出典 多文化共生推進プラン改訂版			加配教員は学校に常在する	5 人が 16 校を週 1~2 回担当する	19 人が 52 校へ行く

学級担任を除けば、少数の関係者が外国人児童生徒の指導に東奔西走している（表 6 に含まれない市採用支援者がいる。指導員・相談員 17 人）。

① 加配教員は外国人児童生徒等日本語指導員ともいわれ、現職教員である。しかし、教員資格の中に「日本語」はなく、教員養成関係大学でも取り上げられていない。したがって、校内人事の中で「この人はどうだろう」と思われる人を日本語（国際）教室の担当としている。年に 1 回、筑波の教員研修センターで 4 日間行われる「外国人児童生徒等に対する日本語指導者養成講座」（いわゆる中央研修）を 1 名程度が受けたり、大学の日本語関連講座へ 3 か月程度の短期留学をしたりして実務に当たっている。

通常 1 校 10 名以上の外国人児童生徒がいる場合 1 名の加配教員がつき、国庫補助金が出る（2011 年、全国の小中学校に 1285 人、高校に 40 人。単独で 5 人とする県もある）。同一教員が長期にその立場にある場合と短期間でめまぐるしく交代する場合がある<sup>6</sup>。加配教員は該当者を学級から取り出し別室で指導するが、これは子どもの人数次第で、期間も千差万別となる。指導時間も同様週 2~4 時間だが、変動することが多いようである。加配教員の校内における立場が確立されていない場合があり、役割の明確化が大切である。

② 外国人児童生徒適応支援員は、外国人児童生徒指導上の困難を抱える学校に一定期間配置し、学習や生活の補助を行う。加配教員同様、子どもの日本語指導について特別の訓練を受けた者ではなく、子どもの母語がある程度分かることで教員免許は問われない。一番の問題は「緊急雇用創出事業」で行われていることで、仕事は不安定、時給、短期契約である。子どもの母語理解や教員資格の是非などから、はたして適切な人材確保が可能なのか、議論の残るところである。

- ③ 外国人相談員は外国人児童生徒のいる学校へ必要に応じて派遣される。主な仕事は、生活指導や学習指導に当たる日本語指導員への補助、保護者との相談、教材作り、日本・外国の生活習慣などの説明、就学事務の援助などだが、保護者への連絡事項を翻訳し、伝える仕事が多くなる。これらには学校教育に対する深い理解が必要で、単なる通訳で済む仕事ではない。「外国人のことはあなたに任せた」と丸投げされる場合もあり、短期契約の身で責任の重さにお手上げ状態である。どのような言語の相談員が準備されているかも不明である<sup>7</sup>。

学級担任や加配教員・適応指導員・相談員が互いに関わる児童生徒の情報を共有し、協力して指導することが大切だが、その要は、校長をはじめとする学校運営の立場にある人々である。この層の理解、指導技術は十分とは言えない。

現実には、加配教員・適応指導員のいる学校は少数であり、学校それ自体の支援体制の早急な改善が求められる。さらに色んな部分を地域のボランティアが担っているが、それとてほんの少数者を対象にしているに過ぎない。地域ボランティアを発掘し、その人々との協働活動をどう進めていくか、これが地域にひらかれた学校の新しい課題となっている。

現在、Web上に「多言語・学校プロジェクト（通称“かすたねっ”）」で13言語、4000点の連絡文書を検索のできるが、この存在そのものが日本人教員に周知されているわけではない。多文化共生時代を迎え、阪神大震災以来、日本語について「やさしい日本語」の考え方が唱えられてきた。これは学校や行政においても重要である。外国語、母語に翻訳すれば、あるいは手引きやチラシ・お知らせを出せばそれで伝わると考えるのは早計である。外国人保護者は多種多様、全ての人が均質の教育を受けているわけではない。教育委員会・学校の担当者は、常に各言語グループやボランティア団体との接触を持ち、彼らの実情を理解し、育てる努力が大切である。

### 2.3.2. 教員や関係者の研修を充実させる

富山県総合教育センターは、かなり早くから外国人児童生徒教育実践講座を開いていたが、「挨拶言葉」程度の語学研修、文科省主催研修会(中央研修)の伝達などに時間を割いていた。最近まで教員資格者以外の参加を認めず、「受講者3名で研修会をやった」など形骸化していたと見られても仕方がない。研修関係者には外国人児童生徒や関係する教員の実情を的確に把握し、企画実施することが求められる。本年度、会場を外国人児童生徒の多い学校に移すなど、いくらか改善の意図がうかがえる。また、地域ボランティアとの連携・協力も必要である。

### 2.3.3. 外国人生徒には、どんな進路があるのか

富山県の外国人生徒の中学校卒業後の行方については、全く分かっていない。高校進学率は、公表されている各種統計から推測すれば約30%である<sup>8</sup>。

県内ボランティアグループが2011年「高校進学プロジェクト in とやま」をたちあげ、多言語の説明資料を使って高校進学説明会を開いた。2012年度は高岡・射水・富山市の3か所で行っており、保護者からは「すべて初めて聞いた話」との声が寄せられている。外国人生徒の場合、とりわけ保護者は、進学についての知識・情報はゼロであると考えたほうが良い。経済的な準備も重要であるから、学校は若い年齢からの進路指導に留意すべきである。将来彼らがどんな生き方をするか、その手がかりを提供しなければならない。それがひいては「日本人にも外国人にも暮らしやすい」社会を目指す富山県の姿勢に合致する。(6章参照)

<sup>1</sup> 富山県のウルドゥ語を母語とする児童生徒数は、全国9位である。

<sup>2</sup> 富山県教育委員会は高校進学ガイドを多言語紙資料と動画DVDで配布している(Webでも取得できる)。

<sup>3</sup> この表には、日本国籍をもつが「外国につながる～」子どもは含まれていない可能性がある。

<sup>4</sup> 多くは日本人男性と外国人女性である。

<sup>5</sup> 外国人集住都市について、明確な規定はない。

<sup>6</sup> 外国人児童生徒指導者の広がりや指導技術継承がうまくいかないことがある。

<sup>7</sup> 2004年1年間にわたって「子どもの日本語グループ」が外国人児童生徒指導の学習会を開いていた時、複数のスクール・カウンセラーが参加していた。「教員から相談を受けても答えられない」ことが参加動機であった。

<sup>8</sup> 国勢調査年齢別人数 都道府県別登録外国人統計 学校基本調査 日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査 (なお、富山県全体の高校進学率は99%である)

## 第3章 子どもたちの進学

### 3.1. 問題のありか

青木由香（アレッセ高岡 代表）

日本語を母語としない子どもたちには、日本での生活において様々な問題があるが、とりわけ学業の達成に関しては大きな困難を抱えており、これが将来的には彼らの深刻な就業問題へと繋がっていく。教科学習における困難は小学校に入学した時点から始まっているが（もちろん、途中転入した子どもたちは更に困難が大きい）、困難は段々と積み重なり、小学校や中学校の段階で中退してしまう例も見られる。小学校や中学校が「義務教育」ではない外国籍の彼らは、大きな壁に突き当たり挫けそうになっても、法に守られることなくドロップアウトしてしまうのである。富山県においても、2008年射水市において学齢期の子どもの不就学調査<sup>1</sup>が行われ、小学校の就学率94.4%、中学校の就学率82.6%と、それぞれ5.6%、17.4%の外国人の子どもが不就学の状況にあることが明らかになり、関係者に衝撃を与えた。

しかしながら、小学校や中学校、そして地域の支援者も、この状況を手をこまねいてただ見ていたわけではない。5章に見るように、様々な手立てを講じて状況を改善しようと試みている。とはいえ、子どもの「学習言語」の習得には時間がかかり、授業に十分ついていけるようになるまでの間に、子どもたちは「義務教育期間」を終えてしまう。そこに彼らを待ち受けているのは、高校受検である。

日本語を母語としない子どもたちの高校進学率や就学率は、一部の地方自治体を除いて全国的にも公表された正確なデータはないが、概ね5割前後と言われている<sup>2</sup>。富山県においてもきちんとした調査は行われていないが、米田哲雄氏の報告によると、県内の高校進学率<sup>3</sup>は推定約4割<sup>4</sup>、「通学率」<sup>5</sup>に至っては推定約3割であるという。この数字は、統計値の計算によってはじき出されるものであり、別地域への移動や年齢層のずれなどを考慮しておらず、正確に実態を反映しているとは言えないかもしれない。しかし、そのことを考慮に入れたとしても、この数字から推測される現実を決して明るいものではない。

高校受検という子どもの人生を大きく左右する一大イベントにおいて、富山県には、特有の問題が存在している。一つは、2010年の時点で、富山県の県立高校の入学試験において、外国人生徒に対する特別枠や特別措置が何一つ設けられていなかったこと<sup>6</sup>。もう一つは、日本における高校の位置づけや富山県の入試のシステムなどの情報を多言語で提供する場がなかったことである。もちろん、富山に住む外国人の子どもたちの高校進学を阻むものは、他にも数多く存在する。しかしながら、この2つが他県に住む子どもたちよりも富山の子どもたちを苦しめている大きな要因であるということは、県内の支援者の間では共通認識となっていた。

以下、この2つの問題について、状況を変えようと立ち上がった地域支援者の動きを3.2.と3.3.で、これを受けての富山県の対応を3.4.で、最後に、現在の全国の状況と今後の課題を3.5.で報告する。

<sup>1</sup> 外国籍子どもサポートプロジェクト（2008）『2007年度外国籍子どもサポートプロジェクト報告書』財団法人とやま国際センター

<sup>2</sup> 3.5で示されているいくつかの自治体の進学率はこれに比べて高い数値を示している。これらの自治体は、外国人集住都市会議にも参加し、多文化共生や外国人の子どもへの教育に力を入れているところであり、不就学調査も含め、積極的に子どもの実態を把握し、自治体をあげて支援を実施した結果であると言えるだろう。

<sup>3</sup> 「推定進学率」； $\text{高校生徒数} \div \text{中学校生徒数} \times 100$ （外国人のみ）（出所；学校基本調査）

<sup>4</sup> 2005年は25.5%であったが、2010年は38.8%と、上昇傾向にはあると言える。

<sup>5</sup> 「推定通学率」； $(\text{通学の傍ら仕事} + \text{通学}) \div 15 \sim 19 \text{歳の総数} \times 3/5 \times 100$ （出所；国勢調査の年齢別人数）

<sup>6</sup> 2010年当時、外国人生徒に対する特別枠や特別措置を全く設けていない自治体は、富山を含めて6府県のみであった。

## 3.2. 高校入試特別措置に向けた動き

橘 秀雄（富山県南米協会 事務局長）

### 3.2.1. 南米協会とは

南米協会は、本県からの中南米移住者（戦前・戦後計 2256 名）及びその子孫家族との絆を大切に継続し、ブラジル、アルゼンチン、ペルーの 3 か国の県人会及び各地の支部をはじめ、本県から進出した YKK、不二越などの現地で活躍される本県関係者や企業活動を通じて、南米諸国との交流を深め、友好親善に寄与したい趣旨で、昭和 54 年に設立された。

### 3.2.2. 在住のデカセギ日系人

一方、時代が変わり、近年では、かつて日本から南米に移民した人口に相当する約 30 万人の日系人がデカセギのため滞在し、県内でも高岡市、射水市等を中心にピーク時には約 4800 人（06 年末）が在住していた。

本会でも、これらデカセギ日系人の労働及び教育に関する問題に強い関心をもち、とくに子供の教育については、ことばと文化の壁等による不就学や不登校に心を痛めていた。

### 3.2.3. 「アレッセ高岡」「進学プロジェクト in とやま」の活動紹介の記事

2010 年 8 月 13 日北日本新聞に外国人中学生の高校進学を支援しようと、ボランティアグループ「アレッセ高岡」によって行われている学習支援活動、およびボランティア有志「進学プロジェクト in とやま」によって開催された外国人親子のための高校進学説明会を取り上げた記事『夢実現へ高校進学を』（文化部・橋本真弓記者）が掲載された。その記事の終わりには、神奈川県で実施されている外国人生徒に対する高校入試の特別措置を紹介し、「一方、富山県教委は『要望がない』などとして、現在のところ特別な措置を取っていない。」と結んであった。しかし、日本の社会に明るくないデカセギの彼らには、直面する切実な問題でも、「要望」などという形式で公に声を出すことなど、非常に困難であろうことは容易に推測できた。

### 3.2.4. 県内の支援者が集まり、連名で要望書を提出する

記事を一読して、これは、「深刻で放置できない重大な問題」であり、本会がこの機会を見逃さず、「進学プロジェクト in とやま」の活動と県教委との「橋渡し役をせざるを得ない」と直感した。そこで事務局で早速、要望原案をまとめた。その要望書を当時の鹿熊安正南米協会会長にお諮りしたところ、趣旨に快く承諾され、記事から 2 週間余り経過した 9 月 2 日に、自ら県教委に足を運ばれ、東野宗朗教育長、荒井克博理事（教育次長）、山崎弘一県立学校課長が並ぶ席で、説明のうえ、直接要望書を手渡された。東野教育長は、その席で「県教委として先進地等の状況を調査し、できることから始めたい。そのため、しばらく期間の猶予がほしい。」旨を回答された。

その後、この問題意識は広がりを見せ、県内の他ボランティアリーダー、日本語教師、研究者などが集まり、2011 年 1 月から「有志の会」が開かれるようになった。有志の会は「外国につながる子どもを考える会」と名乗り、メンバーで練り上げた要望書と、なぜそのように考えるかを示す参考資料を提出する動きに発展する。2011 年 6 月 1 日、連名 16 名で、知事への要望書提出と教育委員会への要望書提出を行ったと聞く。

このような動きの結果、県教委は平成 24 年春の入試より、要望のうち入試問題中の漢字に振り仮名がつけられる特別措置を実施した。しかも振り仮名つきの試験を受けられるのもその受験生が渡日してから 6 年の間である。この期間に決定されたのは、学習言語の発達に配慮されたためと考えられる。この措置により受験の条件が改善され、これまでに比べ大きく状況が前進したことになり、たいへん喜ばしい。

### 3.2.5. 今後の課題

南米協会が中心となって、速やかな対応ができたのは、私が約15年前にとやま国際センター（TIC）事務局長の頃、義務教育年齢なのに平日の昼中に無為にロビーで時間をつぶす日系人の子どもを気にかけて、外務省主催の全国会議等で問題を提起し、対応を求めていたからである。このような状態を放置すれば、中卒でもない日伯両語とも不十分な定職に就けない若者が生まれ、多文化共生などとは程遠い社会になる懸念がある。彼らをどのように支援していくかは、私にとって積年の課題であった。

以上のような経緯で、平成24年度より、漢字に振り仮名が振られるようになったわけだが、子どもの現実に目をやると、漢字や漢語が苦手な子どもは文字表記の問題というより、日本語の語彙自体が少ないのが実態であると言える。しかし、実際に受験できるレベルに達する日系人の子どもの割合が極めて低いようで、心を痛めている。従って、今後ともより一層、日本語指導、教科指導が充実していくことを希望する。さらに入試そのものについても、今回の措置からさらに踏み込んで、外国人特別枠等を設けた上で、高校入学後も日本語の指導を受けられるようなシステムを作ることが肝要であろうと考える。

受益者である外国人（生徒・保護者）、実際に指導を受けもつ学校現場及び制度を施行する県教委の三方ともにメリットがもたらされるよう願っている。

【北日本新聞 2010年8月13日】

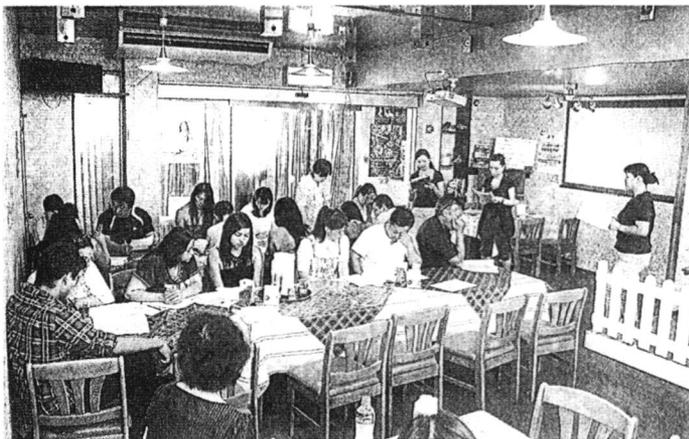
青木代表は「外国人で『中卒』では、アルバイトや派遣社員など不安定な雇用形態で働かなければならないケースが多い。目標の職業に就きにくいことを、日本で暮らす外国人は知らないで指摘する。説明会には30人余りが参加し、高校の学科や入試スケジュールといった基礎知識、奨学金制度、推薦制度などについて理解を深めた。客室乗務員が通訳になりたいという中学3年生のシルバ・サマタさん(15)は「国際コースがある高校に行きたい。目標の学校に何点あれば合格できるのか分かった」と意気込んでい

文部科学省の学校基本調査によると、県内の外国人中学生は平成17年度から21年度にかけて約80～130人で推移している。一方、同じ期間の高校生は約20～40人で、中学生に比べて少ない。「3割程度しか進学していないのではなかろうか」と関係者もいる。今回の説明会は、高岡市で外国人の中学生向けの高校進学教室をボランティアで運営する「アレッセ高岡」の青木由香代表(33)が中心となって開いた。

## ブラジル人対象に説明会

夢をかなえるには、まず高校へ。受験を控えるブラジル国籍の中学生と保護者を対象に、進学説明会がこのほど、高岡市内で開かれた。日本の高校や就職についての情報が不足し、教育制度の違いもあって、進学を選ばなかったりあきらめる外国人中学生は多いという。主催したボランティアグループは「就職など将来の可能性を広げるためにも進学してほしい。日本人は異国で暮らす外国人の苦勞を理解して」と呼び掛けている。  
(文化部・橋本真直)

# 夢実現へ高校進学を



## 公的支援求める声も

進学を希望しても、必要な学力が足りないことを受験間近になるまで把握できない人もいる。ブラジルでは数年前

まで日本の小中学校に相当する初等教育で「留年制度」があり、一定の成績以上でなければ進級できなかった。青木代表によると、日本に同様の留年制度がないと知らないブラジル人は、進級できるのは児童生徒に求められる学力があるからだと思いい、中学校で入試の相談をした際に初めて進学できるレベルに達していないことに気付くという。

いじめられる不安や「いすれ帰国するので教育は必要ない」という考え、学費負担の心配などを理由に進学を躊躇う人もある。青木代表は「先輩の体験談を聞くことで、楽しく通学していることを知ったり、奨学金制度といった解決策が見つかることもある。尋ねる姿勢が必要だが、周囲の日本人も情報提供などで手を差し伸べてほしい」と言う。

公的な支援を求める声も強い。県教委は、外国人生徒の教育について各学校に手引きを配布しているが、個人への対応は各校に任せている。入試は日本語が不得意な外国人中学生にとっては大変だ。神奈川県は、水俣市のために来日して6年以内の中学生を対象に、一定の条件を満たせば、試験問題に振り仮名を付け、時間の延長を認められている。外国人と、日本国籍を取得して3年以内の人について、特別枠を設ける公立高校も10校ある。同県教委の担当者は「就学の機会を保障するため」と説明する。

一方、富山県教委は「要望がない」などとして、現在のところ特別な措置を取っていない。青木代表は「支援が行き届いていない学校もある。まだまだ協力が必要」と話している。

試験の勉強方法や高校の入学金などの説明を熱心に聞く参加者

高岡市内

### 3.3. 進学説明会の実施について

青木由香（進学プロジェクトinとやま）

#### 3.3.1. 問題のありか

子どもの進学は、保護者の意向や経済力に非常に大きく左右される。外国人の家庭においては、子どもに比べて保護者の方が日本語力も弱く、日本の文化・習慣に関する知識、とりわけ日本の教育に関する情報に疎い傾向がある。日本の高校進学率は98%に上り、ほとんどの中学生が半ば当たり前のように高校を受検すること、日本の社会において「中卒」はもちろん「高卒」の資格を有しているかいないかがその後の進学や就職に大きな影響を与えること、高校への進学にはどの程度の費用が必要とされるのかということ、また、高校によって入学時・入学後の費用が大きく異なること、さらには、都道府県によって異なる複雑な受検のシステムが存在すること（国立／県立／私立、全日制／定時制／通信制、推薦／一般、1次募集／2次募集など）、これらのことは、日本人であれば（受検システムについては、「富山県民であれば」）、常識的なことがらとされ、改めて説明されることもない。各中学校においては、全ての中3生とその保護者を対象とした進学説明会が毎年開催されているが、これは以上の知識を前提として、具体的な受検の日程等について説明するものである。しかしながら、外国人保護者にとっては、そもそも前提となる上記のようなことがらを「知らない」のみならず、「知らないということを知らない」のであり、子どもが受検をする中で実際に問題が生じてから「知らなかったということを知る」という状況にある。

各地域の支援ボランティアは、子どもの進学・受検制度に関して外国人保護者から質問や相談を受けることがあっても、問題が生じた後ではどうすることもできないケースが多々あった。日本の教育制度や高校の位置づけ、富山県の入試のシステムや高校進学に係る費用について、事前に多言語による情報提供の機会を設ける必要性を強く感じていた。

#### 3.3.2. 民間ボランティアの連携による県内初の説明会の実施

2010年5月、共通した問題意識を持つ県内各地に点在する支援ボランティアが集まり、県外では既に実施されている多言語による進学説明会を富山でも開催しようと、話し合いが設けられ、「進学プロジェクトinとやま」が発足した。これは、地域や所属、立場を超えて目的を同じくする有志が集まったプロジェクトチームである。その後、メンバーで分担して支援先進地区の情報を集め、説明会の現場に足を運んでノウハウを学び、外国人に対する高校進学に関する資料の富山県版（やさしい日本語）を作成した。

そして、まずは高岡市に多く住むブラジル人をターゲットに定め、資料をポルトガル語に翻訳し、高岡市内の各小中学校にチラシを配布してブラジル人保護者への周知を行い、2010年8月1日、高岡市内のブラジル料理店コラサン・ド・ブラジルにおいて、県内初の外国人のための進学説明会を実施した。当日は、約30名のブラジル人親子が集まり、資料を元にした各種説明、高校受検体験者の話などがポルトガル語の通訳を介して行われた。その後、資料の中国語翻訳版も作成し、同年10月17日には射水市橋下条公民館においても、地域の国際交流イベント内にブースを設ける形で、ポルトガル語と中国語の二言語対応による説明会を実施した。しかし、この時は射水市の小中学校の学校行事と重なってしまったこともあり、参加者が中国人保護者1名しかいなかった。

初年度の経験から、地域のボランティア単独で説明会を実施することは、当事者の説明会へのアクセスを容易にする日時や場所の設定においても、提供する情報の範囲や詳細さにおいても、限界があるということを痛感し、やはり、各学校や教育委員会等、学校関係者の力が必要であるという結論に至った。

### 3.3.3. 富山県教育委員会による説明会の実施

民間ボランティアによる説明会の実施が各メディアで取り上げられたことで、外国人の子どもたちがぶつかる高校進学の問題についての県内における認識が広がり、高校入試において外国人生徒に対する何らかの配慮を求める声が少しずつ高まってきた。2010年9月の富山県南米協会の動きに引き続き（3.2.参照）、2011年6月には「外国につながる子どもを考える会」（代表 米田哲雄、山崎けい子）が富山県知事および富山県教育委員会に「外国につながる子供の高校入試特別措置に関する要望」を提出したが、この要望書の中には、県教育委員会等の主催による「外国人保護者対象の進学説明会」の実施についての項目も加えられた。

これら要望書等の声を受けて、2011年12月、富山県教育委員会は、ポルトガル語、中国語、タガログ語、ウルドゥー語、英語の資料を作成し、高岡市、富山市において県教委主催の外国人を対象とした進学説明会を実施した（3.4.参照）。民間ボランティア主催の説明会と比べ、より各中学校における保護者への情報の周知が図られたこと、提供される情報がより正確で詳細であったことなど、専門家による情報提供の有効性が確認された。

しかしながら、県教委による情報の提供は県立高校に関するものに限られることなど、限界も存在することが判明した。また、残念ながら、県教委主催による説明会の実施は2011年度のみであり、次年度以降は2011年の説明会の模様を撮影したDVDを配布することで対応するとされたことなど、2012年度以降の情報提供をどう行っていくかについての課題は残された。

### 3.3.4. 官民連携の模索

この状況を受け、「高校進学プロジェクト in とやま」は、説明会実施の気運を途切れさせまいと、県教委に協力を呼びかけ、ボランティア主催の説明会に出前講座という形で説明に加わってもらう形を企画した。また、2011年度のボランティア主催の説明会では、射水市内の中学校の協力を得ることで開催情報の周知や保護者の説明会へのアクセスを容易することができたという経験から、2012年度においては、射水市に加えて、高岡市、富山市の中学校校長会にも働きかけ、各市内の中学校（9月29日（土）於射水市立小杉中学校、10月16日（火）於富山市立奥田中学校、10月24日（水）於高岡市立志貴野中学校）を説明会の会場に設定した。2012年度の説明会は、各市の市教委の後援も受け、地域の民間ボランティアと学校や教委との連携が図られた。

### 3.3.5. 今後の課題

このように、富山県内における外国人のための進学説明会は、官民両方の強みを生かし、弱点を補うべく、説明会の在り方を模索し、発展してきたが、外国人保護者への情報提供という面において、すべての問題が解決したわけではない。教委や学校と協力することで、説明会開催の情報の周知は強化されたとはいえ、学校現場において「子どもは日本語がわかるから、親にも説明会は必要ない」「普段の保護者との連絡に通訳を入れていないから、説明会は必要ない」などといった誤解が一部あり、情報周知の徹底には至らなかったこと、また、全体的な説明だけでなく個々が抱える問題に対応できるような形（問題を詳細・的確に捉え、生徒の学校や担任へとスムーズに橋渡しするなど）になっていないこと、さらには「知らないことを知らない」、問題意識のない保護者に対して、説明会の意義をどう訴えていくかなど、今後解決すべき課題は多い。

### 3.4. 富山県教育委員会の対応 ー外国籍を有する生徒の高校進学に係る支援・啓発について

富山県教育委員会県立学校課

#### 3.4.1. 外国人生徒への県立高等学校受検上の配慮について

富山県教育委員会では、平成24年度入学者選抜より、日本語を読む能力にハンディがある外国籍を有する県立高等学校志願者に対して特別措置を行っています。対象生徒は、志願時において入国後6年以内の外国籍を有する生徒です。特別措置の内容は、すべての県立高校において、入学者選抜学力検査問題中に使用しているすべての漢字にふりがなを付すというものです。ただし、設問に直接関わる漢字には、ふりがなを付しません。特別措置の適用を望む外国人生徒は、出身中学校長を通じて、所定の外国人特別措置適用申請書を一般入学願書に添えて、志願先高等学校長に提出することで出願手続きができます。この特別措置については、県内の全中学校、県立学校等に通知するとともに、県立高等学校入学者選抜に関する中学校説明会や高等学校説明会において、手続き等の詳細を説明し、周知を図っています。また、下記に示す3.4.2.の中でも本制度について説明しています。

#### 3.4.2. 高校進学に係る啓発事業

##### 1. パンフレット及びDVDの作成

外国籍を有する生徒の高校進学啓発をねらいとし、高校進学の意義や高校入学者選抜の制度について説明したパンフレットを、平成23年12月に母語別に翻訳して作成しました。パンフレットは、県内在住者の数を参考に、ポルトガル語版、中国語版、タガログ語版、ウルドゥ語版、英語版の5種類があり、必要とする中学校に送付しています。

また、高校進学の意義や高校入学者選抜について、母語で説明したDVDを平成24年3月に作成し、市町村教育委員会等に配布しました。このDVDは、ポルトガル語、中国語、タガログ語、ウルドゥ語、日本語の5か国語で構成されており、必要とする中学校等へ貸出しています。

このパンフレットとDVDの動画については、以下のURLでもご覧いただけます。

<http://www.tym.ed.jp/gaikoku/> (富山県教育委員会県立学校課HPからアクセスできます。)

##### 2. 説明会の開催

県内に在住する外国籍を有する小・中学生本人や保護者に、高校進学の意義や高校入学者選抜制度の概要について、母語(ポルトガル語・中国語・タガログ語・ウルドゥ語)を用いて説明し、高校進学への啓発を図る高校進学説明会を平成23年12月に開催しました。開催場所は、参加者の便宜を図るため、高岡市生涯学習センター(ウイング・ウイング高岡内)と富山県民会館の2会場で実施しました。参加者は、高岡会場で38名、富山会場で28名でした。県教委担当者が説明を行い、それを通訳の方にそれぞれの母語で伝えていただく形式をとりました。説明の後は、母語ごとに質問を受け、個別の疑問や悩みに対して回答する時間を設けました。

また、「出前県庁しごと談義」([http://www.pref.toyama.jp/cms\\_sec/1001/kj00000220.html](http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1001/kj00000220.html))として、担当者が外国人支援ボランティア団体の主催する高校進学説明会に参加しています。入学者選抜制度の説明や入学者選抜、さらには高等学校教育全般についての質問にお答えしています。

### 3.5. 全国の状況

米田 哲雄(子どもの日本語グループ)

#### 3.5.1. 外国人児童生徒にとっての高校入試

表1は、各県がどのように外国人児童生徒に対応しているかを見るために、2012年度の県立高校入学者選抜要項等<sup>1)</sup>に基づいて作成した。

	日本語指導必要数 2010	外国人児童生徒比率	評定	選抜要項で言及しているか				高校進学率 20~23年度 %
				言及あり	在日期間など	方法などの配慮点	その他	
北海道	99	0.02%	2					
青森	36	0.02%	1					
岩手	42	0.03%	2					
宮城	100	0.04%	4					
秋田	18	0.02%	4			検査時間延長	事前に日本語力を見る	
山形	38	0.03%	2					
福島	69	0.03%	4	あり	在日3年以内		7校に特別枠	
茨城	686	0.20%	4	あり	在日3年以内		1校2名	
栃木	662	0.30%	4	あり	在日3年以内	学力検査の代わりに面接・作文が可		
群馬	904	0.39%	4	個別対応 前後期選抜でやり方変更 いくつかの検査を組み合わせる 教科がある場合は国数英 作文・面接共通				太田 83 大泉 93 伊勢崎 85
埼玉	1424	0.19%	5	あり	在日3年以内	数・英(問題ルビ付き)面接	6校で	
千葉	1249	0.19%	4	あり	在日3年以内	面接と作文(日/英)	5校で4~17名	
東京	2705	0.22%	4	あり	在日3年以内	面接と作文(日/英)	3校で55名	
神奈川	2990	0.33%	5	あり	国数英と面接	12校で84名受け入れ 日本国籍取得者可		
新潟	138	0.05%	0					
*富山	313	0.26%	0	あり	在日6年以内	ルビ付き		
石川	66	0.05%	1	あり	在日3年以内		5校で配慮	
福井	129	0.12%	0	あり	在日2年以内	3教科と面接		
山梨	262	0.25%	4	あり	在日7年以内	3教科選択・面接	3校で特別授業	
長野	592	0.24%	5	あり	在日3年以内	国語を作文に 10分延長 ルビ付き 質問も可		
岐阜	941	0.39%	5	あり	在日3年以内	国数英に変えて各高校作成の日本語問題を課してよい		
静岡	2485	0.59%	4	あり	面接と日本語力		学校毎人数明示	浜松 74
愛知	5623	0.67%	4	特別文書	検査で英・中国・韓国・スペイン・ポルトガル語の説明あり		4校に受け入れ	豊田 80 豊橋 77
三重	1651	0.77%	5	あり	在日6年以内	母語/日本語どちらかの作文と面接	16校で5人内	鈴鹿 86 四日市 89 磐田 65
滋賀	905	0.54%	5	あり	在日3年以内	10分延長 辞書可 ルビ付き		
京都	253	0.09%	2	あり	在日2年以内	時間延長	ルビ付き	
大阪	1823	0.19%	5	あり	在日3年以内	数・英 母語作文 キーワードに母語併記 問題文ルビ 辞書2冊可 時間1.3倍		
兵庫	739	0.12%	5	個別配慮		ルビ付き 別室受験		
奈良	104	0.06%	4	特別文書	在日6年以内	数・英・作文・面接	3校で受け入れ	
和歌山	34	0.03%	0					
鳥取	15	0.02%	1					
島根	51	0.06%	4	あり	在日3年以内			
岡山	81	0.04%	0					
広島	442	0.14%	0					
山口	38	0.02%	2					
徳島	21	0.02%	4	校長裁量で辞書使用などの配慮ありとするが、確認できず				
香川	83	0.10%	4	あり	在日3年以内			
愛媛	18	0.01%	0					
高知	9	0.01%	0					
福岡	402	0.07%	4					
佐賀	27	0.03%	0					
長崎	18	0.01%	0	ルビ振り必要と認められる者				
熊本	51	0.02%	4	あり	在日6年以内・過年齢で編入不可の者も可 3教科選択・作文面接		全校枠内若干名	
大分	33	0.02%	2					
宮崎	24	0.02%	2					
鹿児島	32	0.02%	4	校長裁量	在日3年以内	漢字ルビ表準備	延長15~20分	
沖縄	86	0.04%	0					
計	28511	0.20%	3					

- 塗りつぶしの県は外国人集住都市会議に参加する市を持つ。
- 外国人児童生徒の比率  $\text{日本語指導必要数} \div \text{児童生徒総数 (日本人+外国人)} \times 100$  <sup>2</sup>
- 評定 多文化共生センターが「多文化共生に関する自治体の取り組みの現状」<sup>3</sup>において、公立高進学にかかわる配慮を各県に問い(2006年時点)、その回答内容等によって独自に評価したもの。
  - 5点；入試に関して特別配慮があり、進路説明会などを開いている。
  - 4点；その一方がある。
  - 3点；研修へ参加する制度はあるが、独自対策ではない。
  - 2点；教員からの相談窓口がある。
  - 1点；研修などの開催を奨励、独自対策はなし。
  - 0点；確認できず。

○ 特別措置の内容として、次の点があげられる。

(1) 在日期間（入国してから何年以内など）

(2) 選抜検査方法・時間・教科などでの配慮（教科数の限定・面接・作文など）

\*ルビ振りについては、「外国人の子どもへの関心がある」と評価される一方、高校入試を突破する方策としてはそれほど効果がない、という指摘もある。

(3) 人数枠の設定（11県が行っている）

\*高校を決めて人数枠を設定する拠点校方式、すべての学校で一定数入学を認める全校方式、このどちらを採用するか。また現状ではほとんどが普通課程であるが、それが良いかなど、議論すべきことが多い。

(4) 受け入れた高校で日本語指導や母語指導を計画的に行うところはいまだ少数である

○ 特別措置の一覧表から見えること。

自治体の取扱に大きな違いがある。外国人児童生徒の比率が低くてもきちんと対応するところもあれば、高いけれども確たる方針のないところもある。これは、国としての明確な方針が出ていない故とみられるが、2012年4月から始まった「日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議（文部科学省設置）」は、次の3点を図り、新制度をスタートさせることで、特別な課題をもつ子どもたちに対応したいとしている。

- ・ 学校教育法施行規則改正
- ・ 「特別の教育課程」に係る告示
- ・ 制度改正の周知

○ その他

表1の評点4や5を得ている県では、日本語指導や生徒の母語を選択教科にしたり、多言語での各県立学校紹介をしたりするところがあり、どのようにして有為な外国人生徒に機会をつくるか工夫している。

高校に入ったけれど卒業には至らなかった、この類の話を耳にすることがある。しかし実態は不明である。在学率・通学率を割り出す動きもあるが、今のところ全国レベルの話で、施策に活かせる水準ではない。三重県の「多文化共生を考える議員の会」は、手分けして各高校を訪問し、この実態を聴取しているとのことだが、時間を要するようである。

表2 日本語指導が必要な外国人生徒の在籍期間別状況 中学校の欄 2010

表2は文部科学省調査の一部である。特別措置で、例えば「在日3年」とする県が多いが、それは「日本語指導が必要な生徒」の58.5%であり、入学試験では特別措置を受けられない者が41.5%いることになる。

	比率	計	該当者 (筆者の注記)
1年未満	25.1	58.5	中学校の学齢で日本語指導が必要とされた者
2年未満	19.4		
3年未満	14.0		
5年未満	11.9	41.5	小学校の学齢から日本語指導が必要とされていた者
5年以上	29.6		

言語学者のJ・カミンズによる第2言語習得理論では、生活日本語習得に2~3年、学習日本語では5~8年が必要といわれている。文部科学省調査でもそれが裏付けられているが、各県の高校入試では考慮されていない場合が多い。在日年数2年以内などは安易な設定であり、別タイプの帰国子女についての文科省定義をそのまま援用したものと思われる。(最近では日本国籍を持つ帰国子女の中に、日本語指導が必要なものが2000人と増えているので、この定義も問題である)

### 3.5.2. 外国人生徒の進路を広げる

#### (1) 進路 (進学) 説明会を開く

1995年、神奈川県で初めて外国人児童生徒と親のための「進学ガイダンス」が始まった。以来多くの地域で実施され、主催者交流会を持ち、互いにやり方や問題点を検討するに至っている。ボランティア中心に行うことが主流だが、県や市などの自治体主催や大学・NPO団体・国際交流協会・教職員組合が行う例もある。親と子ども、あるいは教師に参加を呼び掛けたり、いくつもの団体・機関が協働したりするなど実に多様である。ほとんどは多言語進学ガイド(手引き)を作成している。この動きは高校入試の特別措置実施に結びついていく。

#### (2) 進学した高校

どこへ進学したのか、全体的な統計はない。そこで断片的だが、高校進学後の様子を見たい。小島祥美が全国の教育委員会に対して行った調査によれば、「高校の外国人生徒を調査している」<sup>4</sup>と回答した20県の平均で、外国人生徒が公立全日制に57.2%、定時制に40.4%、通信制2.5%に在籍している。日本全体では定時制に進む中学生が3.5%であるから、外国人生徒がいかに多く定時制に集中しているかが分かる。

しかも「日本語指導が必要な生徒」の63.7%が定時制であるから、定時制の学校としては、在籍する生徒の半数49.1%が日本語を指導しなければならない状況下にある。

表3 課程別進学者

	全日制	定時制	通信制	計
実数・外国人生徒 ①	2822	1993	122	4937
日本語指導必要 ②	535	979	24	1538
課程別比率・外国人生徒	57.2%	40.4%	2.5%	100%
日本語指導必要	34.8%	63.7%	1.6%	100%
*課程内日本語指導必要②÷①	18.9%	49.1%	19.7%	

出典 小島祥美 外国人生徒と高校にかかわる実態調査報告書 2011

一方、田巻松雄の栃木県調査<sup>5</sup>では2011年の外国人生徒卒業生141人中、進学したものは78%で、その中の公立全日制進学は53.6%、公立定時制19.1%、公立通信制1.8%、私立全日制20.9%だった。進学以外の31人中帰国した者は11人、未定15人、就職は1人のみだった。残りは無回答。



- 外国人生徒の話題が出ると、次のようなことが話題になりやすい。
- ① 高校は義務教育ではない。高校教育に相応しい者を入学させるところである（適格主義）と主張する。
    - ⇒ 一方では中学校の課程を終えた者を入学させるという課程主義の考えがある。
    - 現実には進学率 97.9%だから、課程主義になっている。しかし、建前では適格主義で押し通す。（富山県の高校進学率は 99%）
  - ② 外国人より日本人を優先すべきである。特別措置は日本人に不公平であり「一種の差別である」。
    - ⇒ 特別枠の人数設定を外枠とすれば解消できる。むしろ、生徒の国際理解，異文化理解に役立つ，学校の国際化につながる。
  - ③ 外国人生徒の入学後，現場が困惑する，負担が増える。
    - ⇒ 新公立高校等教職員定数改善計画（2010 年）で「外国人生徒への日本語指導の充実」が図られた。
    - ⇒ 多文化共生時代，少子高齢化時代に逆行する考えである。
  - ④ 日本語といえば国語教師が，外国といえば英語教師が担当するものだろう。
    - ⇒ 間違った思い込み。

## 参考文献

- ・(表 1) 作成にあたって
- [1] 中国帰国者定着促進センター 都道府県立高校の中国帰国生徒及び外国籍生徒への高校入試特別措置等について
- [2] 安場淳 各都道府県による「中国帰国生徒・外国人生徒」の進学保障の現状
- [3] 小島祥美 2011 年度 外国人生徒と高校にかかわる実態調査報告書
  - ・外国人特別枠を設定したことによる問題点や効果について
- [4] 多文化共生教育ネットワークかながわ 「外国につながる子どもの教育に関する調査プロジェクト」2010 年
- [5] 細川卓哉 「外国人生徒の高校進学に関する教育課題—特別入学枠に着目して—」

<sup>1</sup> 2012 年 12 月 1 日の時点で Web 上に発表していない県については，2011 年度のもの参照した。

<sup>2</sup> 日本語指導必要数は「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査」，児童生徒総数は学校基本調査による。

<sup>3</sup> 地方自治体における多文化共生施策調査報告書 2007 年 3 月（かなり古い）

<sup>4</sup> 富山県は「調査なし」と回答しているので，20 県に含まれない。

<sup>5</sup> 教員必携 続・外国につながる子どもの教育 宇都宮大学

<sup>6</sup> 学校基本調査による

<sup>7</sup> 「日本出生・幼少時から広く日本語の環境下にあった」という意味

## 第4章 「外国人の子どもの教育・進学に関する意識調査」結果

青木由香（進学プロジェクト in とやま）

### 4.1. 調査の概要

#### 4.1.1. 調査の目的

富山県内に住む、外国にルーツのある子どもを持つ保護者、及びその子どもが、教育に関してどのような考えや悩み、希望を持っているのかを探り、的確にニーズを把握することによって、今後の子どもたちへの支援のあり方を考える一材料とし、支援の改善・向上に資することを目的とする。

#### 4.1.2. 対象

富山県内に住む、外国にルーツのある子どもを持つ保護者、及びその子ども。

#### 4.1.3. 調査日時・場所・方法

外国にルーツをもつ子どもの教育に関する以下の4つのイベントに参加した保護者とその子どもを対象に、アンケート調査票を配布し、記入してもらい、その場で回収した。調査票は、日本語に振り仮名をつけ、さらにポルトガル語、中国語、タガログ語、ロシア語、ウルドゥー語、英語、それぞれの言語を併記した6種類を用意した。（巻末資料参照。ポルトガル語版のみ）

- ① 2012年9月29日（土） 高校進学説明会 於 射水市立小杉中学校
- ② 2012年10月16日（火） 高校進学説明会 於 富山市立奥田中学校
- ③ 2012年10月24日（水） 高校進学説明会 於 高岡市立志貴野中学校
- ④ 2012年10月28日（日） 「子供の将来を考える」懇談会 2012 於高岡市ふれあい福祉センター

回収後、日本語以外の言語で回答されたものについては、イベント通訳者等に翻訳を依頼した。

①～③は、ボランティア主催による外国人保護者を対象とした高校進学についての説明会である（3.3.参照）。④は、サンパウロ州教育省とサンパウロ市 NPO 法人「教育文化連帯学会（ISEC）」が実施している「カエルプロジェクト」の活動の一環として2012年日本各地で開催された懇談会の一つである。「カエルプロジェクト」とは、ブラジルへ帰国した後に苦悩する日本育ちの子どもたちを心理面・学習面・環境面からケアしようという、ブラジルにおける日系人の子どもを対象とした支援活動である。

#### 4.1.4. 分析にあたっての注意点

本アンケート調査は、実施した場所の特殊性から、分析にあたっては、以下の2点について注意を要する。

まず、本アンケートの調査票は、県内に住む外国人保護者に広く配布されたわけではなく、上記①～④の教育関連イベントへの参加者のみに配布、実施された。よって、統計処理を行うに足る回答数が得られていないだけでなく、①～④のイベントはいずれも自由参加であることから、必然的にアンケート回答者は子どもの教育に問題意識や関心を強く持っている人に限られる。

また、アンケート実施会場である4つのイベントのうち、①～③の進学説明会と④の懇談会では、大きく性質が異なる。①～③の進学説明会は、多言語で実施され、内容も日本の高校進学に関するものであることから、回答者の国籍が多岐にわたる一方で、参加者は中学生（特に中3生）の親が中心である。さらに言えば、日本で進学しようという意志のある親子であり、日本で定住・永住しようという考えを

持っている可能性が高い。それに対し、④の懇談会は、日本語とポルトガル語のみで実施されたため、調査対象となる外国人参加者はブラジル人に限られる。また、内容がブラジル帰国後の子どもたちへのケアであることから、参加者はブラジルへの帰国を検討している可能性が高い。さらに、子どもの年齢は中学生のみならず多岐にわたる。

このように、特殊かつ全く性質の異なるイベント会場で実施したアンケート調査の回答を一つにまとめて処理をすることには問題があるだろう。しかしながら、アンケート回答者の声そのものは、今後我々支援者がサポートの形を考え、子どもたちの教育環境を整えていくために、非常に有効で貴重なものである。よって、分析においては、数値的な結果は参考程度に扱い、調査票に記述された回答者の声を具体的に紹介し、それらを検討することに重点を置きたい。

## 4.2. 調査の結果

### 4.2.1. 回答数

全回答数：57

調査を実施した会場ごとの内訳は、進学説明会（射水市）13、進学説明会（富山市）14、進学説明会（高岡市）17、懇談会（高岡市）13である。

### 4.2.2. 回答者の属性

(1) 回答者のうち、7割弱の38名が「親」であり、約3割の18名が「子」であった。不明者が1名あったが、回答の内容等から「親」と判断し、以下の分析では「親」は39名として扱っている。

(2) 親の年代構成は、「20代」2名、「30代」8名、「40代」18名、「50代」6名、「無回答」5名と、40代の親が多く回答している。

子どもは、全員が10代以下であるが、平均年齢は14.8歳であった。調査会場が高校進学に関する説明会だったこともあって、「中3」8名、「中2」3名、「中1」4名、「小学生」1名、「無回答」2名と、ほとんどが中学生（特に中3生）である。

(3) 性別は、親子合わせて「男性」20名、「女性」25名、「無回答」12名であった。

(4) 回答者の国籍は、以下のとおりである。「親」については、ブラジル人の回答を多く得ている。（以下、図表中の数値は人数を表す。）

表1 回答者の国籍

国籍	親	子	計
ブラジル	21	4	25
中国	3	6	9
フィリピン	5	3	8
パキスタン	2	1	3
ロシア	2	1	3
インドネシア	1	1	2
ウクライナ	1	0	1
マレーシア	1	0	1
日本	2	2	4
無回答	1	0	1
計	39	18	57

(5) 回答者の日本滞在期間については、親は「10年以上」日本に滞在しているという回答が20名と、半分以上を占めている。一方、子どもは来日して「1年未満」「1年以上5年未満」の回答が3分の2を占めている。

(6) 自己評価による回答者の日本語力は、以下のとおりである。子どもは7割近くが日本語での会話に不自由を感じていない。一方、親は(5)で述べたように子どもに比べて滞日期間が長い傾向があるにも関わらず、会話力は「少し」あるいは「よくわからない」が6割以上であり、会話も読み書きも不自由のない人は1割に満たない。読み書きについては、親の実に9割が不自由を感じていることがわかる。また、子どもの会話力が親に比べて高いと言っても、日本語の読み書きが「苦手」「できない」「わからない」とする回答は子ども全体の半数に上る。

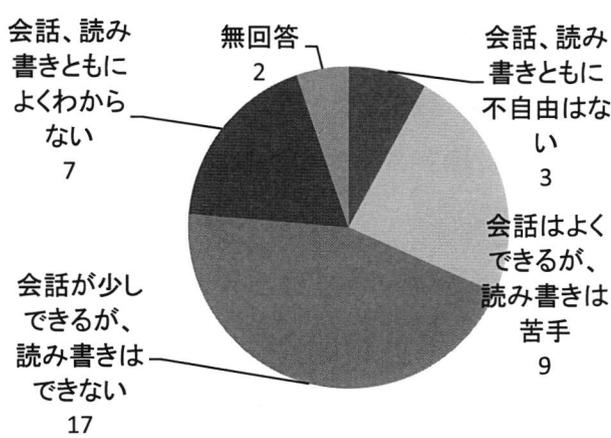


図1 日本語力 (親)

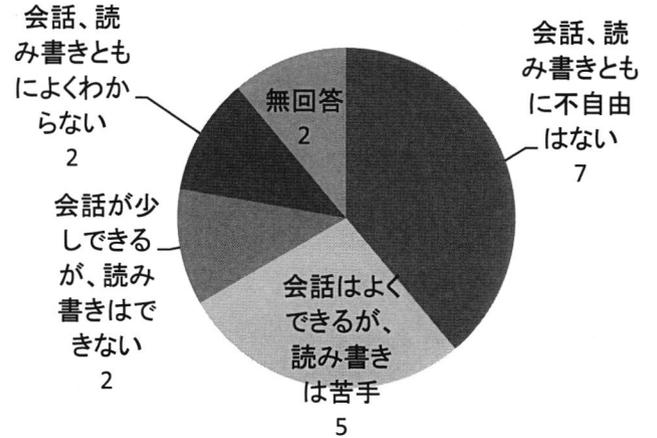


図2 日本語力 (子)

#### 4.2.3. 将来の生活についての希望

(7) 将来生活する国の希望については、親子ともに「日本に永住」を希望する回答が半数以上を占めた。一方、「しばらく日本に住むが、いずれ母国へ帰りたい」「わからない・決めていない」という回答も、親子ともに3割強ある。

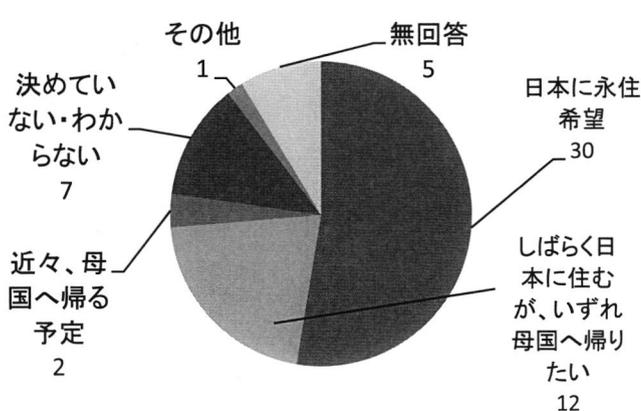


図3 将来生活する国の希望 (親)

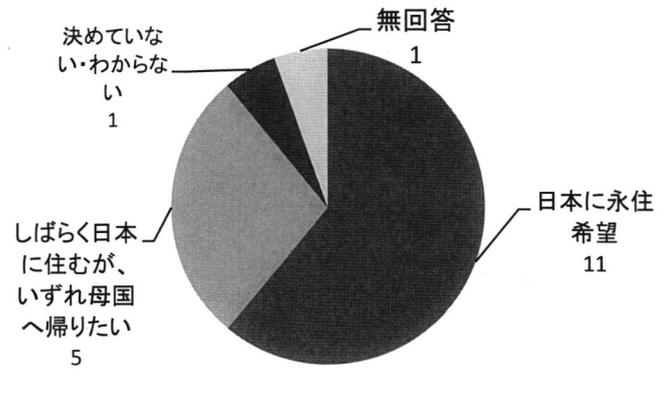


図4 将来生活する国の希望 (子)

ただし、この項目については、調査会場による違いがある。「日本に永住」を選んだ回答者は、進学説明会会場(①~③)、懇談会会場(④)いずれもそれぞれ5割、4割を占めるが、「近々母国へ帰る予定」「いずれ母国へ帰りたい」と帰国の意思を示唆した回答については、懇談会会場(④)においては6名と、「日本に永住」をわずかながら上回っている一方、説明会会場では3名のみである。また「近々母国へ帰る予定」とはっきり帰国を予定している2名はいずれも懇談会(④)参加者であった。(なお、

複数回答者が2名いたため、合計回答数にはずれがある。）

(8) 親が自分の希望とは別に子どもに将来どの国で生活してほしいかについては、全体の半数以上である21名が「日本」と答えている。母国となる国を回答したのは、「ブラジル」と回答した懇談会会場(④)参加者の3名のみであった。他、「本人の希望に任せる」との記述が2名あり、13名は無回答であった。この設問は、選択式ではなかったため、13名の無回答者は、「(親の口から)どの国とはっきり言えない」すなわち「本人の希望に任せる」という回答に準じるものと考えてよいかもしれない。

子どもの将来の生活国について、親が「日本」と回答した理由は次のとおりである。まず、日本での生活の慣れや愛着を挙げる回答が多く見られた。

- ここに生まれ、保育園から学校までずっと日本にいたので(年代不明・ブラジル・中1の親)
- 日本に慣れているため(40代・フィリピン・中2の親)
- 日本国籍を持っていて、日本の生活に慣れているから(30代・フィリピン・中1の親)
- 日本が好きだから(40代・中国)
- 日本で生まれ、今日まで親しんだ国なので(年代不明・ブラジル・中3の親)

また、生活するための場所として日本という国を高く評価する意見も多く見られた。

- 日本は全てにおいてチャンスのある国だから(年代不明・ブラジル・中1の親)
- 素晴らしい国だから(40代・ブラジル・中2の親)
- フィリピンより日本の方が過ごしやすい(40代・フィリピン・中3の親)
- 犯罪率が低い国、安定している国(30代・ウクライナ・中2の親)
- 経済が発展していて、安定し、幸せで豊かな国(40代・ロシア・中1の親)

「ブラジル」と回答した理由は以下のとおりである。若い世代が、ブラジルでの生活にも希望を抱いている様子がうかがえる。

- ブラジルの方が仕事のチャンスがあるから(20代・ブラジル・小3の親)
- 親戚がブラジルにいるから(50代・ブラジル・小6の親)

「本人の希望に任せる」と回答した理由は以下のとおりである。日本と母国両方に愛着やアイデンティティを感じている回答も見られた。

- ブラジルも日本も私たちの国(年代不明・ブラジル・中3の親)
- 自分の人生だから、かってに決めるわけにはいかない(50代・日本・中2の親)

#### 4.2.4. 教育程度・職業についての希望

(9) 子どもに受けさせたいと考える教育程度については、半数以上が「大学まで」「大学院以上」と、子どもには高度な教育を受けさせてやりたいと考えている親が多いことがわかった。なお、「中学まで」と答えた1名の親は、懇談会会場(④)の小学生の子を持つ参加者で、数年内にブラジルへの帰国を予定しているため、おそらく「日本での教育」という意味での回答であり、子どもの帰国後の教育も中学校卒業程度でよいと考えているとは限らない。

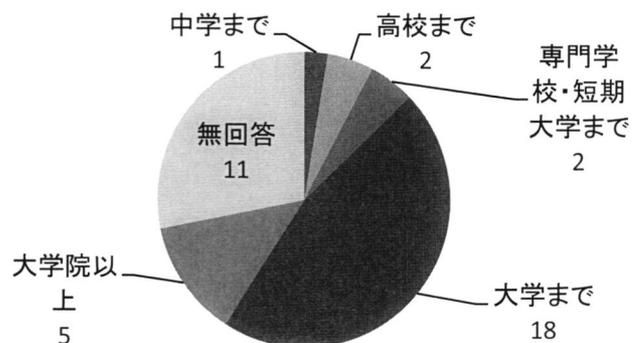


図5 教育程度の希望(親)

「専門学校・短期大学まで」「大学まで」「大学院以上」の高等教育を希望する理由としては、子どもの将来の仕事を挙げる回答が目立った。

- よりよい将来のため (40代・ブラジル・中2の親)
- より良い仕事に就いてほしいから (40代・フィリピン・中3の親)
- 夢を実現するため、いい給料の仕事に就く (30代・ウクライナ・中2の親)
- 将来の選択が広がる (50代・ブラジル、日本・小5)

また、勉強そのものの価値を認める意見や、教育が生活そのものに役立つとの考えも見られた。

- 勉強はとても重要だと思うから (年代不明・ブラジル・中1の親)
- 教育はやり過ぎることがない (20代・ブラジル・小3の親)
- より良い未来のため、そして社会によく適合するため (年代不明・ブラジル・中1の親)
- 生活する上で役立ち、良い機会となるはずだから (30代・フィリピン・中1の親)

一方、「高校まで」とした理由は、生活のための必要最小限の知識を身に付けてくれさえすれば十分との考えからのようである。

- 日本でくらししていくのにじょうしきをしてほしい (50代・日本・中3の親)
- 必要なだけ勉強しているから (40代・ブラジル・中3の親)

(10) 子どもが受けたいと考えている教育程度も、「大学まで」「大学院以上」が約4割と、親同様、高い教育を望んでいることがうかがえる。しかし、「専門学校・短期大学まで」との回答が4名、「高校まで」「中学まで」との回答がそれぞれ4名、2名と、親に比べてやや多い。

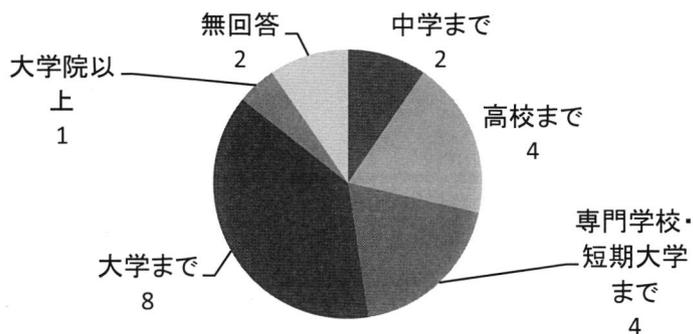


図6 教育程度の希望 (子)

「大学まで」「大学院以上」と回答した理由は以下のとおりである。

- たくさん勉強したいから (中2・中国)
- より良い将来のため (中2・ブラジル)
- 日本の教育制度がとてもよい (中1・インドネシア)
- サッカー選手になりたい (中1・パキスタン)
- 柔道を続けたいから (中1・ロシア)
- みんながいくから (中1・日本)

「専門学校・短期大学まで」とした子どもの理由を見ると、親よりも具体的に将来を考え、それに必要な程度・内容の教育を求めて回答していることが推察される。

- プログラマーになりたいからです (中3・フィリピン)
- よい職業を得て、家族を助けるため (経済的な援助) (学年不明・フィリピン)

一方、「中学まで」「高校まで」と回答した子どもは、現在学習に困難を感じ、学業の継続が難しいと判断していることがわかる。

- 勉強きらい (中3・中国)
- 困難 (中3・中国)
- あまり日本語ができないから (中3・フィリピン)
- 勉強きらいやから (中3・ブラジル)

(11) 親が子どもについてほしい職業については、様々な職業名が挙げられたが、中でも、医師や弁護士の回答が複数見られ、理由の記述からも、職業の安定性や社会的地位の高さを重視する傾向が見られた。また、「本人の希望に任せる」といった意見も多く、特殊な職業を記入している回答者も、その理由を「子どもの夢だから」と、子どもの意志を尊重したいという考えを持つ親が多いことがわかった。(以下、「希望職業名」:「理由」)

- 教育または医療関係: 日本に住む外国人にとって、非常に必要性があるから (年代不明・ブラジル・中1の親)
- 医者: 尊敬に値する重要な職業だから (年代不明・ブラジル・中1の親)
- 弁護士: 子どもの希望 (40代・ブラジル・中2の親)
- 自分が選んで好きな仕事: 希望は社会的に高い地位 (50代・ブラジル, 日本・小5の親)
- ITエンジニア: よりよい将来のため (50代・パキスタン)
- 事務職: 自分のような肉体労働ではなく、少し楽な仕事をしてほしい (40代・フィリピン・中3の親)
- マンガ (家): 娘が絵を描くのが好きなので (30代・ブラジル・小6の親)
- 調理師: 子どもの夢だから (40代・マレーシア)
- 美容師: (子どもが) 美容に興味があるから (40代・フィリピン・中2の親)
- プロの柔道家: 小さいころから柔道をしていて、よい結果を残しているから (40代・ロシア・中1の親)
- 本人の選択に任せる (よい職業なら): 本人が選択すること (年代不明・ブラジル・中3)
- 彼女が幸せだと感じられる職業でよい: 彼女自身が幸せで達成感を感じる事が大切だから (年代不明・ブラジル・中3の親)
- できるだけ安定し、自分にあった仕事であれば別になんでもよい: 無回答 (50代・日本・中2の親)

子ども自身の夢については、「サッカー選手」(中1・パキスタン)、「柔道選手」(中1・ロシア)のようなスポーツ選手のほか、「プログラマー」(中3・フィリピン)、「獣医」(小4・ブラジル)、「科学者」(中1・インドネシア)、「警察官」(中1・日本)、「通訳」(中2・中国)、「スタイリスト、画家、歌手」(中2・ブラジル)など、様々な回答が見られた。

#### 4.2.5. 教育に関する悩み

(12) 親の教育についての悩みには、「進学・受検」「学校の成績」という回答が多かった。「進学・受検」については、この調査自体が進学説明会(①~③)の参加者を対象に行ったために高くなっている可能性は高いが、思うように子どもの成績が伸びず、受検に不安を感じている保護者が少なからず存在している事実は指摘できるだろう。また、「教育費」を悩みの種として挙げている人も多い。さらに、「日本語の習得」「いじめ・友人関係」「不登校」「学校との連絡」と続き、悩みや心配事を複数抱える人は多い。

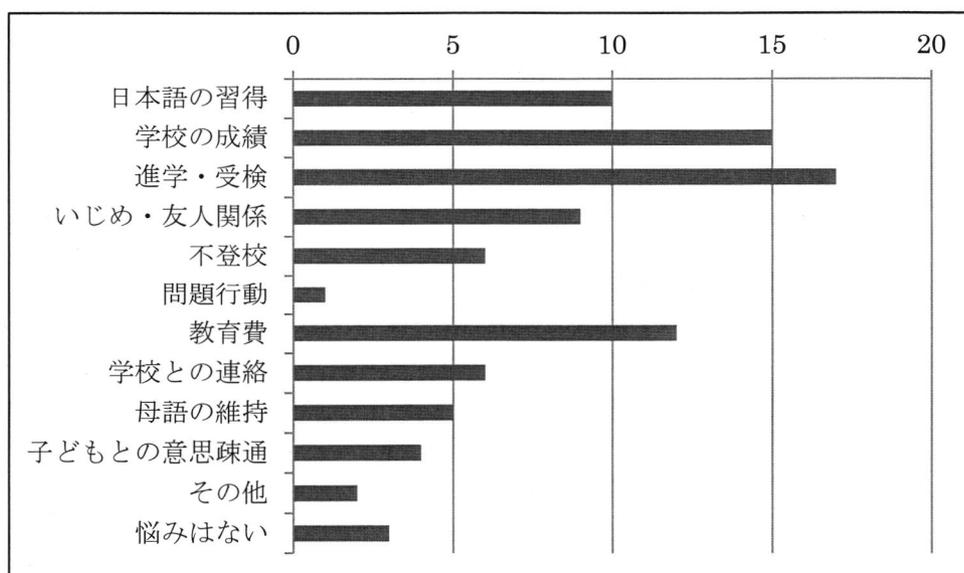


図 7 教育についての悩み（親） ※複数回答

親の抱える教育に関する悩みは、具体的には以下のようなものである。

#### <学校の成績・進学・日本語>

- 今の成績で進学できるのか（50代・日本・中2の親）
- 高校と大学に入学するために必要な知識を十分に得ることができるかどうか心配しています（40代・ロシア・中1の親）
- 漢字を覚えることが難しそうなので、とても心配している（40代・ブラジル・中2の親）
- ブラジル人生徒は日本人についていけない。特に国語（20代・ブラジル・小3の親）
- 来日まもなく、日本語の習得が難しい（40代・フィリピン・中3の親）
- 小学校に日本語の特別授業等がなかった（30代・パキスタン・中1の親）

#### <学費>

- 大学進学のためのお金が払えない（40代・ブラジル・中2の親）
- 学費等の支払いがとても心配。なぜなら私たちには安定した仕事がないので（アルバイトばかり）。（年代不明・ブラジル・中3の親）

#### <人間関係>

以前、いじめの問題があった。現在では親や先生の努力によって改善した

（年代不明・ブラジル・中3の親）

複数回答について見てみると、「学校の成績」と「進学・受検」、「日本語の習得」と「学校の成績」、それぞれ共に選択している回答（各13名、11名）が多く、これらに関連性があることが推察される。さらに言えば、これら3つを共に選択している回答も7名と多い。また、「日本語の成績」に心配はないが、「学校の成績」「進学・受検」「教育費」の3つを同時に選択している回答も8名と多い。すなわち、「日本語の習得」「学校の成績」「進学・受検」の3つの悩みは関連する可能性があること、また、「教育費」の悩みは「日本語の習得」よりも「学校の成績」「進学・受検」との関連が大きい可能性があることが指摘できる。

（13）子ども自身が抱えている悩みや心配事についても、やはり「学校での勉強」「進学・受検」「日本語の難しさ」という回答が多かった。また、「学校に行きたくない時がある」という回答も多い。

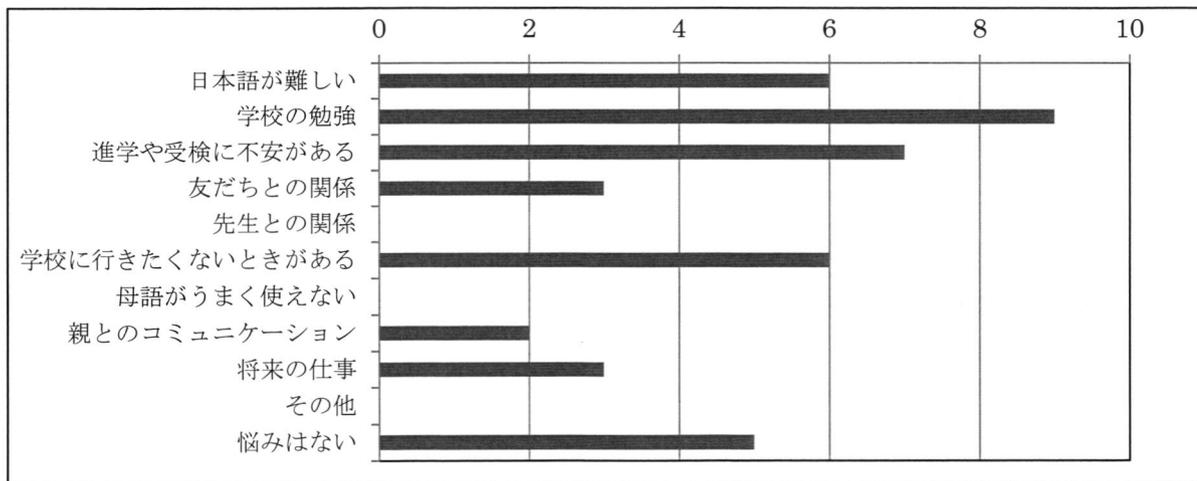


図 8 悩みや心配事（子） ※複数回答

具体的には、以下のような悩みが挙げられた。

- 国語，数学，社会，理科，家庭科，美術，分からないときがある（中1・パキスタン）
- 日本語が難しい。よく教えてほしい（中2・中国）
- 漢字（中2・ブラジル）
- 友だちかんけいがよくないことがある（中3・ブラジル）

複数回答について見てみると、「学校の勉強」と「進学・受検」を共に選択した回答が5名、「日本語が難しい」と「学校に行きたくない時がある」を共に選択した回答が4名と、比較的多かった。「学校の勉強」「進学・受検」「学校に行きたくない時がある」に「友達との関係」「将来の仕事」も加えて、これらの中からどれか2つ以上を選んだ回答が10名あり、これら5つの悩みが関連していることが推察される。

#### 4.2.6. サポートについて

（14）これまでに学校や地域で受けた日本語や勉強のサポートについては、「受けたことがある」が17名、「受けたことはない」が9名、「無回答」が13名であった（親のみ的人数）。サポートを受けたことのある人に、よかったサポートを挙げてもらったところ、以下のような回答が得られた。

<学校のサポート>

- 先生との日々の会話（年代不明・ブラジル・中1の親）
- 先生からのサポート（40代・フィリピン・中3の親）
- 学校における補習（20代・ブラジル・小3の親）

学校のサポートの中でも、特に学校内の通訳者を挙げる回答が複数あった。

- 学校の通訳の方たちはとてもよく手伝ってくれる（年代不明・ブラジル・中3の親）
- 学校のお便りの翻訳（40代・ブラジル・中2の親）
- 学校に木曜日に来る人（中1・パキスタン）

<金銭的援助>

- 病気のための金銭的援助（年代不明・ブラジル・中3の親）
- 金銭的サポートと勉強のサポート（40代・ブラジル・中3の親）

<ボランティア教室や塾など>

- ボランティア教室で学んだ（40代・ブラジル・高3の親）

- くもんの教え方が分かりやすい (40代・フィリピン・中2の親)

(15) どのようなサポートがあったらよいと思うかについては、以下のような回答が見られた。自由回答欄に記述されたものも含めて抜粋する。

#### <学習のサポート>

- 毎日の勉強のサポート (40代・ブラジル・中3の親)
- 宿題, 学校の授業の手伝い・サポート (学校内で) (50代・ブラジル, 日本・小5の親)
- 家庭教師など (40代・フィリピン・中2の親)
- (外国人相談員が) 毎日来てほしい (中1・パキスタン)
- 日本語の学習 (中1・インドネシア)

#### <通訳・翻訳などの情報のサポート>

- 私が漢字を読めないので, 学校のお知らせをポルトガル語で受けること  
(年代不明・ブラジル・中1の親)
- 父母たちに対して学校 (運営・活動) に関する情報がもっとあればよい  
(年代不明・ブラジル・中3の親)
- 学校には通訳がいてほしい。特に, 保護者会や親への重要なお知らせなど  
(年代不明・ブラジル・中1の親)
- 学校は, できるだけお知らせをポルトガル語で, せめて平仮名で出してほしい  
(年代不明・ブラジル・中1の親)
- このような機会 (進学説明会) が子どもが通う学校であればよいです!  
(30代・フィリピン・中1の親)

#### <金銭的援助>

- もっと様々な奨学金制度があったらよい (40代・フィリピン・中3の親)
- 入学費の無料化 (40代・フィリピン)
- 奨学金 (40代・ロシア・中1の親)

その他, 外国人の子どもたちに対する全般的な配慮を求める声もあった。

- 日本の学校の先生たちは, 外国人生徒たちに対してもっと細かい気遣いがあってほしい (40代・ブラジル・高3の親)
- 日本の子どもたちのブラジル人の子どもたちに対する差別がもっと少なくなればよい (40代・ブラジル・中2の親)

### 4.3. まとめ

「母の言うことをやりたい。例えば, 漢字をちゃんとやる。サッカー選手, どうやればいいですか。仕事, どうやってやればいいですか」(中1・パキスタン)

これは, アンケートの自由回答欄に記された中学生の子どもの声である。子どもは親の期待を感じ, それに応えたいと思っている。自分自身の夢もある。しかし, 漢字をはじめとして日本語の習得は難しい。夢に向かって自分は具体的にどうするべきなのか, どうしたらよいのか, 情報も乏しく, 戸惑う様子が伝わってくる。

4.1.4.でも述べたとおり、本調査は、富山県内の「外国人」の持つ特徴や考えを正確に代表させたものとは言えないが、県内在住の外国にルーツのある子どもとその保護者が、日本への永住を視野に入れ、日本でできる限りの教育を受けようと／受けさせたいとしており、その過程で成績・受検という試練に大きな不安を抱えている姿を捉えることはできたと思う。よりよい職業に就くために、より高度な教育を求め、成績や受検で不安を覚えるという姿は、日本人と共通ではないだろうか。しかし、外国人保護者とその子どもにおける特有の問題が、そこには存在している。4.2.5.で見た「日本語の習得」「日本語が難しい」という悩み、4.2.6.で見た「日本語の学習」「通訳・翻訳」サポートの希望など、ことばの壁である。悩みとして「日本語が難しい」を挙げた子どもが、同時に「学校の勉強」「進学・受検」「学校に行きたくない時がある」を選択しているように、ことばの壁が「成績」「不登校」など他の問題につながっている可能性や、「ブラジル人生徒は日本人生徒についていけない」、「学費等の支払いがとても心配。なぜなら私たちには安定した仕事がないので（アルバイトばかり）」との回答にもあるように、「成績」「不登校」「教育費」に対する不安が、日本人と比較してより深刻な問題である可能性もある。本調査ではこれらの関連性まで主張することはできないが、調査票に記された一つ一つの声は、外国にルーツをもつ子どもとその保護者がかかえる問題と、彼らに対する支援を考える上で、重大な示唆を含んでいる。

## 第5章 支援の現場

青木由香（アレッセ高岡）  
田上栄子（トヤマ・ヤポニカ）

### 5.1. 概観

富山県内の「日本語指導を必要とする児童生徒」の数は、1991年においては12名のみであったが、年を追うごとに膨れ上がり、2008年においては351名と、20年にも満たない間に実に30倍近くの増加を見せた。リーマンショック以降の不況の影響で2010年には313名にまで減少したものの、かつてに比べれば、教育現場に日本語指導を必要とする子どもが非常に多く在籍しており、彼らへの対応が喫緊の課題であることに変わりはない。

#### 5.1.1. 学校現場

このような状況の下、学校現場では、加配の常勤教員や外国人児童生徒の母語を話せる外国人相談員（支援員）が、比較的早い段階から（富山市では1993年、高岡市では1997年より）配置され、児童生徒に対する日本語指導、学校文書の翻訳・通訳等の対応が行われた。時を同じくして教員を対象とした「外国人児童生徒教育実践講座」も開かれ（於富山県総合教育センター）、1994年には教員のための『外国人児童生徒教育の手引き』第1号が作成、今日まで継続して発行されている。また、文部科学省による外国人指導の研究指定や帰国・外国人児童生徒受入促進事業等をきっかけとして、外国人指導のための拠点校やセンター校も設置され、日本語の教材やポルトガル語の会話集、翻訳文書集等も作られた。（ただし、指定の期間を終えた後はこのような体制はなくなっている。）

しかしながら、富山県内においては、日本語指導が必要な外国人児童生徒が1校につき数名しかいないという小中学校が圧倒的に多く、各学校に散在する子どもたちの支援は、少ない外国人相談員の巡回という形では非効率的にならざるを得ない。また、各学校においても、外国人の子どもが少ないがゆえに問題が可視化・共有化されにくく、県が作成している手引きや教材、文書等の情報もなかなか必要なところに届いていないという現状がある。

#### 5.1.2. 地域支援

地域での日本語支援教室は、1985年ごろから各地に点在していたが、主に大人を対象とした教室において個別の要望として子どもにも対応するという形であった。例えば、富山市民国際交流協会主催の日本語教室には、2001年頃から大人の教室に子どもが来るようになっている。その後、ボランティアの間で外国人の子どもの教育に正面から取り組む動きは、富山県では2006年ごろから始まっている。主なグループとして、2006年富山市に「勉強お助け隊」、同年射水市に「ワイワイにほんご・たいこうやま 子どもクラス」、2010年高岡市に「アレッセ高岡」ができています。2007年には「奥田ハンドインハンド」が富山市立奥田中学校内で活動を開始している。また行政からの働きかけとしては、富山県国際日本海政策課でも、「富山県多文化共生推進プラン」（6章参照）に基づき、様々な施策を講じている。2007年から2009年にかけて、多文化サポーター養成講座の後、「サポートセンター」を射水市に2箇所、高岡市に1箇所立ち上げている。当初は県または（財）とやま国際センターの事業として始まり、その後ボランティアや市の主催に移り、現在に至っている。このように各地に子どもの支援教室が次々とでき、そのいずれもが現在でも活動を継続させ、多くの経験を蓄積していつている。

また、2006年からは、翻訳教材作成のための取り組みが「子どもラーニングサポート北陸」によって行われている。さらに、2011年には進学に関する多言語での情報提供も「進学プロジェクト in とやま」により始まった。

このような流れの中にあって、県内にボランティアリーダーが育ち、それぞれのグループや支援者が

連携できる素地が作り出されていったと言える。もちろん、以上のグループ名や教室名は主なもので、個人で支援している場合等もあり、網羅しきれていないのは否めない。

### 5.1.3. 啓蒙活動

これまで述べて来たように、外国にルーツを持つ子どもたちが県内でも増えていく中で、多くの支援者は子どもへの支援をどうすればよいのかわからず、その上、教材もなく、戸惑いが大きかったのは想像に難くない。また子どもの側でも支援の拠点がなため、どこへ行けば支援を受けられるのかわからないという状態であった。

前項で述べた子どものための教室立ち上げという動きと並行して、支援の現場の混乱を憂慮した人々や団体が、子ども支援のあるべき姿を求めて、そして支援の裾野を広げるために、講座、講演会、学習会を実施してきた。以下に主なものを挙げる。

年月	主催者	講演会・学習会等
2001年 9月	トヤマ・ヤボ ニカ	講演会「外国人児童生徒への日本語・教科指導を考える」大蔵守久
2004年 月1回	子どもの日 本語グルー プ	子どもの日本語グループは、以下のような学習会を2004年におおよそ月1回のペースで、土曜日2～3時間程度行った。対象は、外国人児童生徒数の多い高岡市・富山市であるが、時には射水市を含めた全小中学校に趣旨やテーマ内容を郵送していた。他に、このころ子どもに直接かかわっていたボランティアにメールで連絡し、横のつながりがもてるよう心がけていた。この呼びかけに対して6～15名の参加があったが、学校関係者は平均2名程度だった。 第1回 富山県の外国人児童生徒の現状 第2回 子どもの日本語教材の検討 第3回 漢字・語彙学習の進め方 第4回 コンピュータで日本語指導 第5回 はじめの1か月にやること 第6回 日本語指導、その実際（実践交流会） 第7回 子どもの日本語力を知る 第8回 教材実技研修
2005年 10月	財団法人 とやま国際 センター	日本語ボランティア“じっせん”勉強会 ・「年少者教育問題の現状と展望－先進県の取り組み－日本語を母語としないこどもたちへの日本語支援について」松本一子
2007年	財団法人 とやま国際 センター	第2回生活支援日本語ボランティア“じっせん”勉強会 －地域在住の外国籍子どもたちのための日本語学習支援－ ・「『多文化共生に向けて－異文化間カウンセリング－』－カウンセリングマインドについて－」八重樫美知子 ・「日本語による先行学習－地域日本語支援活動への取り組みについて－」清田淳子 ・「身近なテーマから読み書き活動へ－子どもといっしょに学ぶための工夫－」池上摩希子
2009年	財団法人 とやま国際 センター	日本語ボランティア・スキルアップ“じっせん”勉強会 外国籍子どもたちのための日本語支援 ー理論から実践へー ・「多様な言語背景をもつ子どもたちへの日本語支援を考える～生活言語・母語・母文化を通して～」関口明子 ・「地域で使える教材について」米田哲雄

		・「内容重視の教科指導 ～算数と国語」 田上栄子
2006年 ～ 2010 年	子どもラー ニングサポ ート北陸	5.4. 参照
2007年 ～ 2009 年	富山県国際 日本海政策 課	5.3.4.1. 参照

#### 5.1.4. 新たな動き

これまで子どもたちへの支援は、学校と地域、それぞれ別々に行われてきた。子どもの教育、とりわけ教科学習指導や進学に関する支援については、学校での支援を中心に、各人の様々なニーズに合わせてそれをフォローする形で地域支援が行われてきたと言えよう。しかしながら、進学を前提とした学習支援や進学に関する情報提供については、非常にニーズが高いにもかかわらず、地域支援の現場において、支援の限界が指摘されていた。

2010年、地域支援者有志が集まり、日本語を母語としない子どもたちにとって高すぎる壁であった高校入試における配慮を求める要望書が富山県教育委員会に提出された(3.2.参照)。これを受ける形で、平成24年度県立高校入試より、入試問題の漢字にふりがなをつける特別措置が設置された。また、単年度のみのものであったが、県教委主催の多言語による進学説明会も、富山市、高岡市の2箇所で開催された(3.4.参照)。進学説明会については、2012年度からはボランティアグループ主催の説明会に県教委が協力する形で継続され、説明会の会場も複数の中学校に提供してもらうなど、教委・学校・地域の連携が進みつつある(3.3.参照)。

## 5.2. 学校現場

### 5.2.1. 高岡市における外国人児童生徒教育の取組

高岡市教育委員会

#### 1. 外国人児童生徒の在籍状況

高岡市の外国人児童生徒の在籍数は県内市町村の中で最も多く、200名<sup>1</sup>前後で推移している。平成20年度以降減少傾向にあったが、平成23年度からは再び増加に転じている。国籍別では当初からブラジル人児童生徒が多く、現在も約7割を占めている。近年では出身国や母国語の多様化が見られ、フィリピン、中国、パキスタンなど約10か国に及んでいる。

平成24年度は、5月1日現在で市内小・中・特別支援学校32校に226名の外国人児童生徒が在籍している。

#### 2. 外国人児童生徒への支援

高岡市では、日本語指導が必要な児童生徒支援のための在籍校への外国人相談員の配置をはじめ外国人児童生徒教育の充実に努めている。

#### 3. 外国人相談員の配置

外国人児童生徒のうち、日本語指導を必要とする児童生徒は6割以上いる。高岡市では、市費及び県費により、在籍校に外国人児童生徒の母国語に対応した外国人相談員を配置しており、現在はポルトガル語、中国語、スペイン語、英語、ウルドゥー語に対応している。

平成24年度3学期においては、市内小・中・特別支援学校26校に13名の外国人相談員を配置している。8名（3名は県費を兼ねる）は市費による配置、5名は県費による配置である。また、国の緊急雇用創出事業の活用により3名の外国人相談員を学校教育課に配置し、就学に関する窓口相談に応じたり、在籍校への支援に派遣したりして機動的な対応に努めている。

在籍校では、外国人相談員が児童生徒の実態に合わせて「取り出し指導」や「付き添い指導」により、日本語指導や教科の補充指導などを行っている。また、保護者への連絡や懇談会の通訳、学校からの各種連絡文書の翻訳等も行っている。

#### 4. 日本語指導・母語保持教室の実施

在籍校での外国人相談員による支援の他に、高岡市では、日本語指導・母語保持教室を実施している。希望者を対象として、高岡市国際交流センター会議室において隔週土曜日に開設している。

母語保持教室については、在籍数の多いブラジル人児童生徒へのポルトガル語を対象としている。

日本での生活が長期化した児童生徒、また、日本生まれの児童生徒が増えており、そのような児童生徒は、家庭では家族と母国語で会話をしているため生活言語は身につけているが、読み書きが十分できない児童生徒は多い。将来、日本に永住することを望んでいる児童生徒や保護者であっても、母国語も習得させたいと願う保護者は多い。また、何らかの理由で母国へ帰国した場合、母国語の習得が不十分なため、母国での就学に支障を来すケースも考えられ、母語保持に関しては、保護者からのニーズが高い。

<sup>1</sup> 在籍数は富山県教育委員会の「帰国児童生徒及び外国人児童生徒の実態調査」による。（以下同じ）

## 5.3. 地域のボランティア教室

### 5.3.1. 勉強お助け隊

米田 哲雄（勉強お助け隊 代表）

「勉強お助け隊」をたち上げてから6年が経過し、2012年10月までに91名の外国人児童生徒が参加した。このボランティア活動の特色は2つある。

① 個別指導を心がける。

② 日本語ゼロの子どもから高校受験までに対応する。

外国人児童生徒を見ると、とても「十把ひとがらげ」に子どもたちを見ることはできない。勉強お助け隊は多様な国籍、多様な年齢の外国人児童生徒が予告なく、助けを求めて来る駆け込み寺である。

- (1) 国籍別では12か国で、中国44%、フィリピンが22%。注目すべきは、日本国籍をもつ者11%、日本出生が10%だった。これは外国人児童生徒、外国籍、外国につながる・・・と一口では言えない多様な状況を意味している。来日1か月以内に参加を希望したのが6割で、日本語ゼロである。（表1）
- (2) 多い学年は、中学生では3年が18%、1年が12%の計30%、小学生は6・4・1年の順で計40%である。なお15歳以上の「過年齢」（主に学制の違いからくる）で、これを理由として中学校に入れなかった子どもが1割いた。現在、かれらに学習の場はなく、実態も分かっていないが、県全体では相当数いると思われる。<sup>1</sup>
- (3) ほとんどは富山市内だが、14%が他市であった。勉強お助け隊に来ている間に引っ越しをした者が16%おり、親の都合によつての「海を越えての移動」に加えて、国内・県内移動もまた顕著である。これが度重なる「学習の分断」をもたらし、指導のむずかしさの原因となっている。1時間以上かかる場所からの例もある。小学生の場合は親の協力が不可欠である。
- (4) 学年が始まる4月に富山に来た者は半数で、残りは学級の間人関係が固定化している時期での転入である。このため外国人児童生徒の孤立化を一層もたらし、ストレスを倍増している。
- (5) 自分の意志で来日した子どもはいないから、日本語学習への意欲は薄く継続が難しい。1か月以内で辞める者が多い理由である（表2）。また、時間がたってから来る場合は、日本語ゼロとは違う教材や指導方法が必要となる。

表1 いつ富山に来たか

いつ	人数	いつ	人数
1か月以内	51	6～12か月	5
3か月以内	5	1～2年	14
5か月以内	8	3年以上	8

表2 参加した期間（継続期間）

継続状況	人数	継続状況	人数
1か月以内	33	7～9か月	12
2か月	6	10～12か月	9
3か月	2	1～2年	15
4～6か月	9	3年以上	5

#### 支援する人々

富山市民国際交流協会に置いてあるチラシを見て応募したボランティアが無償で活動している。<sup>2</sup>「子どもへの日本語指導」経験者はほとんどいない。昨今、日本語指導者養成講座などで「外国人児童生徒の日本語」を話題とする例はあるが、指導の実際に対応する内容なのだろうか。

子どもとほぼ同数のボランティアが来訪したが、継続するものは少ない。大学生・主婦が各3割、会社員が2割弱だった。また退職者も2割、教員経験者は少なかった。なお、外国人が日本語指導に当たる例が最近出てきた。

#### 教材について

週1回、90分の限られた時間であり、限られた時間にふさわしい教材、そして一人一人に合った教材が必要である。このため市販の日本語教科書を全部使うことは難しい（通常これらは長時間の体系的な指導を前提に編集している。短いもので30回分の項目で成り立っている）。

### 勉強お助け隊がよく使っている教材<sup>3</sup>

	日本語ゼロ状態から	日本語初級前半	日本語初級後半
低学年 (1/2/3年生)	彩と武蔵の学習帳 はじめての「書く」練習プリント (あいうえお)	彩と武蔵の学習帳 絵でわかるかんたん漢字 80/160/200 ルビ教材	絵でわかるかんたん漢字 80/160/200 ルビ教材 国語教科書
高学年 (4/5/6年生)	彩と武蔵の学習帳 日本語ワークブック 学校の絵カード	彩と武蔵の学習帳 絵でわかるかんたん漢字 80/160/200 かんじだいすき4・5・6 ルビ教材と国語教科書	絵でわかるかんたん漢字 80/160/200 かんじだいすき4/5/6 漢字を「書く」学習 ルビ教材 各教科の教科書 ことばをふやす漢字ワーク
中学生以上	中学生の日本語 日本語ワークブック 絵でわかるかんたん漢字 80/160/200	日本語ワークブック 中学生の日本語 かんじだいすき4/5/6 4カ国語で国語教科書を読む ルビ教材	日本語ワークブック かんじだいすき4/5/6 読解プリント 語彙・読み方チェック ルビ教材 各教科の教科書 ことばをふやす漢字ワーク

教材は3種使う ①「彩と武蔵の学習帳」など日本語指導のもの ②国語教科書 (すべての題材をやるわけではない) 1年用から始めるが、高年齢の子には実年齢になるべく早く追いつくよう努力する。この時使うのはルビ付き教科書と教科書 ③学年配当漢字教材 ○本人がもってきた各教科の教科書と問題プリント (これには取捨についての適切な判断が必要となる)。<sup>4</sup>

\*子どもの日本語力を知る方法 → 教科書を読ませたり、挿絵を説明させたりすると大体分かる 支援者はどんな教材があるかを熟知すること。

毎回やること ①本人の希望すること (「今日勉強したいことはある?」) と基本的なことの両方やる ②前回・前々回の個人ファイルを読み、適切な教材を選ぶ。日本語ゼロの時、「書く」活動を急がない ③必ず声に出して読ませる (支援者は子どもの「読み」を支える) ④説明は最低限に抑える (図や絵、写真、動作を多用する)。語彙コントロールに留意する。

### 事例

#### ① 学習日本語の習得を目指して

愛知教育大学が開発した「ことばをふやす漢字ワーク」を中国籍4年生に使う。文の前後から考えたり、絵で想像したり、よく似たそれでいて微妙に使い分ける言葉を類推させたりして、教材文を的確に読み取る学習をした。

[http://www.resource-room.aichi-edu.ac.jp/kyouzai\\_page/4.5\\_kotoba\\_kanzi/kyozai.kanzi.html](http://www.resource-room.aichi-edu.ac.jp/kyouzai_page/4.5_kotoba_kanzi/kyozai.kanzi.html)

#### ② 楽しみながら語彙を増やす

「なぞなぞカード」で語彙を広げたり、付属する絵を説明させたりして、興味を持たせる。集中力が切れた時にも良い。<http://happylilac.net/nazo-np.html> 中学生の平均語彙数は25,000と言われていることから、早急に語彙を拡大させるようにした。

#### ③ 料理のレシピを使う

中学校に入れなかった過年齢の女子は、義理の祖母と2人で夕食を作っている。母国の料理をおばあちゃんに説明したらと提案。落ち着いた家庭環境のもと、彼女はお助け隊で6か月学んだ後、私立高校に入学し、英語検定1級も取って、今年シンガポールの大学に進むことになった。

参考「フィリピンと出会おう」(国土社刊) 他にブラジル、中国、韓国・朝鮮編がある。

#### ④ ボランティアがルビ教材を作る

教室では黙って座っているだけ、「見えない子」になっている外国人児童生徒は多い。なんとかして

学習に参加させたい、せめて教科書のどこが話題になっているのかをつかませたいという思いで、国語教科書本文をパソコンで入力し、学習済みの学年配当漢字レベルでルビ振りした教材を作っている。まずルビ教材を読み、次に教科書そのものを読む、この繰り返しで学習が進む。3年前に富山に来た非漢字圏の男子は「はじめて教室で手を挙げ、教科書を読んだ!」と報告してくれた。これをきっかけに彼は急に学習意欲が出てきており、苦手な漢字学習にも取り組むようになった。

## 課題

個別指導を標榜しているが、適切なボランティア数が確保できず、度々対応に苦慮している。

## 連絡先など

- 学習の場
  - ① 富山駅前CICビル3階 木曜日 16:00～17:30 (予約者のみ) 日曜日 10:00～11:30
  - ② 環日本海交流会館3階 (北日本新聞社右 50m 入る) 土曜日 10:00～11:30
- 連絡先
  - ① 富山市民国際交流協会 Tel076-444-0642 (中国語・ポルトガル語・スペイン語・英語に対応)
  - ② 富山県子どもの日本語グループ (米田) [tyoneda@aurora.ocn.ne.jp](mailto:tyoneda@aurora.ocn.ne.jp)
- なお、子どもの日本語グループでは子ども用の教材などについて、その紹介や活用などの相談活動を行っている。

---

<sup>1</sup> 中学校3年2学期での来日がある。この対応は大変難しい。不就学は過去に数例あったが、お助け隊に関してはその後見られない。

<sup>2</sup> 勉強お助け隊運営のための教材購入や印刷などで、富山市民国際交流協会からの援助を受けている。

<sup>3</sup> 教材のほとんどは、各地のボランティアや国際交流協会作成のもので、Web上に公開されている。

<sup>4</sup> 子どもは学校の宿題そのままを持ってくることがある。読めなくても他の日本人の子どもと同じもの、つまり「そのまま」を課せられる例が多い。また、長期にわたって課せられない場合もあり、両者のどちらかである。

## 5.3.2. アレッセ高岡（高岡外国人の子どものことばと学力を考える会）

青木 由香（アレッセ高岡 代表）

### 1. 目的

日本語を母語としない外国人中学生の高校進学を支援すること。

### 2. 活動内容

#### ・学習支援

日本語を母語としない中学生を対象に、週2回、以下の時間・場所において学習指導を行っている。

火曜日 17:00～19:00 ウィングウィング高岡6F 高岡市男女平等推進センター交流室

土曜日 9:00～11:00, 12:00～15:30 高岡市ふれあい福祉センター2F ボランティア活動室

#### ・教育・進学に関する情報提供

他の市民ボランティアとの協働により、外国人生徒・保護者を対象とした高校進学説明会を開催し（詳細は別項）、広く外国人保護者に対し、日本の教育制度や受検制度についての情報を提供している。

### 3. 現況（2012年12月現在）

- ・生徒15名（中国、ブラジル、韓国）
- ・講師12名（国語、数学、理科、社会、英語、日本語）、アシスタント2名、事務1名
- ・月謝3,000円

### 4. これまでのあゆみ

アレッセ高岡は、2010年4月、外国人の子どもの教育問題を憂慮する市民ボランティア有志（ボランティアグループ「日伯交流友の会」のメンバーの一部）により設立。正式名称を「高岡外国人の子どものことばと学力を考える会」といい、ポルトガル語の会名 *Associação do Apoio Linguístico e Educacional para Crianças Estrangeiras* の頭文字をとった ALECE「アレッセ」という愛称を普段は使用している。

ことばの壁や母国と日本との教育制度・内容の違いから、日本の学校での学習に困難を覚えている子どもたちが多い中、特に中学校段階でドロップアウトしてしまったり、進学を諦めてしまったりするケースが多いことから、緊急性の高い中学生の学習支援に照準を絞り、生徒4名、講師4名から活動をスタート。その後、口コミや関係者の勧誘によって広がりを見せ、2012年12月現在、15名の外国人中学生を対象に、各教科および日本語の講師12名（退職教員、塾講師など）と2名のアシスタント（大学生など）が週2回の学習指導にあたっている。

## 5. 課題と展望

### （1）課題

- ・当初は月謝を500円としていたものの、運営継続は困難を極め、2011年4月より月謝を3000円に値上げした。しかしながら、月謝を滞納し支払いが嵩んで足が遠のいてしまうケースや、子どもの方が親に遠慮して参加に二の足を踏むケースが少なからず見られる。経済的な理由で支援を受けられない状況を作らないようにすることと、会の運営を維持することとの両立をどのように図っていくか。

- ・子どもたちの学習の遅れは深刻であり、なかなか遅れを取り戻すことが困難であるという現状がある。限られた時間で、どのように効率的に指導し、成果を上げることができるか。
- ・アレッセで支援を受けたことで何とか高校に入学することができても、高校入学後、やはり授業についていけず、結局中退してしまう生徒がいる。アレッセでは2011年以降、高校生も部分的に受け入れてはいるが、高校生受け入れの体制が整っているとは言い難い。

## (2) 展望

日本語を母語としない子どもたちが学習・進学で抱える問題は非常に大きく、深刻である。ボランティア組織の力のみでこの問題を克服するということは困難であり、子どもたちが実際に通う中学校や目指す高校と情報を共有し、連携していくことが必要であると考えている。

## 6. 問い合わせ先

学習支援の必要な生徒（日本語を母語としない中学生、または高校受検を目指す過年齢の子ども）、および協力者（教科、日本語の講師・アシスタント）を随時募集している。連絡先は以下のとおり。

代表 青木由香 AOKI Yuka

E-mail: [alece\\_takaoka@hotmail.co.jp](mailto:alece_takaoka@hotmail.co.jp)

URL: <http://saponavitakaoka.jp/group8/>

### 5.3.3. 「ワイワイにほんご・たいこうやま」子どもクラス

田上栄子（ワイワイにほんごたいこうやま）

#### 1. 「ワイワイにほんご・たいこうやま」とは

##### （1）設立の経緯

「ワイワイにほんご・たいこうやま（以下、ワイワイ）」とは、公益財団法人とやま国際センター（以下 TIC）、地域日本語教育専門家のトヤマ・ヤポニカ、ボランティアの三者が協働事業で立ち上げた地域日本語教室である。2004年に富山市に設立された「TIC 土曜クラス」を前身とする。2006年に射水市南太閤山に移動、「日本語教室 in 太閤山」として1年の立ち上げ事業で現在の形に整えた後、名称を「ワイワイにほんご・たいこうやま」に変更し、ボランティアによる自主運営グループとして自立し、今日に至っている。自立後は、TICの「アドバイザー派遣制度」を利用した活動維持のための専門家派遣、入門クラスへは県国際日本海政策課による専門家派遣（2011～12年度）という公的支援を受けている。

##### （2）活動の目的と教室の全体像

ワイワイは大人への支援を中心とし、多文化共生の地域づくりを目指す地域日本語支援教室である。図1に示すように4つのクラスで構成されている。

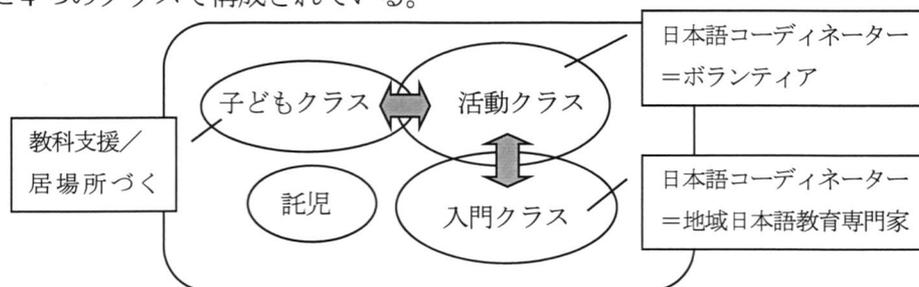


図1 教室の全体像

- ① 「活動クラス」：ある程度日本語が話せる外国人参加者を対象とする。毎回一定のトピックに基づいて、外国人参加者とサポーター（日本人・外国人いずれの場合もある）が基本的には1対1でペアになり、対話活動を行う。ここで話されることは参加者自身の現実に起きていることであるため、実際の問題が教室に持ち込まれ、問題解決のための話し合いが行われることが多い。また防災訓練、多文化共生のためのイベントなど地域の人や団体と連携した活動も行う。
- ② 「入門クラス」：日本語が全く話せない人から活動クラスに上がるまでの初期指導を行う。
- ③ 「子どもクラス」：日本語力の程度に関わらず、日本語指導・教科指導・進路相談などを行いつつ、なによりも子どもにとっての居場所となることを目指す。
- ④ 「託児」：参加者（外国人・日本人を問わず）の子どもを預かる。育児の悩み、就学前の相談なども行う。

以上の4つのクラスは別々に活動しているのではなく、お互いにつながっている。入門を卒業したら活動クラスに上がる、活動クラスの外国人や子どもクラスの卒業生が入門クラス・子どもクラスで通訳や子どもへの母語保持指導などの形でサポートをするなど、人の行き来がある。さらに、人の行き来だけではなく、各クラスの参加者が抱える問題について、何が問題なのか、どうすれば解決できるのかなどを活動クラスが中心となって話し合う。

#### 2. 活動の特色

活動の特色は、日本人と外国人が「教える・教えられる」という関係を越えて、「対等な立場」で「対話」をするという点にある。そして地域社会との連携も行い、共生の地域づくりを目指している。

### 3. 「子どもクラス」の実践

#### (1) 子どもの参加状況

支援対象者は小学生～高校生で、託児も含むと幅広い年齢層に対応している。また、サポーターも日本語教師、(元)学校教師、大学生、外国人、元子どもなど様々な背景を持っている。

しかし、活動時間が土曜日の夜であるせいか、これまでに参加した子どもは少ない。6年間の活動の中で参加者は20人程度である。ワイワイ全体のサポーター不足から人材を割くことが難しい場合もあって、積極的に広報をしていないということも影響しているだろう。そのため、事例はたいへん少ない。しかし、6年間の実践を経て得たことは、前述のワイワイの特徴が子ども支援にとってもよい結果を生んでいるという点である。

#### (2) 子ども支援において効果があったこと

日本語教師による教科支援、元子どもによる教科支援の補助、母語を使った教科支援、高校受験のための指導など、少しずつではあるが、実践を行ってきた。それら直接的な子ども支援に加えて、その保護者への支援にも取り組んでいる。活動クラスの対話の中で、教育に関するトピックを取り上げて情報提供するとともに意見交換をする、問題が起きると「活動クラス」で話し合い、特に地域に出て行動を起こす中で、問題解決に近づけようとするなど、保護者を孤立させず、元気づけようと活動している。このような動きが、日本の教育事情がよくわからず、戸惑っている保護者への大きな援助となっている。以下に例を挙げる。

##### ① いじめ問題

ある参加者から自分の子どもがいじめられているのではないという声があがった。親は当然不安と学校に対する不満を抱えていたため、まず活動クラスで情報交換をした。その後、サポーターが親に付き添い、学校と話し合いの場をもった。その時心掛けたことは、学校に対して抗議するのではなく、学校と親との間に入って両者の調整役を担ったという点である。互いに理解しあうための日本語による通訳者であり、関係作りを促進させる役を担った。話し合いの後、先生がワイワイに参加し、親子と積極的に関わった。その結果、親の学校に対するわだかまりはかなり解消していった。それ以降、ワイワイのメンバーがその学校の総合科目の授業に参加するなどの交流が続いている。

##### ② トピック「進路面談」

外国人の高校進学率が低いことはよく知られているが、その理由として進学に関わる情報を保護者が把握していないこともあるだろう。制度の説明をし、高校進学の意味、子どもが夢を持つことの大切さを参加者全員で話し合った。また、成績表の見方を伝えることもあった。そこから学校での教育について保護者自身が理解を深め、学校任せにするのではなく、親として積極的に関わっていこうとするきっかけづくりをした。

子どもの教育において、当然ながら親の役割は重要で、ワイワイでの活動が親を励まし、学校に対し、自らが主体的に関わっていこうとする姿勢の醸成につながっている。

### 4. 課題

支援者の不足は常に課題である。子どもの居場所づくりができるハートを持ち、教科支援もできる人材はやはり少ない。

### 5. 活動日・問い合わせ先

活動日 土曜日 19:00～20:30 (原則として第一土曜は休み・活動前後でサポーターミーティング)  
活動場所 南太閤山コミュニティセンター (射水市中太閤山13丁目3-1)  
参加費 大人:300円/回 子ども:無料  
URL <http://waiwainihongo.jimdo.com/> (問い合わせフォームあり)

#### 参考文献

中河和子他(2011)『平成22年度文化庁委嘱調査研究 生活日本語の指導能力の評価に関する調査研究』  
国際日本語普及協会

## 5.3.4. サポートセンター

### 5.3.4.1. 外国籍こどもサポートプロジェクトについて

富山県 観光・地域振興局 国際・日本海政策課

#### 1. 富山県多文化共生推進プランの策定

富山県では、平成19年3月に「富山県多文化共生推進プラン」（以下「プラン」）を策定しましたが、その背景として、平成2年から平成17年までの外国人登録者数の伸び率が全国第2位になるなど、外国人住民の急激な増加を受け、地域における外国人との共生が課題となってきたことがあります。

また、平成18年3月に総務省において「地域における多文化共生推進プラン」が策定され、各地方公共団体において多文化共生の推進に係る指針・計画を策定するよう通知されたところでもありました。

県では、平成18年6月に、学識経験者や外国人、国際交流に関わりの深い県民などで構成される「とやまの国際化を考える検討会」を設置し、外国人住民に対するアンケート調査、学校や企業等の関係者へのヒアリング、県民に対する意見募集などを経て、「外国人にも暮らしやすい、世界に開かれた『元気とやま』の創造」を基本目標とする次の4本柱からなるプランを策定しました。

- ・地域におけるコミュニケーションの支援
- ・生活支援の充実
- ・多文化共生の地域づくり
- ・推進体制の整備

#### 2. 外国籍こどもサポートプロジェクトの実施

平成19年当時、射水市は、県内市町村の中で最も外国人の人口比率が高く、中国、ブラジル、フィリピン、ロシア、パキスタンなど、多様な国籍の外国人が在住し、また、パキスタン人中古車販売業者と地域住民との軋れきが問題となっていました。このような状況を踏まえて、射水市を多文化共生のモデル地域として位置づけ、年々増加する外国人児童生徒への支援や地域の中での多文化共生を推進する先導的な事業として、(財)とやま国際センターが中心となり「外国籍こどもサポートプロジェクト」（以下「プロジェクト」）をスタートさせました。

このプロジェクトは、外国籍の子どもたちに学習支援の場として「多文化こどもサポートセンター」を提供するものであり、平成19年度から3ヵ年かけてサポートセンターの立ち上げ、運営を行い、その後はプロジェクト全体を射水市へ引き継ぐことにしました。

#### 3. プロジェクトのねらい

プロジェクトは、主に以下の3点を目標に実施しました。

##### ①外国籍の子どもの居場所づくり

外国籍の子どもは就学義務がないことから、不就学児童が多く存在すると推測され、そのような子どもたちが気軽に集まることのできる場所を提供し、学校に行きたくなくなるようなきっかけづくりを行う。

##### ②やさしい日本語、学習支援の提供

小中学校などの教育の現場では、外国籍児童の理解の速度に合わせて指導を行うことは困難であるため、ひとりひとりの学習進度に合わせて学習支援を行うことのできる場をつくる。

また、外国籍児童の家庭では母語を使用することが多く、日本語の使用機会が少ないため、日本語と触れ合う時間を多く提供する。

### ③地域での共生・交流の促進

地域の住民たちがボランティアとなって、地域の外国籍の子どもたちと触れ合い、地域での共生を進めるとともに、子どもの交流から親同士への交流の波及効果をねらう。

## 4. プロジェクトの概要

### ①事業の実施体制

在住外国人との共生は、多岐にわたる問題が多く、単独機関での実施は難しいため、行政、国際交流団体、住民組織等の関係機関で構成する「射水多文化共生推進会議」を設置し、プロジェクトを推進することになりました。メンバーは、(財)とやま国際センター、富山県、富山県教育委員会、射水市、射水市教育委員会、射水市民国際交流協会、富山YMCA、地域日本語教室、地元自治会、富山大学(人間発達科学部)、外国人住民などで構成され、また、企画・実行を担う実働チームとして、コアメンバー連絡会議を設置しました。

### ②多文化共生サポーター養成講座(平成19年度～平成21年度)

まずはじめに、サポートセンターの運営を支えるボランティアを養成するために「多文化共生サポーター養成講座」を開催しました。

地域の問題を地域で解決するために、地域住民がボランティアとして、外国籍の子どもと寄り添うことが必要であり、講座では、田村太郎氏((特活)多文化共生センター大阪)をはじめ、県内外で活躍する多文化共生の先駆者を講師として招き、3ヵ年で延べ80人のサポーターが誕生しました。

### ③多文化こども交流会(平成19年度)

サポートセンターの開設前に、サポーターと外国籍の子どもたちが触れ合う体験の場として、また、地域での外国人との出会いや日本人の親と外国人の親が触れ合うきっかけとして、多文化こども交流会を開催しました。バルーンアートや武道、大島絵本館のボランティアによる絵本の読み聞かせ、外国人住民と日本人住民が作る料理教室などが11月に行われ、241人もの住民が参加しました。

### ④射水市における外国籍の子ども不就学実態調査(平成19年度)

平成19年当時、法務省の「在留外国人統計」をもとに推計した学齢期の外国人児童数と、県内で実際に就学している外国人児童数には大きな乖離が見られ、推計される就学率は59%しかありませんでした。そこで、まず実態の把握が必要だと考え、射水市において不就学実態調査を実施することになりました。

平成20年2月1日現在の射水市の外国人登録原票をもとに、県、射水市、(財)とやま国際センター、射水市民国際交流協会のスタッフが直接自宅を訪問して調査を行い、その結果、学齢期の外国人登録者数が134人、うち就学者数104人、不就学者数9人、不明21人となり、推計値とはかけ離れた結果(就学率92%(不明除く))となりました。

### ⑤外国籍の親と子どもに対するアンケート調査(平成19年度)

不就学実態調査とあわせて、多文化こどもサポートセンターのニーズ把握のために、射水市内のすべての外国籍の親子を対象としたアンケート調査を実施しました。サポートセンターでは、ゲームやスポーツ、工作、音楽、日本語の勉強、外国語の勉強、読書などを実施したいという声が多く、いずれもボランティアが対応できるものだと考え、開設を目指しました。

### ⑥多文化こどもサポートセンターの開設(平成20年度～平成21年度)

射水市の中で、最も外国籍児童の多い放生津小学校地区に最初のサポートセンターを開設し(平成20年6月7日)、次年度に外国籍児童の集中する太閤山・中太閤山小学校地区に2ヶ所目のサポートセンターを開設(平成21年10月3日)しました。

放生津での開設当初は月2回(土曜日の午前10時から12時の2時間)の開催でしたが、運営が軌道

に乗った2年目からは、毎週開催に変更しました。サポーターとして参加するボランティアは、学校の宿題やドリルなどの学習援助のほか、絵本の読み聞かせや折り紙、塗り絵、手品やジャグリングなど、それぞれの特技を活かした寄り添い活動を実施しています。また、小学校の教室で行う出前サポートセンターや、太閤山住宅団地内での夏休み宿題教室なども開催し、当日、入り口で小学生たちがボランティアを並んで出迎えるといった感動の場面もありました。

## 5. プロジェクトのその後

現在、射水市内の「多文化こどもサポートセンター」は行政の手を離れ、地域のサポーター（ボランティア）により運営されています。外国籍の子どもたちは、サポーターともすっかり仲良くなり、公民館などで開催される地元NPO団体が主催する料理教室や各種行事にサポーターと一緒に参加するなど、地域に根付いた活動になってきています。さらにサポートセンターには、今や外国籍の子どもだけではなく、地域の日本人の子どもも集まるなど、この事業は、地域の課題は地域で解決していくというひとつの手法となったのではないかと考えます。

また、この射水市でのプロジェクトの成功をもとに、平成22年度からは、高岡市においても同プロジェクトを開始し、平成23年10月に野村小学校地区に「多文化こども勉強室」を開所することができました。

多くの子どもたちが、このような場をとおして自分の居場所を見つけ、日本文化や日本語に親しみをもつことで意欲的に学習に取り組むようになることを期待するとともに、地域においても子どもたちへのサポートを通じて異文化に関する理解が深まり、多文化共生の地域づくりが進むことを期待します。

## 5.3.4.2. 多文化こどもサポートセンター

原 由理恵（多文化共生マネージャー）

### 1. 射水市の外国籍児童の現状

射水市でも外国人の定住化が進み、就学年齢にある外国籍児童数も年々増加、平成24年5月現在で130人を超えています。彼らの国籍、生い立ち、生活状況や環境は様々です。日本語が全く分からず友達ができないこども。日常生活に必要な日本語は分かるけれど、勉強で使う言葉が分からないこども。親が日本語の読み書きができないため、宿題を教えてもらえないこども…困っていたり、問題を抱えていたりするこどもも少なくありません。

### 2. サポートセンター概要

平成19年に県の多文化共生推進のモデル地域に選ばれたことをきっかけに、外国籍こどもサポートプロジェクトがスタートしました。外国籍児童が多い小学校区の公民館（現在はコミュニティーセンター）に、外国にルーツを持つこどもたちが気軽に集まり、勉強したり遊んだりできる居場所（サポートセンター）を作ることになり、私も設立当初から関わっています。平成20年に放生津センター、平成21年に太閤山センターを開設し、現在は地域振興会が主体となって運営しています。毎週土曜日の午前10時から12時まで、外国にルーツをもつこどもたちだけではなく地域のこどもたちも集まり、ボランティアサポーターと一緒に宿題をしたり、トランプや将棋、百人一首などのゲームをしたりしています。サポーターは地元の方、教師経験のある方、学生さんなど、いろいろな方がいます。宿題のお手伝いだけではなく、自分の特技を活かしながら日本の季節の行事も紹介するなど、こどもたちと過ごしています。

活動も5年目をむかえ、こどもたちとサポーターの間にも信頼関係ができてきました。こどもたちの成長や変化にも気づかされます。「宿題に取り組んでいても10分と集中できなかった〇〇さんが、2時間ずっとテスト勉強をしました。成長しましたね…」と報告書に書かれている事もあり、とてもうれしく感じます。また、半年前に来日した姉妹がいるのですが、日本語が全く分からなかった初めの1・2か月のサポートは本当に大変でした。サポーターは今までの経験から中国語会話集を使って工夫して対応してくれました。日本語教育の専門家ではないので完璧ではないかもしれませんが、サポートできることはたくさんあるのだと実感しています。

センターは土曜日の午前中に活動していますが、平日の放課後、宿題を一緒にしてもらいたいと言う声が多くありません。しかし、平日となるとサポーターの確保ができません。今後活動を続けるにあたり検討しなくてはいけない課題です。

### 3. つながりのたいせつさ

より充実したサポートをするためには学校や保護者との情報共有が欠かせません。先生や保護者の方には、こどもたちのセンターでの様子を伝えています。外国人保護者向けのお便りは、ルビを振ったり、翻訳したりしています。コミュニティーセンターのお茶会や芋ほりなど、地域の行事にも参加させていただいています。

こどもを中心に、家庭・学校・地域がつながりあい協力していくことが、多文化共生をすすめ、住みよいまちづくりにつながっていくのだと思います。

### 5.3.4.3. 高岡市野村地区サポートセンター「多文化子ども勉強室」

亀田佳織（高岡市都市経営課国際交流室）

#### 1. はじめに

高岡市は県内でもとりわけブラジル国籍の方が多く、その人口は約1,100人で本市の外国人住民の40%以上を占めています。またブラジル人を中心に家族での定住化が進んでいるため、外国人児童生徒も200人超と県内で最多となっています。

彼らの多くは家庭生活では母語を使用する一方、学校での学習は原則日本語、という環境にあり、日本語あるいはいずれの言語も習得度が不十分である子は少なくないため、本市教育委員会やボランティア団体により様々な支援が実施されています。そして地域において子ども達の日本語習得や学習を支援し、健やかな成長をサポートするために誕生したのがサポートセンター「多文化子ども勉強室」です。

#### 2. 多文化子ども勉強室での支援

多文化子ども勉強室は富山県事業として平成23年10月、市内で外国籍の子どもが最も多い野村地区にある高岡市野村児童センターにて開所しました（毎週土曜10時～12時）。今年度は高岡市が運営を行い、野村小学校をはじめ市内小学校の外国にルーツを持つ子ども達に通っています。

勉強室では、毎回ボランティアサポーター（以下、サポーター）約3名が中心となって子どもの勉強をサポートし、勉強の後は楽しい遊びを通して参加者同士がコミュニケーションを図ります。現在参加している子どもは主に低学年であり、1時間じっくりと勉強できず集中力が切れてしまうことも珍しくありません。そこで、そばに寄り添っての指導や勉強後の遊びをご褒美にするなど工夫を凝らして、机に向かう習慣づくりから始めます。後半の遊びの時間は、元気に体を動かしたり、かるた、折り紙などを行っています。ここでも、楽しく遊びながら、サポーターとの会話や遊び道具を通して日本語や日本文化の習得を図るようにしています。

この多文化子ども勉強室の特色は、少人数制で運営していることからほぼマンツーマンの細やかな対応を行っていることです。サポーターの皆さんは、子ども達に声かけや寄り添い指導を通して一人ひとりに合った対応を心掛けています。そのお陰で、子ども達も少しずつですが自発的に学習する姿勢を身に付けています。

#### 3. 開所1年を経て（今後の展望）

開所から1年余りが経過し、多文化子ども勉強室の存在は少しずつ定着してきましたが、開所地である野村地区以外ではまだ認知不足のように思われます。また、行政主体ではなく、子ども、サポーター双方が主役となり充実した活動が行えるよう、子どもとサポーターの意見・提案をより反映した運営も求められます。

今後は市内各所にて周知を行い他の地区からの参加者増加を図るとともに、サポーター同士の繋がり強化を図りサポーターの主体性を大切にした運営を目指す必要があります。また、「日本語・学習支援の場」のほか、時には在住外国人の方々のご協力も得ながら、勉強室の参加者が「多文化共生を学ぶ場」としても機能していきたいと考えています。

## 5.4. 「子どもラーニングサポート北陸」の試み

山崎 けい子（富山大学人文学部）

### 5.4.1. はじめに

富山県のような、外国籍の人たちが小規模な塊はあるものの広い範囲に散在して住んでいる地域で、外国籍等の子どもたちにどのような支援が出来るのだろうか。この課題を解決すべく「子どもラーニングサポート北陸（以下、子どもラサ）」は始まった。これまで「子どもラサ」は、主に「翻訳教材作成プロジェクト」を企画、実施した。小学校国語教科書翻訳教材を使用する言語学習に加え、「翻訳教材そのものを作成していく過程」（翻訳教材作成プロジェクト）にも力点を置き、いかに子どもを囲む地域のメンバーの手を借り、巻き込んでいけるかを考えた。その助け合い・連携の中にこそ実質的な共生サポート関係が生まれ、子どもたちの学習環境となり得ると考えたからである。このつながりを支えるものとして、HPやメーリングリスト等の利用、啓発的講演会の実施も考えた。

### 5.4.2. 「子どもラサ」の歩み

「子どもラサ」のこれまでの歩みを以下の表にまとめた。

2006年4月	北陸、富山の外国籍等の子ども達の問題を重要視する者達が集まり、活動の礎ができる
2006年12月16日	講演会開催「外国籍の子ども支援のための地域組織作り」松本一子氏
2007年2月3日	講演会開催「国語科における内容重視のアプローチ」清田淳子氏
2007年2月17日	講演会開催「学びをつなぐー子どもたちの学習環境を創るー」齋藤ひろみ氏
2007年2月	ウェブサイト「外国籍の子どもたち支援の情報サイト」を立ち上げる
2007年4月	翻訳教材作成計画を立ち上げ、準備を始める
2007年7月	「子どもラーニングサポート北陸（子どもラサ）」を集まりの正式名称とする
2007年9月	翻訳教材作成プロジェクトを開始する
2007年10月21日	翻訳教材作成メンバーによる第1回勉強会開催
2007年11月	旧ウェブサイトから、「子どもラーニングサポート北陸（子どもラサ）」のウェブサイトリニューアルする
2007年11月	ウェブ上に外国籍年少者向けの日本語指導に役立つリンク集を、現職小学校教師の協力により作成し、公開する
2007年12月1日	講演会開催「学ぶ力を育てることばの教育」石井恵理子氏
2008年2月24日	翻訳教材作成メンバーによる第2回勉強会開催
2008年2月～	「ごんぎつね」翻訳教材（中国語版（簡体字版、繁体字版）、ポルトガル語版、タガログ語版、ロシア語版）のウェブ上公開始まる
2008年11月2日	翻訳教材作成メンバーによる第3回勉強会開催
2008年12月20日	講演会開催「地域在住の外国籍の子ども支援：豊橋市の取り組みから」築樋博子氏
2009年2月22日	翻訳教材作成メンバーによる第4回勉強会開催
2009年3月～	「白いぼうし」翻訳教材（中国語版（簡体字版、繁体字版）、ポルトガル語版、タガログ語版、ロシア語版、タイ語版）のウェブ上公開始まる
2009年3月21日	子どもラサ メーリングリスト開設（*2013年1月現在も存続）
2009年10月12日	翻訳教材作成メンバーによる第5回勉強会開催

2009年11月29日	講演会開催「ニューカマーの子どもたちの教育を求めて—今、日本語国際学級がおもしろい!—」善元幸夫氏
2010年2月7日	翻訳教材作成メンバーによる第6回勉強会開催
2010年3月～	「一つの花」翻訳教材（中国語版、ポルトガル語版、タガログ語版、ロシア語版、タイ語版）のウェブ上公開始まる
2010年9月10日	翻訳教材作成メンバーによる第7回勉強会開催
2010年12月19日	講演会開催「移動する子どもたちの「今と課題」ブラジル ⇄ 日本」小貫大輔氏
2011年3月30日	翻訳教材冊子版『どっちから勉強する？日本語？母語？』発刊（*HP版との違い：(1)新たに「アップとルーズで伝える」翻訳教材（中国語版、ポルトガル語版、タガログ語版、ロシア語版、タイ語版）を、冊子版に加えた（2）各作品の日本語学習用ワークシート、母語学習用ワークシートを学びやすくするため、改定した）
2011年3月31日	翻訳教材（「ごんぎつね」「白いぼうし」「ひとつの花」）ウェブ上公開終了
2011年4月～	翻訳教材冊子版『どっちから勉強する？日本語？母語？』、富山県関係機関等への配布開始
2011年6月～	ウェブ上に、冊子版送付申し込み方法を掲載 翻訳教材冊子版『どっちから勉強する？日本語？母語？』の全国向け送付開始
2011年6月12日	翻訳教材作成メンバーによる「発刊記念パーティ」開催
2012年2月8日	「子どもラーニングサポート北陸（子どもラサ）」のURLの移動

### 5.4.3. 「翻訳教材作成プロジェクト」

「翻訳教材作成プロジェクト」には、多数の支援を得た。色々な立場からの、例えば、外国籍年少者の保護者、外国籍年少者、元外国籍年少者、留学生、地域の外国語母語話者、小学校教師、元小学校教師、日本人ボランティア、日本語教師等々の支援が集まった。この翻訳教材の意義を知り手助けを申し出てくれた人が多い。実際のところ集まらなければ、これだけの翻訳を行うことは到底出来なかった。そういう状況が人を集めたとも言える。幾度となく開かれた、「翻訳教材作成メンバーによる勉強会」で翻訳の問題点やアイデアがそれぞれのメンバーからあげられ、皆で頭をあわせて解決策を考えていった。非常に熱心、かつ和やかな勉強会であった。

尚、この翻訳教材の目的は、1) 比較的高い母語能力を持つ外国籍の子ども達が、母語で教科書の内容を知り、認知レベルの高い所で理解を深めること、2) 現在の母語能力を保持すること、あるいは伸ばすこと、3) 日本語での教材の理解につなげ、実際の教室活動への参加を促進することにある。

### 5.4.4. 終わりにかけて

これまで、富山県や近県の関係者に手渡しで冊子版を配布してきた。また、HPに送付申し込み情報を載せ、個人、機関を含め、全国16都道府県に送付した（東北地方からの申し込みは残念ながら未だない）。子どもが目を輝かせて翻訳版を読んでいた、本当にありがとう、などのお礼の便りも多い。プロジェクトメンバーがそれを知ると非常に嬉しそうな顔をする。メンバー総力で成し得たことが、期待以上の意義深さをみせてきている。

富山県内では、実際に外国籍等の子どもたちに出会った。翻訳教材を熱心に読んでいる姿を目の当たりにした。外国籍等の子どもたちの支援者とのつながりもできた。そのつながりを発端とし、高校入試特別措置に関する、教育委員会への要望書提出という、「子どもラサ」から離れた展開も生まれた。

ただ問題点は、「子どもラサ」の活動が現在停滞中であることである。あまり大掛かりなことを行うとメンバーに疲労感が溜まるという、裏事情もある。しかしながら、これまでの活動に興味を待たれた方は是非、HPにアクセスしていただければ幸甚である。HP上から「問い合わせ」やコメントを送ることもできる。⇒「子どもラサHP」：<http://kodomolasa.jimdo.com/>

## 第6章「富山県多文化共生推進プラン」と多文化共生施策

～日本人にも外国人にも暮らしやすい、世界に開かれた「元気とやま」の創造にむけて～

富山県 観光・地域振興局 国際・日本海政策課

### 6.1. 富山県多文化共生推進プランの改訂

富山県では、平成19年3月に「富山県多文化共生推進プラン」を策定し、多言語による行政・生活情報の提供や相談体制の充実など、多文化共生の地域づくりを進めてきました。

このプラン策定から5年が経過し、この間、世界的な経済不況や、それに伴う雇用情勢の悪化を受けて、本県の外国人登録者数は減少傾向にあります。その一方で、県内に踏みとどまる人々については、滞在の長期化、定住化が顕著になるなど、県内在住外国人をとりまく環境は大きく変化しています。

こうした状況を踏まえ、外国人住民を含めた全ての県民が互いの文化の違いや価値観を尊重し、共に安心して暮らせる地域づくりをさらに推進するため、プラン改訂委員会における検討を経て、平成24年3月、「富山県多文化共生推進プラン」を改訂しました。

### 6.2. 富山県多文化共生推進プランの概要

#### 6.2.1. 外国人住民を取り巻く主な課題の整理

在住外国人の状況（統計データ）やアンケート結果（平成23年7月実施）から、平成20年秋以降の世界的な経済不況の中にあっても、富山県が住みやすいことを理由として、あるいは家庭、就労、教育など生活基盤が既に県内にあることを理由として、母国には帰らず県内に踏みとどまる人々が多いことがわかりました。

今後も県内に住む外国人の滞在の長期化・定住化の傾向が続くものと予想されることから、そのことを前提として、在住外国人を取り巻く課題を改めて整理し、今後の多文化共生の地域づくりを進めていくことが必要です。

課題1：日本語が不自由なことが困ったことや悩みにつながっている

課題2：子どもの教育に関する悩みは深刻度が大きい

課題3：地域活動への参加を望んではいないものの、実際には参加が進んでいない

課題4：日本人の多文化共生意識が不十分である

課題5：東日本大震災の教訓を活かすことが大事である

#### 6.2.2. 多文化共生推進に関する基本的な考え方

##### ① 暮らしやすく温もりのある地域社会の実現

外国人の滞在の長期化・定住化が進むなかで、外国人住民自身が日本の社会制度や生活習慣などの理解を深め、日本語を習得する努力をするよう促すとともに、日本人住民も外国人住民を一時的滞在者としてではなく地域の生活者、地域住民としてしっかり受け入れ、日本人と外国人が共生する地域づくりを進めることにより、日本人にも外国人にも、誰にとっても暮らしやすく温もりのある地域づくりが可能となります。

##### ② 地域の活性化

少子高齢化、人口減少により社会の活力低下が懸念されるなか、外国人住民は地域社会の担い手となりうるほか、労働や消費等を通じて地域経済を支え活力をもたらす存在ともなります。地域に住む日本人と外国人が、互いの異なる生活習慣や文化、価値観を認めあい、地域におけるさまざまな活動に共に

参加・協力するよう促し、また、外国人も日本人と同様、持てる能力を十分に発揮しうる環境を整えていくことにより、地域の一層の活性化や発展が可能となります。

### ③ 国際感覚豊かな人材の育成と元気な県づくり

グローバル化、ボーダーレス化が進展するなか、地域における多文化共生を進めることにより、人々の国際理解が深まり、コミュニケーション能力に優れ国際感覚豊かな人材の育成につながるとともに、世界に開かれた元気な県づくりが可能となります。

## 6.2.3. 多文化共生施策の方向性

富山県多文化共生推進プランでは、4つの分野に分けて施策の方向性を示しています。

### ① 地域におけるコミュニケーションの支援（生活の基盤づくり）

周囲との円滑なコミュニケーションが生活全般にわたる基盤となることから、日本語能力が十分でない、または、日本人とのコミュニケーションに不安のある外国人住民が安心して生活できるよう支援を行います。

- ・外国人相談・通訳サポート（トリオフォンを使った3者通話）の実施
- ・さまざまな日本語教室の開催、支援

### ② 生活支援の充実

外国人住民が、安心して富山での生活を送ることができるよう、医療・保健・福祉、教育、居住・労働、災害対策などの各分野において、必要な支援を行います。

- ・多文化こども勉強室（高岡市）の開所・運営
- ・災害時外国人対応支援事業

### ③ 多文化共生の地域づくり

外国人や異文化に対する理解と外国人住民の地域参加を促進し、日本人住民と外国人住民がともに地域の構成員として共生できる環境づくりを進めます。

- ・とやま国際塾（高校生対象のセミナー）の開催
- ・多文化共生講演会の開催

### ④ 多文化共生施策の計画的・総合的な推進

関係各機関の役割を明確化するとともに、連携を強化し、県内における多文化共生施策を計画的かつ総合的に推進します。

- ・富山県多文化共生推進連絡会議の開催

## 第7章 富山県在住の「元子ども」たちへのインタビュー

青木由香（アレッセ高岡）

### 7.1. はじめに

本プロジェクトでは、ドキュメンタリー映画「孤独なツバメたち」上映会&ディスカッションのイベント（1章参照）を開催するにあたって、映画に出演する「元子ども」たちと年代で似た境遇にある富山の「元子ども」について知ろうと、県内在住の「元子ども」たちにインタビューを試みた。当初はそのインタビューの内容をこのような形で公開することを想定しておらず、インタビュー調査に必要な知識や技術、作法も知らないままに、「元子ども」たちへの聞き取りやディスカッションを重ねていった。しかし、彼らの語りの中には、日本の教育が抱える課題や、外国にルーツをもつ子どもたちの支援はどうあるべきかといった重要なヒントが散りばめられており、インタビューを続けるにしたがって、これらの語りはぜひとも公開すべき貴重なデータであると認識するに至った。

インタビュー調査の素人が実施したインタビューでの語りは、研究・分析のための調査データとしては信頼性や正確さが不足しているかもしれない。しかしながら、インタビュー時、時には涙を流し、時には怒りに震え、時には満面の笑顔で話してくれた彼らの経験の語り全てが無意味だとは思えない。以下に試みた分析も十分ではなく、未熟で稚拙ではあるが、少しでも彼らの思いを多くの人に伝え、一体どこに問題があった（ある）のか、そして今後どう我々は取り組むべきなのか、ここに公開する彼らの語りが、問題提起と、問題解決の糸口になればと思う。

### 7.2. インタビューの概要

#### 7.2.1. 目的

富山県内に住む、外国にルーツのある「元子ども」について、彼らの学校時代の経験と現在の思いについて知ることを目的とする。

#### 7.2.2. 対象

インタビュー対象者は、学齢期以前の年齢で来日し（もしくは日本で出生）、日本国内、特に富山県内で小学校や中学校に通学した経験を持つ、10代後半から20代前半の、外国にルーツのある「元子ども」11名である。

この11名はいずれも、キーパーソンである外国人相談員の二瓶博子氏<sup>1</sup>が、かつて相談員として小中学校で指導したことのある「元子ども」たちであり、二瓶氏から声をかけてもらうことでインタビューが実現した。

#### 7.2.3. 日時・場所

インタビューは、2012年4月～5月の期間に、7回にわたって行われた。インタビューアーは田上、青木が務め、通訳を兼ねてキーパーソンとして、すべてのインタビューに二瓶氏が同席している。

日時・場所	「元子ども」	インタビューアー
2012年4月29日 於 高岡市ふれあい福祉センター	J (男), S (女), Y (男), C (男)	二瓶 (キーパーソン・通訳) 田上, 青木
2012年5月4日 於「元子ども」自宅	M (男)	二瓶 (キーパーソン・通訳) 田上, 青木
2012年5月4日 於「元子ども」自宅	H (女)	二瓶 (キーパーソン・通訳) 田上, 青木

2012年5月10日 於「元子ども」自宅	T (女)	二瓶 (キーパーソン・通訳) 青木
2012年5月11日 於高岡市ふれあい福祉センター	A (男)	二瓶 (キーパーソン・通訳) 青木
2012年5月14日 於「元子ども」自宅	V (女)	二瓶 (キーパーソン・通訳) 青木
2012年5月17日 於「元子ども」自宅	L (男), D (男)	二瓶 (キーパーソン・通訳) 青木

#### 7.2.4. 方法

インタビューはいずれも「元子ども」たちの同意を得た上で、田上、青木私有のICレコーダーで録音が行われた。

インタビューでは、子どもの支援に携わっている筆者らの関心が子どもの教育にあったため、主に「元子ども」たちの学校時代の経験とその時代を乗り越えた今の彼らの気持ちについて質問を行った。自由な談話スタイルであったため、中には「元子ども」たちだけでなく、キーパーソンである二瓶氏が経験を語る場面や、インタビューアである田上、青木が意見を述べたり、ディスカッションをしたりする場面もあった。

録音データは、まず、業者に依頼し全て文字化された。その後、青木が文章全体をチェックし、できるだけ元の語りを忠実に再現するよう調整を行った。また、ポルトガル語の部分の文字化と翻訳は全て、二瓶氏、青木、そしてインタビューイである「元子ども」の一人が行った。

文字化されたデータは、話のまとまりごとにタグ付けをし、カード化して青木が分析を行った。

### 7.3. 「元子ども」たちの声

以下、「元子ども」たちの声を紹介していく。

インタビューでの語りは全て斜体で記している。生の声を届けるべく、ほぼ文字化されたままのデータを挙げているが、文意が不明になりそうなところは( )内に言葉を補い、ポルトガル語で話された部分は日本語に訳し、【 】を付した。個人名や学校名、地名等は、特定されないよう〔個人名〕〔学校名〕のように表記している。また、都道府県名や市区町村名も伏せているのでわかりにくいのが、日本国内を移動することも多い彼らの経験は、富山県内のものには限らないことを申し添えておく。

#### 7.3.1. 子どもたちの苦悩

「元子ども」たちは、日本生まれや幼児期に来日した者を除くと、いずれも小学校または中学校段階で来日し、日本の学校に途中転入している。みな、来日してまもなくは日本語がわからず、学校でも人間関係の構築に苦労している。

- 元子どもC: 日本に来てから、最初は日本語が全くしゃべれなくて何回も困った。友達を作るのも難しかったね、最初は
- 元子どもT: 勉強は、初めは本当にできるのかなと心配だった。ブラジルでは6歳で急に一日中、学校というのはそんなには  
青木: 大体半日ですね。  
元子どもT: 半日ですし、本当にびっくりした。でも子どもだったからやってみようと思った。そして友達と仲良くしようと思ったときに、しゃべれないから、仲間外れみたいなことをされて、役に立たないみたいなことを結構言われました。
- 青木: (いじめは)1年生のとき?  
元子どもT: 入った瞬間からいじめが始まったみたい。その学校に他にもブラジル人いたの。そのブラジル人からもいじめられた。  
青木: なんで。助けてくれなかったの。  
元子どもT: 小さかったからかもしれない。全然助けてくれなかった。ロッカーの中に腕を縛ってそのまま放っておかれ

たりとか。

青木： 1年生にそんなことするの。

元子ども T： そう。でもその人たちはもっと大きくて、私だけが1年生で。先生たちに言っても誰も信じてくれなかった。日本語をちゃんとしゃべれるようになるまではいじめはすごかった。

- 青木： 小学校6年生で5月から入ったときからは、ずっと学校行っていた？

元子ども A： ずっと。

青木： 休まず？

元子ども A： よく休みました。

青木： どうして休んだ。

元子ども A： 学校に行きたくなかった。

青木： どうして行きたくなかった。

元子ども A： 初めはいじめやね。特に親が厳しいから仕返しは禁止されてた。だから全然仕返しをせんと、我慢するぐらいなら休む。だから一応家は出たんだけど、学校へ行かずに親が仕事に行ったらまた帰ってきた。

- 元子ども H： 小学校のときにちょっといじめられた。やっぱ無視。友達に理由を聞くと「あんたといると疲れる」と言われた。「どういう意味？」って聞いたら、結局、日本語が分からんから「何それ、何それ」って全部説明しなきゃいけないから疲れると言われて。みんなに無視されるような感じに。
- 元子ども M： それは俺も、最初は全然日本語話せないし、小馬鹿にされるし、文句を言われても何を言っているか分からないし。ただ文句を言っているのは分かるわけで。防御として殴るしかないじゃないですか。だから俺は結果的に小学校のときに何人かけがをさせとるし。

また、日本語がわからず、母国と学習内容に違いもあるため、子どもたちには勉強の面でも大きな困難が伴う。

- 元子ども M： そうですね、小学校のときはひどかったですね。ずっと黒板を見つめるだけだったので。5年生のときに来ているので、その前の4年間を全然知らないんで、急に5年生のものをやれと言われても全然分からんし。卒業はしていたのですが、それが頭に入っていたかといったら入っていないし。だから中学校に行ってもなおさら分からなかったですね。
- 元子ども H： 算数は向こうと日本で教える差があって、こっちは2年で九九全部やるけど、向こうは2年ではまだ3の段までしかやらなくて、こっちに来てみんな九九が終わって割り算に入っていた。私はずっとわからないまま覚えられないままだったから、数学はすごく苦手。

文化や習慣の違いがいじめなどにつながることもある。

- 二瓶： 彼女のいとこは女の子が二人いたよね。すごくいじめられたって言ってた。  
元子ども H： ピアスも付けてたし、もう開いとる時点で言われる。日本は開けない文化だけど、向こうは女の子は開ける文化だから。それだけでも言われる。  
二瓶： 授業参観のときに服装とかを知らなかったって言っていたね。だから、それですごく言われて、子どももそれにつながっていじめられたとか。  
元子ども H： でも、昔は授業参観のとき、お母さんたちはスーツとかきっちり着ていったじゃないですか。最初は分からなくて、お母さんが普通の普段着で来たら、やはりそういうふうに。外人のお母さんやからいるだけでも違うし、それも言われるし。  
(中略)  
二瓶： 今、卒業式のときに保護者から卒業式だけど、どんな服で行けばいいとかよく電話がかかってくる。だから、文化の違いというのは、やっぱり。  
元子ども H： すごい。そういう小さいことかもしれないけど。子どもには「これで来てください」とは言うけれども、親には言わない。

しばらくすると、子どもたちは、日本語での会話はできるようになっていく。そのことで学校での人間関係が改善した者もあったが、多くは問題を抱えたままであった。

- 元子ども A： でも日本語を覚えるようになったらいじめもなくなってきた。俺からしたら言葉が分からないからいじめられていたのかなと思った。

青木: 言葉が分かるようになると、ちょっといじめがなくなってきた。それは言葉が分かって友達ができたということかな。

元子どもA: そうですね。あと言い合いができるというもの。

青木: 対等になるということかな。どっちが上とかではなくて、同じように話し合える。

- 元子どもT: (日本語がしゃべれるようになるまではいじめがひどかった。)でも日本語がしゃべれるようになって、みんなが言っていることがすぐに分かるから、分からないときは何言っているのかなと思うでしょう。

青木: それは悪いことってこと。

元子どもT: そう、悪いこと。言っていることが分からなかったときは大丈夫だったんだけど、それが分かり始めるともつとつらくなった。

勉強も、日常会話ができるようになったからといって、すぐに授業についていけるわけではない。

- 元子どもL: 話は分かるけど書くのがちょっと駄目だったから。授業の内容はそれほど分かってなかった。

二瓶: ただの日本語とは違うから。

元子どもL: そうそう。友達と話をするがと先生の話とは違うから。

青木: 最初に小学校2年生で入ったときは日本語分からなかったでしょ。だんだん日本語が分かってきたけど、授業中に先生が言うことは分からない。

元子どもL: そう。(授業)のことは、あまり分からない。人数が多いから自分だけに説明する・・・。

青木: 質問したりとか、聞けないものね。

元子どもL: そうそう。その中でどんどん遅れていく感じになって。

- 元子どもA: [学校名]小学校のときは良かったね。いじめも何もない。[学校名]小学校にずっとそのままだったら(勉強に)ついていけた。

人間関係がうまくいかなかったり、勉強についていけなかったりして、意欲を失い、学校を休みがちになっていった子は多い。

- 青木: どうして中1からやる気がなくなっちゃったの。例えば、勉強が分かんないしとか。

元子どもD: 流れじゃないですかね。なんか、面倒くさくなったり。ただ単に、面倒くさい。

青木: 成績は良かった?

元子どもD: 全然良くなかったです。

青木: 駄目だった。何点ぐらい取ってた?

元子どもD: まずテストを受けていなかったんで。

青木: 点数も分からない(笑)。

元子どもL: テストのときずっと休んでいたみたいな。

元子どもD: 学校には行ったけど、普通に屋上とか。

青木: では授業も受けていなかった?

元子どもD: 別室でした。

- 元子どもL: 【学校へ行っても誰も相手にしてくれなくて、話もできなかった。誰もブラジル人とは話したがらなかった。差別された。】

青木: どうして分かった?何か言われた?

元子どもL: ブラジルに帰りなさいとか。

青木: 子どもが言うの?

元子どもL: そう。学校に来なくていいとか、どうして日本に来たのか、来なくていいとかとよく言われた。

二瓶: つらいね。

元子どもL: それを乗り越えながら学校へ行っとして、でも全然友達ができなくて、たまに学校に着いたら中履きの靴に画びょうとか入ったり、気付かずに入れたら刺さったりして。

青木: それは先生に言った?

元子どもL: 言った。でも、あまり知らないふりとかよくあった。学校に着いたら暖房の中に靴が入ったりしたときもあった。

青木: それでも頑張って学校に行っていた。

元子どもL: 頑張って学校に行っとして、そのときは全然勉強する気にならなくて12時とかに帰っていた。

- 青木: それ(いじめ)で学校を休むと勉強が分からなくなるし。

二瓶: だんだん休みたくなってね。

元子ども L: 僕もそうやった。

青木: どんどんやる気がなくなって。

元子ども D: 明日は学校に行こうと考えても、次の日になるとやめたみたい。

元子ども L: 僕の場合は行く気もなかったけど、いじめがあったからもっと行く気がなくなったみたい。

二瓶: 授業に付いていけないことといじめ、その二つ。

元子ども L: そのときはどうすればいいか分からなかった。親に言っても日本語をあまりしゃべれないし。

- 元子ども H: 引きこもり。だから週末も家を出るのも嫌やったし、何をやる気もなかった。何もしたくなかった。

田上: そのとき気分は暗かった？

元子ども H: 暗かったかも。多分暗かったと思う。いつも下を向いて歩いとったし。

田上: それはそういう学校の環境や友達関係がそうさせたね。

当時、「元子ども」たちが自己を非常に低く評価していた様子もうかがえる。ブラジルで学業の成功体験をもつ A は、日本での自身の状況とのギャップに戸惑いを感じ、あまりの状況の厳しさに努力することを諦めてしまったという。

- 青木: 最初に全然分からない、付いていけないとなったら、なかなか追いつくことができなくなるでしょう。

元子ども A: やっぱ力不足になってしまう。自分で「どうせ追いつけないだろう」と思ってしまう。

青木: 自分で自分を諦めちゃうよね。

- 元子ども A: 多分 (学業を) 続けていない一番の理由は、やっぱブラジルの学校を辞めて、また日本で学校を始めるのに 1 年ぐらいかかった。学校に行っていない期間があるから、そこで、まあいいやって思ってしまう。常に遅れてるから。ブラジルにいたときの俺だと、結構上の人だったのね。ブラジルだったら、A、B、C と点数を付けられるなら、大体 S が 100 点みたい、常に S ばかり。辞めて楽しくなくなっていったという。だから多分、日本で 1 年生からずっとやってたら辞めていなかったと思う。

青木: 付いて行ってたらね。

元子ども A: 付いて行っていなかったというのは (中学校を辞めた原因として) ある。

二瓶: それが原因かもしれないね。行っても面白くないし分からない。

元子ども A: 常に遅れているんだから。まあ、いいや時間の無駄だと。

また、人間関係や学業不振に悩む子どもたちが、問題行動へと導かれていく様子もうかがえた。

- 元子ども L: 中学校に入ってもいじめはあったし。

二瓶: あったね。何回か辞めると言っても、私が通訳したことあるもの。

青木: いじめが嫌だからもう学校辞めると。

元子ども L: だから中学校 3 年生の途中で辞めた。卒業の 6 カ月前。

青木: 卒業せずに。

二瓶: でも (卒業証書) もらったよね。

元子ども L: もらっていない。担任の先生からもしも辞めるんやったら卒業式 (証書) はあげないと言われて。でもつらかったから辞めた。

青木: やはり一番の理由はいじめ？

元子ども L: そう。それにそのとき悪い友達もおって、反対の道に行ってしまった、みたいな感じで。

青木: 悪い友達っていうのは、いわゆる不良みたいな？

元子ども L: 不良の感じに行っちゃって。

青木: 中学校に入って仲良くなった人？ それは日本人？

元子ども L: 日本人。「コンビニに行って万引しよう」って言われて、僕はしなかったけど友達が見て楽しいなって、徐々に行っちゃって。

青木: 万引しようってやっているのは、自分は・・・。

元子ども L: やっていない。分かるとるけど、かばうような感じになって。

青木: 悪いことだと分かってはいるけど仲間だから守りたいみたいな。

元子ども L: そう。仲間だから、守りたい。

二瓶: 唯一の仲間だからね。学校でできなかった友達が。

元子ども L: 外にあるから。悪い方向に行く可能性が大きい。

- 青木: 不良になっちゃったのは何で。

二瓶: 私、(当時、A の通う) 学校に (相談員として) 行っていなかったのだけれど、多分どこかにあったと思う。すごく不良に魅力を感じるというか。

青木： 不良に魅力を感じた？

元子ども A： 簡単な話、ほかの人よりもまず不良が友達になってくれた。ほかの人たちからは女友達が多いから嫌がられていたのに、不良たちは全員友達になって。俺が不良仲間になったから一緒になったという。大体そうやろうね。不良の人がまず友達になりやすい。仕事でもそう。そういう性能がいい人は嫌な目に見られるけど、不良っぽい人には友達として見られる。

- 元子ども M： 中学のときは先生やほかの生徒から見たら俺は不良だったらしいんですよ。つるんでた人も不良だったわけで。だから結局俺と一緒にいた人はこの空間の人で、ほかの人はこっちの世界の人というか。だからその時期でもう差別を感じていたんですよ。ちょっと服装がだらしなくてかだけで、俺らは違うんですかってずっと思っていましたね。  
田上： 不良だったかもしれないけど、そういう仲間があると安心していられるじゃない。そういう感じは今もある？ その不良の人たちとという意味ではなくて、今の生活の中で。自分を認めてくれて、自分がいつ行っても迎えてくれるし、いろんな話もできるし。  
元子ども M： そっちの方が人間として楽ですよ。社会人でも子どもでも、ずっと駄目出しをされていたらやっていけないと思うんですよ。

ここでは詳述しないが、彼らは学校でも地域でも様々な立場の日本人から「外国人」ゆえに差別的な言動を浴びせられた経験を持っている。しかしながら、現在大人になった「元子ども」たちは、そういった苦い経験について、特に学校内の「いじめ」や「問題行動」について、次のように冷静に分析し、外国人の問題としてではなく、日本の学校全体の問題として捉えている。

- 元子ども A： [学校名] で最初に友達になった日本人の友達も、不良ではなかったけど、[都市名] から来た転校生。そいつも肌が黒いからいじめられてた。それが一番初めに友達になった人。いまだに友達なんだけど。だから初めから他の人から嫌がられてる人ばっかが友達になった。
- 元子ども M： 日本の学校だけではないと思うけど、いじめは相当あると思うんですよ。まず先生に話を聞くと、「見てないので分かりません」とよく言われますね。それは絶対見えないんですよ。自分も小学校のときいじめを受けたし、中学校のときも先輩から目をつけられてやられたけど、それは絶対先生たちには分からない。いじめる人は絶対先生の目の前ではやんないから。
- 元子ども M： 今一緒に仕事をしている人も [学校名] の後輩で、結構ウザイよとか言っていましたね。すぐに「学校来んな」とか。別にブラジル人だけという問題ではないと思うんですよ。実際、俺はブラジル人ではなく、日本人とつるんで悪いことをしていたので。学校の中の問題だと思うので、放っておいてほしくないですね。もう少しその人に対しての接し方というのがあると思うんですよ。
- 元子ども H： 人とちょっと違ったらいじめの対象ですよ。転校したら言葉がちよっと違いますよね、方言が違うから。もうそこでターゲットだよ。 「何言ってるの」とか。私の友達も、日本人だけど、いろんな小学校に行って、全部いじめられてきてるから。やっぱ転校生だったら、人と違うというだけで、多分、そうやと思う。  
青木： そういう意味では、もしかしたらブラジル人だったら、ちよっと見た目が違うとか、日本語が分からないというのでいじめられやすい。  
元子ども H： やすいかもしれないですね。考え方も日本人と全く違うじゃないですか。いるだけで違うから。見るだけで違うし、考え方も違えば、全部違うのに。
- 田上： だから、本当は教育が変わらなければいけないと、私は本当に強く思う。子どものときから、違っていてもそれはいいんだということを教えていって、それが当たり前前の社会にならないと駄目だと思う。  
元子ども H： 駄目だと思う。だって、苦しんでいるのは私らだけじゃない。日本人でいじめられている子も一緒。

### 7.3.2. 挫折

様々な苦悩を抱えながら学校生活を続けていた彼らだが、11名のうち9名は中学校を中退、もしくは高校進学を断念している。

学業継続を断念した当時の状況や気持ちを、「元子ども」たちは次のように語っている。

- 田上： 高校へ行こうとは思わなかった？  
元子ども M： 思いました。おじさんと一緒に [都市名] に行って、あまりうまくいかないもんで戻ってきて、 [学校名] と [学校名] を受けたんですけど、二つとも不合格だったんで、 [都市名] に戻って仕事していました。  
田上： 高校へ行こうと思ったのはどうして。  
元子ども M： もともと勉強は好きなんですよ。

二瓶： もったいないね。

元子ども M： 今でも高校へ行こうと思っている。だけど今は子どもが4人いるし、そう簡単にはいかないんで。だけど昔から勉強は好きですね。ただ言い訳みたいになるんですけど、いつも先に楽しさばかり求めていたし、先生たちとはうまくいかなかったの、なかなかという感じです。

- 青木： (中2で中退したのは) どうして。

元子ども A： 仕事をした方がいいかなと思った。学校に行っても全然、得せんと思って。

青木： お金のということ。

元子ども A： お金。あと同じ時期におやじがヘルニアで入院してて、家がきつかったから。

青木： 家計を助けたいと思った。

- 青木： 高校に行かなかったのはどうして。

元子ども V： 行きたくなかったから、と、テストとかしなかった。

青木： 行きたくなかったのは学校が嫌だったの？ 勉強が嫌だったの？ 友達が嫌だったの？ それともただ仕事をしたかった。いろんな理由があると思うけど。

元子ども V： 学校が嫌で仕事をしたかった。

(中略)

二瓶： 勉強についていけないとか。

元子ども V： それもあった。

青木： 勉強に？ 勉強が面白くないから学校に行きたくないという感じかな。

元子ども V： うん。

- 青木： どうして高校に行かなかったの。

元子ども D： ただ単に働きたかったから。

青木： 勉強したくなかったとかではなくて、働きたかったの。

元子ども D： それも多少はありますけれど、働いて自分でお金を稼いで親のことを手伝ってという感じでやっていきました。

青木： 親を手伝いたいという気持ちがあったの？

元子ども D： うん。

(中略)

元子ども D： 高校行きたいっていう気持ちはあるけど。ありますけど。

元子ども L： 遊ぶためだろ。それならいい。

元子ども D： それで高校に行っても意味ないから、それならまだ働いて稼いだ方が。

元子ども L： 【勉強できるなら勉強した方がお前のためにはいい。】

元子ども D： 【でも、波がない。方法がない。】

元子ども L： 【方法はあるよ。お前はまだ15歳だろう。】

学業継続断念の理由を聞くと、まず返ってくる答えの多くは「仕事をしたかった」である。しかし、なぜ彼らが学業継続よりも仕事を選んだのかは、慎重に読み取らなければならない。元子ども V や元子ども D のように、掘り下げて質問していくと、断念したのは、「中学校時点で全く授業がわからないのだから、これ以上勉強を続けていく自信もなく、自分にはその価値はない。自分の学業継続は、時間とお金の無駄である。それならば、仕事を始めた方が家族も喜ぶし、有益である」と、自分自身を(低く)評価し、自分を取り巻く状況(特に、家庭の経済状況)を慮って判断した結果であったことがわかる。

### 7.3.3. 後悔と希望

このようにして、中退や進学断念を選択した「元子ども」たちであるが、実際に社会に出て、その厳しさを身に染みて感じ、振り返ってみて仕方なかったとは言え、当時の選択を後悔しているという。

- 田上： Mさんはいろいろあったかも知れないけど、一生懸命だったわけでしょう。

元子ども M： 自分の中ではそうですね。

田上： でしょう。それを駄目だったとか良くなかったという気持ちはある？

元子ども M： ありますね。今でも高校へ行っていないことは相当後悔していますし、もう少し真面目に勉強すれば良かったと思いつつも、「あの先公なかったな」というのもありますね。それが出るんで多分。

- 二瓶：もしまた中学校に戻るとしたら、また同じ道を歩む？  
元子どもC：今の頭ではしない。今戻れるんやったら、勉強したい。  
(中略)  
元子どもC：今思ったらくやしい。あのころあんなふうじゃなかったら、高校に行けて勉強できたがにって思ったりもしていたから。
- 青木：もう一つ聞いてもいい？ 勉強をしておけばよかったといつか思うだろうというけど、どうして勉強した方がいいと思う？  
元子どもT：例えば、今私のやっている仕事は、勉強していたらこんな仕事やっていたのかなという気持ちになる。  
青木：もっとほかの仕事ができたんじゃないかなということ。  
元子どもT：もうちょっといい仕事とか。今は人を手伝うという気持ちがあるんだけど、あそこにいる人たちだけでしょ。もっと違うところに入ったら、いろんな人を手伝っていたのかなと思う。でも今、勉強はどうにもならないから、このままこの会社で一生を過ごすのかな。
- 元子どもV：中学校を卒業して1年後に、もっと勉強すればよかったと気付いたの。  
(中略)  
元子どもV：卒業して仕事をして、もっと勉強すればよかったと思った。  
青木：どうしてそう思った？  
元子どもV：うーん。多分自分の役に立つと思う。  
青木：私はもっとできたんじゃないかなとか、もっと頑張ったらもっとできたはずなのになって思う？  
元子どもV：そう。
- 青木：では(職場での)人間関係は今良くなったけど、でも今学校にまた通いたいと思っているということは。  
元子どもA：資格は取りたいね。  
青木：今のままじゃ駄目だなと思ったということ。今、人間関係は良くなったし、お金も稼げるけど。  
元子どもA：結局、今のままだと年を取れば仕事なくなるだけだから、何か資格を取りたい。  
青木：将来のことね。  
元子どもA：いろいろな外国人がおるけど、45とか50になって仕事が見つからんで帰国している人が多い。何の資格も持っていないし学校も終わっていないから、将来はそうなりたくないなと思って。  
二瓶：それは、いつ決意したの。  
元子どもA：1年前。  
青木：24歳のときか。それは周りの人を見てて思った？  
元子どもA：そう。不景気になったときが一番きつかった。  
青木：3年前の。  
元子どもA：当時、派遣会社に勤めていたんでやばいなど。少しでも資格があれば職につけるのに、全然なかったら帰国しかない。やっぱ外国人は仕事ができるから雇われるだけで、年があったら全然雇われない。
- 元子どもA：【日本語で何て言うのかわからないんだけど、ポルトガル語で“Cu na mão.”】わかる？会社で仕事していると常に怖い。今日で最後かもしれない。あれは契約社員やん。大体3カ月、1カ月前になると、また更新されるのかなとか。  
二瓶：常に不安定。  
元子どもA：常に不安定だから、家買おうとかそういう大きな一歩はできない。それで家はまだ買ってないんだけど。  
青木：会社員は会社員でも、いろいろな会社員があるけど。  
元子どもA：外国人に関しては、本当の正社員になることはまず難しい。  
二瓶：最近息子から言われた。どれほど頑張ってもと言われた。  
元子どもA：無理とは言え切れないけど、難しい。  
(中略)  
元子どもA：〔都市名〕の〔会社名〕で正社員になった友達がいる。長い間働いて、不景気になって派遣会社を辞めることになって、その人が仕事が良かったから雇うよというのは。ただやっぱ100人に一人。
- 青木：というか、すごく才能あるのに、もったいない。自分でも思ったことない？  
元子どもA：ありますよ。何かやらんなんなど。仕事しているときに毎日思う。  
青木：どういうふうに思う。  
元子どもA：ここにおったら時間の無駄やなど。  
二瓶：同じ仕事を。  
元子どもA：こういう単純作業をやっいて、どうせ年を取ったら首になるし、年を取らなくてもまた景気が悪くなったら首になるし、こういうことやっていたらアカンなどは思うけど、次のステップが分からない。  
青木：だから中学のときとか、高校のときの資格だなと思ったということだね。

- 青木: 中学校を辞めたときはそこまで考えていないのよね。  
元子ども L: 全然考えていなかった。仕事を始めてから変わった。  
(中略)  
元子ども L: 仕事のつらさを振り返りながら、頭の考え方が変わったと思う。  
青木: 仕事がつかった。  
二瓶: 何時間と同じ仕事をしてね。  
元子ども L: そう。一つでも間違えたら嫌なことを言われるし、学校とは違うから。(学校なら)もしも間違えたら先生に言えば教えてくれるし、手伝ってくれるかもしれないし。  
二瓶: でも社会人になったら自分の責任だものね、それが変わる。  
元子ども L: それが変わる。不良でも出したら自分の責任やし。  
青木: 社会は厳しいなと思ったということ。  
二瓶: 甘えていたという感じね。  
元子ども L: そうそう。  
青木: じゃ時間は戻せないけれど、もし中学3年生に戻れるとしたらどうする。  
元子ども L: 戻りたい。戻って(当時)起こったことが(もう一度)あっても、最後まで卒業するつもり。高校までは行きたかったなと思う。  
青木: そのときは思ってたけれど、今はそう思う。  
元子ども L: そう思う。いつもいとこたちには、今は中学生かもしれないけれど、必ず高校まで行って卒業するようにしてよって、俺の間違ったことを見て、また同じことをしないように、うまく行くようにいつも考えている。

一方で、高校卒業を果たした「元子ども」は、自身が苦悩を抱えつつも学業を継続させたことを「良かった」と評価している。

- 田上: 今、そういう教育(「学校に行かなければいけない」という教育)を(親が)してくれたことについてどう思う。  
元子ども H: 良かったと思う。  
田上: どうして。  
元子ども H: やはり高校を卒業しないと就職もないし、何もできないから。コンビニのバイトでも高卒以上になっているから。行っておいてよかったと思う。

一度は挫折した「元子ども」たちであるが、現在、学業への復帰を望み、夢を語っている。

- 青木: もしもの話だけれど自分が高校を卒業したら、例えばどんなことができると思う。  
元子ども L: 高校行けば…。自分の夢によって違ってくるけど、僕の昔の夢は車の直しかをされたんですよ。  
青木: 自動車整備士。車が好きな人が多いよね。  
元子ども L: 多い。仕事を始めて、そういう関係を探してみたんやけれど、高校卒業なかったらできないと言われたから、そこにした。  
青木: 言われたんだ。そこで初めて高校行かないと。  
元子ども L: 高校行かないといけない、高校行けば自分の人生が広がる。
- 青木: どんな資格を取りたいと思ってる？  
元子ども A: 中学校、できれば高校の卒業まで取りたい。  
(中略)  
元子ども A: 音楽関係で店でもやりたいし、今言ったレコーディングとかも全部自分でやりたいから、そのちゃんとした勉強もしたい。  
青木: 専門学校とか入るといことかな。  
元子ども A: そう。  
青木: 専門学校はほとんどが高卒だね。中卒で受け入れてくれるというのは、美容学校で[県名]の方にあるらしいよと聞くぐらいでほとんどないね。仕事も学校も、やはり高卒が入るときの資格みたいなのに書かれるから。  
元子ども A: せめて高卒、みたいな。やっぱ高卒までやれば、いろいろな扉が開くというのがあるから、少なくともそこぐらいまで取りたいな。日本語能力試験もこの間取ったけど、少し取っただけでもだいぶ楽になった。
- 青木: どうして今勉強したいと思う？  
元子ども C: 勉強したらそれだけ、  
元子ども Y: もうちょっといい仕事が  
元子ども C: そうそう、仕事もそうだし。社会に認められるっていうか。

「元子ども」たちは、社会に出て様々な経験をし、今、冷静に自分の足跡と今後自分が進むべき道筋について、立ち止まって考えている。自分の可能性を信じたい、人に認められたい、そのような思いが強く感じられる。

### 7.3.4. 子どもへのサポート

#### 7.3.4.1. 学校におけるサポート

次に、「元子ども」たちの語りから、子どもたちがどのようなサポートを求めているのか、どのようなサポートが必要なのか、探っていきたい。

まずは、彼らの「子ども」時代の学校内での教師との関わりについて見ていこう。

- 田上： それ（友達の支え）が（学業を継続できた理由として）大きかった。先生は？  
元子ども Y： 先生もいましたよ。二瓶さん。  
田上： 二瓶先生もそうだけれど、学校の先生はどうだった？  
元子ども Y： 学校の先生もいい先生で。担任の先生も結構。  
田上： 面倒見てくれた。どんな形で面倒見てくれた？  
元子ども Y： 「しっかり勉強しとるのか」と毎日聞いてくれたし。  
田上： 気にしてくれたということかな。  
元子ども Y： はい。  
田上： 教えてくれたし。  
元子ども Y： はい。  
田上： 中学を卒業できて、高校も行って、しかも卒業できてという理由はそこ？  
元子ども Y： はい。
- 元子ども Y： 工業高校に行っていたとき、先生は厳しいことも言っとったけれど、最後は結構人のことを大事にしてくれた。だから「マンガ家のアシスタントになる」と言ったら「おまえ、なんのために資格を取ったんだ」と先生に言われた。  
田上： 資格が取れるように先生はいろいろと考えてくれていた。その先生の気持ちも分かると。  
元子ども Y： 遅くまで学校に残って勉強させられた。最後の卒業のときに、マンガ頑張れと応援してくれた。
- 元子ども L： 僕は体育が好きだったから、僕が学校に残るために、いつも6時間目に体育をやっていたんですよ。もしも最後まで学校においたら最後の時間にスポーツやりますよと言って、どんどん学校が好きになっていった感じ。でも友達みんな差別みたいなのはしていた。  
青木： そういのはずっとあった？ でも〔個人名〕先生のおかげで学校が好きになった。  
二瓶： 楽しくなって行けるようになったね。それは大事なこと。一人の人生を変えるからね。  
元子ども L： 好きになった。毎日「あー体育があるからずっと学校に行かんなんな」と思って行っ行って。  
青木： 友達はだんだんできていきましたか。  
元子ども L： そんななかった。先生のおかげで行っ行った感じ。
- 元子ども S： 私の学校の先生は優しくて、日本人は普通朝食を食べてくれないですか。朝ごはんを食べているかアンケートがあって、食べていないと言ったら、読書タイムにパンとハムとかを用意してくれて、みんな本読んだるがに、食べて、読み終わるころに教室に戻って。前の日の給食で残った牛乳とか、賞味期限は切れてないから、パンとハムと牛乳と普通に食べて、戻って。自分としてはうれしかったですね。してくれとるから授業もきちんとして頑張ろうという気にもなりましたし。朝ごはん、食べたらいいなあ、と。
- 元子ども M： 中1のときの先生は結構手助けしてくれていたんですけど。例えばすぐ話を聞きに来たりとか。  
田上： 気持ちをね。  
元子ども M： そうですね。困っていることがあったらすぐに言ってこいとか。自分が落ち込んでいるときもすぐに来ましたね。何回も言いに来ましたね。俺の担任ではなくなったあとも、中2のときも、中3のときも、自分は悪いことばかりしていたんですけど、それでも先生が何回か家に来て、大丈夫かとかいろいろ声をかけてもらっていました。
- 元子ども M： 〔個人名〕先生のようにね。だから先生たちが全部が全部悪いとは言えないんですよ。みんながみんな同じような人ばかりじゃないんで、10人いれば10人の考え方があっていいだけだし。全員が同じ考えやったら逆に気持ち悪い。簡単に口で言っても、自分がやれるかっつたらやれるわけでもないし。  
田上： でもある意味〔個人名〕先生や今の会社の社長みたいな人がいて良かったね。  
元子ども M： そうですね。〔個人名〕先生に何回か胸ぐらをつかまれたこともありましたね。だけどそれがほかの先生だったら腹立ってけんかになったりしていたと思うんですが、その人だけは本気でぶつかっている感じがして、力が出なかったですね。腹が立っても、胸ぐらをつかまれても、自分のことを考えてくれているんだなということを感じましたね。  
(中略)

元子ども M: だから不良で悪いことばかりやってる人にしても、一つか二つかぐらいは良いことをしていると思うんですよ。それを見てほめてあげているかどうかとか。俺は〔個人名〕先生には何回かほめられたことがあって、すごくうれし

かったですよ。多分そういうことがあって、胸ぐらをつかまれたときも、思ってくれているんだなと思いましたね。ほかの先生だったら「お前学校来んな」「お前はどせ言うことを聞かんからどうでもいい」と無視みたいなのをされるんで、そういう先生に捕まると腹が立ちます。

- 元子ども H: マニキュアを塗ったぐらいで何の問題もないと思うし。ピアスを開けたからって、ばかになるわけでもない。授業は真面目に受ければ分かるし、何の問題もない。髪の毛を染めに行ったから授業が受けられないというわけでもないし。そこを厳しく、厳しく、厳しく、厳しくして。そんなことばかり厳しくするんだったら、内容を変えて、授業をもう少し分かりやすくしてと思う。

田上: そうだね。勉強が分かるようにしてほしいと思うよね。違いを認めるとか、個性があることの方が大事だという

方向に行こうと思ったら、ものすごく時間がかかると思う。すごく難しいことだと思う。情けないけどね。悲しいけどね

元子ども H: そうなったら、もっといじめはなくなると思う。

一対一での対応だけでなく、担任の先生や学校の校長先生が、クラス全体、学校全体の雰囲気を変え、それが子どもたちを支えていたという例もあった。

- 元子ども H: 〔県名〕のときは、〔県名〕のなまりかもしれないですけど、みんな優しくかったというか、全く日本語が分からない私たちだったけど、校長先生が良かったのかな。うちらが学校入ったときに、全校に「ブラジルから来ました、ブラジルはここですよ、この子たちは日本語が分かりません、教えてあげてください」と。

田上: 親切にしてあげてねという。

元子ども H: そういふのを集会や運動会などで校長先生があいさつするたびに、先生は言っていた。

- 元子ども L: (担任の先生は) 優しくかったから、起こったことは全部言っというて、いじめとかを解決しようとしたんですよ。いつもかばってくれた。

青木: 結局いじめはなくならなかったけど頑張ってくれた、なくなるように努力してくれた。

元子ども L: 日本人でもクラスの中でよくいじめはあったし、みんな言わないから自殺とかするし。

青木: じゃ、Lにとってはいじめがなくなるかなくならないかよりも、先生が、

元子ども L: 頼りになれば何とかなるみたいな感じ。

青木: 自分のことを考えて助けてくれたり、いじめとかケンカがなくなるように頑張ってくれたり、その気持ちがかうれしかった。

元子ども L: そう、うれしかった。

青木: だから学校に行った。

元子ども L: うん。あと、もしも先生が気持ちを伝えれば、クラスのみんなの心が変わるかもしれない。

青木: みんなに、その気持ちが伝わって。

元子ども L: そうそう。小学校6年生でちょっと雰囲気が変わって、体育とかでみんなで助け合ったり、「こっちに来られ」とか言われて。

日本人と異なる扱いを受けることで、「元子ども」たちは傷ついたり、怒りを覚えたりもしている。たとえそれが、教師がよかれと思ってしたことであっても。

- 田上: 何に対して腹を立てていたの。

元子ども M: 14歳から仕事を始めたんですけど、(友人は)若いときは日本人ばかりで、ブラジル人は二瓶さんの息子ぐらいだったんですけど、すごく真面目な方だから、あまりつるんで悪いことをしたりということはなかったんですよ。同じことをしているのに、日本人は1~2週間ぐらいでもう学校に入れるようになっていたのに、俺だけ入らせてくれなかったりとか、それが14歳になってから相当頭にきていたので。だから仕事を始めて。入らせてくれるときは行ってたんですけど、入らせてくれないときは、あまり言わなかったですね。そのまま仕事に行っ。卒業までは行ってないですね。14のとき、2学期辺りぐらいから行ってないですね。卒業式は「来ていいですよ」と言われたんですけど、「何で卒業式だけ行かんなんならんよ」と、行かなかったですね。

- 元子ども L: 【もっと引張ってほしかった。先生に。】

二瓶: もっと先生が自分に対して厳しく。外国人だから甘やかしてというのはあるね。どうせ外国人だからここまでいいとか。

元子ども L: そうそう。【僕の弟の場合、彼は漢字がわからないからと答えを与えられる。でも答えを見て書いても漢字は覚えられない。】

- 元子ども V: 【一つ思い出したんだけど、テストで合格しなかったら、もう一度やらなきゃいけない】でしょ。

二瓶： それはいつの話。小学校かな。テストして合格しなかったらまたするじゃない。

青木： それって漢字と計算のやつ？ 80点取るまでずっとやる。

元子どもV： 覚えてないけど、うん、なんかそういうのがあったのね。うちも合格してなかったんね。めっちゃ必死に勉強したんだけど、2回目はブラジル人だから呼ばれなかった。

二瓶： 呼ばれなかったとはどういうこと。

元子どもV： 【テストで合格できなかったのね。それで私は勉強したんだけど。先生はもう一度テストするために生徒を呼んだんだけど、日本人だけ。私は呼ばれなかった。】

二瓶： 1回目合格しなくて、一生懸命かなり勉強したんだけど、あなたはどうせブラジル人だからと呼ばれなくて、2回目はチャレンジしなかった。日本人だけで、Vは横に。

青木： 呼ばれなかったというのは、もう1回やるために呼ばれなかったということ。

二瓶： そのときは少し傷ついた。

元子どもV： はい。

青木： 同じようにやってほしかったということよね。

元子どもV： うん、そう。

二瓶： 一生懸命勉強したんだけど、結局呼ばれなかったから。

元子どもV： 思い出しちゃった・・・。

青木： そのときつらかったんだね。

- 元子どもV： あとは連絡の配り（お便り）とかも、席が5, 【(一列に) 席が5つあったのね】、でも私のところは紙が4つで、私には届かなかったとか。

青木： 日本語だからってこと？

元子どもV： そう。

二瓶： それは小学校？

元子どもV： 覚えてない。けどそういうこともあった。

二瓶： Vは黙っていたの？

元子どもV： うん。

青木： それはいいわるでされたということかな。そういうわけじゃなくて。

元子どもV： うーん。私から見たら、先生が「ブラジル人だからどうでもいい」って感じ。

青木： このお便りはどうせ分かんないでしょうみたいな。例えばポルトガル語のお便りがあって、「日本語の代わりにあなたにはこれね」とかだったら大丈夫だった？

元子どもV： うん・・・。

二瓶： でも扱い方が。【Vは日本人と同じように扱ってほしかった？ それとも、ポルトガル語のお便りを配られる方がよかった？】

元子どもV： 同じにされたかった。親へのお便りだったらブラジル語でもいいんだけど、自分にだったらみんなと同じ。

青木： 自分に配られるプリントが配られないときもあった？

元子どもV： うん、ときもあった。

インタビューした「元子ども」たちが小中学校にいた頃には、すでに富山県では子どもの母語が話せる外国人相談員が各学校に派遣されており、二瓶氏をはじめとした外国人相談員が子どもたちの支えになっていたという声もあった。

- 田上： 勉強はよく分かった？

元子どもC： まだ二瓶先生がいたころはまだちょっと勉強しとった。頭にも勉強が残ってたけど、それが終わってから全部忘れて、勉強も何もなかった。

青木： 助けてくれる人がいなくなったから？

元子どもC： 中学校で信じた先生というか、先生ちゃ厳しい、そればかり思っと思って、信じられる先生は二瓶さんだけだった。

二瓶： なんでも話せるし。

元子どもC： なんでも話せる人というか

元子どもY： 頼れる人。

田上： 困ったときに助けてくれるとか？

元子どもC： 悩み事の相談とか。

青木： そういう人がそばにいないと、なかなか頑張れなくなるかな。

元子どもC： そうだね。

二瓶： 残念ながら私は短かったのよね。もう1年いたかった。そうしたら高校もちゃんと、

元子どもC： 行けたかもしれない。わからんけど。

- 青木: 例えばTは日本ではすごくいじめがあって、みんなが助けてくれるという雰囲気ではなくて、私も覚えてるけど、Tが授業で咳をしたらみんなに何か言われて。うるさいだったっけ。それで傷ついていたのを覚えるけど。  
元子どもT: そうです、めちゃくちゃうるさかったと言われて泣き始めて、あそこへ行ったよね、何という名前だったっけ。

青木: 日本語教室かな。

元子どもT: そう、日本語教室。あそこを通ると「はあ」となって、あそこだったな、みたいに。

しかしながら、子どもたちを所属するクラスから取り出して指導することについては、否定的な意見も少なくなかった。

- 元子どもM: ポルトガル語をしゃべれる先生もいたのですが、簡単な問題で分かるものばかりだったので、先生に失礼だけど、あまり役に立たなかったというか。  
田上: つまり本当に勉強したいものはくれなかったということだね。  
元子どもM: 本当にというか、あれが必要だったと思うんだけど、同じものの繰り返しだった気がして。例えば漢字にしても、小1のものだけくれてたんですが、あれだけもらっても知っている問題ばかりだったし。
- 元子どもH: (支援は) 放課後の方がよかった。授業中に抜け出して行って。  
青木: 授業のことが分からなくなるでしょう。  
元子どもH: 分からなくなっちゃって、(元の教室の授業は) 進んでくじゃん。進んでいくし、本人は習ってないと言うし。習ってないわけない、宿題に出ていると。でも、おれはやっていないと言って。じゃ、どこに行っとったがって聞いたら [取り出し指導教室名]。じゃ、話は聞いていないよねと。本人も宿題をしていないから悪いんやけど。宿題もしないで学校に行って。
- 青木: どういう助けがあったからいいかな。例えば二瓶さんみたいに別の教室に行って勉強するのがいい？  
元子どもL: それか授業が終わったら、大体30分くらい。【そういう子どもたちのための授業。たぶん少しは助けになると思う。】  
二瓶: 【なぜなら取り出し授業は、】  
元子どもL: 【邪魔になる。実際よくない。】  
青木: あまり良くないこともあるということか。やはり補習がいいのかな。  
元子どもL: うん。
- 青木: じゃ、この子が小学校とかに入るときにお願いしたいことはあるかな。  
元子どもV: それはある。特別教室とかは行かせてほしくない。  
青木: それはどうして。  
元子どもV: 授業に遅れるから。  
青木: 自分がそうだったから？  
元子どもV: そう。
- 元子どもA: 勉強は数学や国語、社会は出ていなかった。  
青木: どうして出なかった？  
元子どもA: 特別教室だったの。日本語の教室みたいな。  
二瓶: でも、あれは毎日じゃなかったよ。  
元子どもA: 毎日じゃなかったけれど、ないときは図書室へ行って日本語の勉強。  
青木: 誰が教えてくれるの？  
元子どもA: 誰も。自分で。だから自分も勉強していなかった。理解できない。

ただ、当時の取り出し指導がほとんど自習であったという例もあり、取り出しそのものの是非よりも、指導の仕方や時間、取り出しを含めた支援のあり方に検討を要するのではないかと思われる。

### 7.3.4.2. 家庭におけるサポート

次に、親との関わりについて見ていく。

インタビューした「元子ども」たちの親は、子どもの学業継続に積極的な態度だったようである。

- 元子どもS: 私それ親に言われてましたね。自分たちは派遣社員で、日本人がしたくないような重たい仕事とか汚い仕事をするから、学校に行って、日本語を学んで、平等になれば、平等な仕事に就ける、みたいな。

元子どもJ: それ、(僕の)お父さんとお母さんも言っとった。

元子どもS: うん、多分みんな言う。

- 青木: それだけ嫌なことがあって休んでたら、学校嫌だなという気持ちがあるでしょう。お母さんが言っても、どうして高校に行こうと思った？  
元子どもH: 「行け、行け」と本当にうるさかったから。  
青木: 仕方ないという感じで？  
元子どもH: うん。  
田上: 本当は行きたくなかった？  
元子どもH: でも、行かないけんと思ってた。

学業継続を断念した「元子ども」たちも、親に辞めないよう言われたという。しかし、当時子どもたちは親の言葉に聞く耳を持たず、結局辞めてしまった。今「元子ども」たちは、それを後悔し、自分を責めている。しかし、親から更なる働きかけがあったら、あの時自分は辞めなかったのではないかと、もっと強く説得してほしかった、という思いもある。

- 元子どもA: 今になってまた人のせいにしたくない。もう25歳なんだから。自分が人の意見を聞いとれば続けていたのに、頭が固い、頑固だったから辞めた。だから結局はやっぱ(責める先は)自分にいっちゃう。
- 元子どもA: 当時は(自分は)大人だと思って、こんなやってらんないと自分では確信していたわけ。ほかの人が言っても、間違っていると思って結局、おやじに辞めるわと言ったら、そうしたいならそうせいと言われたので。  
二瓶: 厳しいお父さんが？  
元子どもA: うん。その代わり戻りたいとか言うな、自分で決めたことはしっかりやりなさい。家出たときも同じようなことだったけど、1回出たら戻ってくるなという感じ。だから多分、そこで止められたら続けてたのかなとは思う。
- 青木: 私もそうだけど、そのとき、そのときでは自分は大人だと思って判断するんだけど、今振り返ってどう思う？  
元子どもA: ばかやったな。  
青木: 思う？ 自分もそうだから分かるのだけど。映画に出てくる子も、真ん中の子だけれど、言っていたの覚えてる？ 彼女と自分はすごい大人の考え方で普通の人よりも大人だと。僕たちブラジル人はいろいろ苦勞しているから、同じ年の日本人よりも大人で、彼女とはそういうところで通じ合うんだみたい。いや、でもまだ若いから、結局すごくいろいろ愚かなことをしているんだけど。二十歳ぐらいのときかな、何年前かに、それは別にこの子だからではなくて、私もそうだったし、みんなそうなんだけど。  
元子どもA: 本当に自分もみんなも全然分かっていない。自分だけが分かっているという考えだったから、周りの話は全然聞いていなかった。親がそうしたいって言うがやったらそうせいと言った時点で、それでいいなど。一番尊敬していた人だから、多分そこで止められたら続いていたのかなとは思う。嫌な顔をして続いていたのかもしれない。
- 青木: 辞めるときは親は何も言わなかった？ いいよみたいな感じだった？  
元子どもL: 【いやいや、議論した。】  
青木: 駄目だとか怒られた？  
元子どもL: 怒られた。じゃ、言っても気にしないから、では仕事をしられと。辞めて1週間たったらもう仕事を始めた。  
青木: じゃ、もっと言ってほしかった？ 絶対辞めるなど。  
元子どもL: もっと。うん。説得。
- 青木: 親にこうしてほしかったということは何かある。  
元子どもL: もっと説得してほしかった。勉強の関係。  
二瓶: 辞めないために。  
青木: 自分を説得してほしかったということ？  
元子どもL: 説得。
- 元子どもL: 【僕の父親はすごく厳しい。\*\*\*\*】  
二瓶: もっと厳しく。  
青木: 一応厳しいのよね。  
二瓶: 多分親も分かっていたと思うよね。分からないのにこれ以上厳しくしても。  
元子どもL: 【自分が小学校のときにもっと厳しくしてくれていたなら、もっと希望通りになったのに。】  
二瓶: 小学生のときに。

一方、「いずれはブラジルに帰国しよう」という親の意向が、不本意ながらも間接的に子どもの教育に悪影響を及ぼしている例もあるようである。

- 元子ども V: 多分家からだと思う。私の場合は、両親からブラジルに帰るからとよく言われていて、じゃあなんで日本で勉強しなきゃいけないのとなってしまったから。  
二瓶: やっぱりね。何年後に帰ると言っていたの?  
元子ども V: もう来たときからずっと、お金をためたらブラジルに帰ると言われていた。そして 10 歳のときに帰って、3カ月いて、また日本に戻ったのね。で「来年帰る、来年帰る」と言われて、今もう 22 歳だけどまだ帰っていない(笑)。
- 元子ども A: 自分は違ってたけど、周りの友達に聞いたら、いずれブラジルに帰るから、日本で勉強しなくてもいいやと考える人が多かった。

また、伝聞情報ではあるが、親が直接的に子どもの学業継続の断念に加担するということもあるようである。

- 元子ども H: 中学校まで日本は義務じゃないですか。卒業して仕事ができるから、じゃ仕事してみたいな感じの親もたくさんいる。  
二瓶: そこが問題なの。

家庭の問題は、学業のみならず子どもに様々な面で悪影響をもたらす。子どもたちが学校で対人関係に悩んだり問題行動を起こしたりすることの背景には、家庭の問題もあると考える「元子ども」たちは多かった。

- 元子ども S: さっきのように、子どもが家に帰ってきて親が誰もいない、みたいな。それもひどいことですよ。連れてきたからにはちゃんと面倒見ないと。ただ働いとるから、好きなものを買ってあげとるからよしというのとは違う。愛はお金で買えないがいから、ちゃんと愛してほしい。私はおばあちゃんに育てられて、お父さんもお母さんも家におらんし、お母さんは夜勤で、帰ってきたらもう出かける時間。おばあちゃんがずっと一緒におってくれたからいいがいけど、ほかの人を見たら、パパもママも(誰も家に)話し相手がいないみたいな。  
元子ども Y: 頼れる人がいない。  
元子ども S: そう。だから学校で友達にちょっかひを出す。何でかってゆったら、相手をしてほしいがいねか、寂しいがいねか。しまいに授業から出されるみたいな。そうしたらもっと孤立していく。
- 二瓶: それ(中学に行っていないブラジル人が多いこと)は親と関係しているかな。  
元子ども M: それもあると思うんですよ。例えば日本は忙しいじゃないですか。特にブラジルから来て、ずっと向こうに慣れていると、こっちに来ると忙しかったり、残業しなかったら切るとか言われるし。そういうのがあって子どもを見る時間が少ないんですよ。  
二瓶: 話し合う時間もないよね。  
元子ども M: そうです。多分それもあるって、子どもがどうせ構ってくれないからと思って行かないんじゃないかなって。  
二瓶: やはりそうだね。  
元子ども M: それもあると思うよ。子どもに対して、私は忙しいから、仕事しなければいけないから、お前は自分のことは自分でやれつつも、子どもだし分からないのでかわいそうですよ。特に小学校 6 年生なんてまだ子どもですよ。  
二瓶: 余裕がないよね。子どもを見る余裕もないし。怒鳴る余裕しかないのよ。帰ってストレスたまって。【ただ怒鳴るばかり。】  
元子ども M: それも学校に行ったときにつながると思うんですよ。話し合いをする時間がないし、家に帰っても怒鳴ったりけんかしたり。それが子どもにとってストレスになって、学校に行ったらほかの人や物に八つ当たり。そんな感じがするんです。
- 元子ども J: 【どうしてブラジル人はこうなのか、ということ。それは、多くの場合両親に原因がある。両親がケンカばかりしていたら、子どもは悲しむ。そして子どもはどうするか。間違った行動をとり始める。C の場合も同じで、彼の父は亡くなって、いない。自分の場合は、父とうまくいっていない。父とうまくいってなかったから、僕は考えなしに間違ったことをしていたんだ。C もそう。支えてくれる人がいなかったから、彼はバカな行動をとるようになってしまった。バカなことをしないよう、そうだよ、こうだよ、といつもそばで言ってくれる人が必要なんだ。僕もそう。僕は無免許で車を運転した。そして車をぶつけて、逃げて、捕まった。でも両親は「そんなことをするな!」と怒るばかりで、両親がケンカをしている間に、僕は何も告げずに家を出た。】

- 元子ども S: 家族も先生たちもみんな「駄目駄目」と言うじゃないですか。でも結局子どもはするし、試してみて自分が「いや違う」と思えるかどうか。でもそのためには、彼が言ったように、離婚して奥さんが子どもに会わせてくれない。娘さんが大きくなったら「ソパは？」と聞くじゃないですか。そうしたら「ソパは不良やから」みたいなことを言われたら、悪い方向にしか見えていないじゃないですか。私の親は離婚しているけど、どちらもいい人だって思いたいです。実際にうちの親はそうなんですけれど、離婚してもお互いの悪口は言わなかった。お母さんがお父さんに、「今 S はこうなんだけど」と言うと、お父さんはそれを聞いて「お母さんからこう聞いたけど、どうして君はそうなっているのか」みたいな話をしてくれるから、そうしたら悪い方向ではなくて、自然といい方向に自分が傾いていく感じがするから、子どもたちはもちろん、その親にも子どもの教育の仕方とかをもう一度見直してほしい。

子どもたちをはぐくむ場は、学校だけでもなく、家庭だけでもない。学校と家庭の両方である。子どもたちは、両方の場での助けや心の通い合いを望んでおり、そのどちらにも問題があると、子どもは間違った方向へと行ってしまふのだと言う。そして、おそらく、学校と家庭のどちらにも問題を抱えていた「元子ども」は多い。

- 元子ども Y: 家庭と学校にも問題があれば、それで、パー。家族は親とのケンカとか、学校はいじめとか。  
田上: それとか、心が全然通わないとか、気持ちを分かってくれないとか。  
元子ども Y: 頼れる人がいないとか。

### 7.3.5. 自らの居場所を求めて ～成功体験と心境の変化～

7.3.4.2. で、家庭の問題が子どもに及ぼす影響についての子どもの語りを見てきたが、今「元子ども」たち自身は親を恨んだりしてはいない。日本に連れて来られたことについても、当初は「何で自分がこんな目に」と思ったと言うし、日伯の往来を繰り返し、日本とブラジル両方での不適應の辛い経験を語ってくれた子もいたが、それでも皆一様に、今では日本に連れてきてくれた親に感謝していると言う。

幼い頃に来日し、日本で育った「元子ども」たちは、日本に対する愛着を持ち、祖国ブラジルと比較しての日本の良さも理解し、日本を自らが生きていく場所として認識している。もちろん、ブラジル人としてのアイデンティティはある。彼らは日本とブラジル、両方を自分の居場所として感じているが、裏を返せば、状況次第で、両方ともに自分の居場所がないと感じることにもなるだろう。

- 元子ども H: ブラジルでは外国人だし、こっちに来て外国人。  
(中略)  
田上: それはどうなの。Hさん自身が、自分はやはりブラジルに帰ったら外人だと言われて、日本でも外人だと言われるというのはすごく嫌だと思うんだけど、自分はどっちだと思う？  
元子ども H: どっちでもないっていう感じ。ブラジル人にもなりきれないし、日本人にもなりきれない。  
田上: それってどんな感じ。私は日本人だから、そのへんがよく分からない。  
元子ども H: 見た目もそうだし、向こうに帰れば日系人だって言われるし。  
田上: それは自分の中でハンディキャップだったの？  
青木: 自分の弱いところだと思う？  
元子ども H: 弱いところだと思ってたけど、今は思わなくなった。  
田上: 思わなくなったというか、それを良いと思いはじめた？ 両方分かっているからいいやと、その方が得だと思いはじめた？  
元子ども H: うん。逆に。  
田上: それは何かきっかけがありますか。  
元子ども H: 大人になったからかな。向こうに帰ってからのかなと思う。日本のいいところも見えたし。
- 青木: さっき、日本人は帰る場所がないけど、例えばブラジル人だったらブラジルに帰ればいいじゃないかと日本人は考えたと考えていたでしょう。自分にとって、ブラジルは帰る場所だと思う？  
元子ども M: 正直、自分の居場所がないと思う。血が混ざっている時点でブラジルに行ったら俺は日本人やし、日本に来ると外人やし。そんな感じですね。  
二瓶: 私もそうなの。向こうでは外国人で、ここに来て外国人。でもそれは全然気にしていない。  
元子ども M: 気にしているわけじゃないけど、どっちがどっちかと言ったら、どっちでもないですね。自分の居場所とは感じないですね。日本が居場所だとか、ブラジルが居場所だとかはないですね。どっちにしても外国人なので。  
青木: 大人になってから日本に来た人は、ブラジルは帰る場所だと思うよね。でも Mさんと子どもとのときからずっと日本にいたら。

元子ども M: はい。結構難しいと思うんですよ。

二瓶: 半分以上日本で暮らしているからね。うちの息子もそう。

自らが親となった「元子ども」たちは今、自分の子どもたちの居場所、生きていく国についても考えなければならぬ立場にある。

- 元子ども M: 自分の中では、日本は好きだし、今からブラジル帰ってもやれるか分かんないんで、とりあえずまだしばらくは日本にしようと思っています。  
田上: そうすると子どもたちのために何かしてあげなきゃいけないね。  
元子ども M: そうですね。子どものことを思って日本にいたいんですよね。ブラジルだと子どもを自由に遊ばせたりは、まずできないですから。  
二瓶: 治安がすごく悪い。  
元子ども M: そうです。それを考えると日本は忙しいし差別もあると思うけど、だけど、治安がいいというのを考えると、子どもがいる人にとっては絶対こっちの方が良いですね。どんなに苦労しても。
- 青木: (娘さんの通っている) 保育園は日本の保育園だよな。  
元子ども V: うん。  
二瓶: ブラジル人に(子どもの面倒を)見てもらう人もおるけど、それはどう思う。  
元子ども V: 私は嫌だ。  
二瓶: 後で苦労するよね。  
青木: どういうところで苦労する。  
元子ども V: もし日本の学校に入れたくても、全然話せない。  
青木: 日本語覚えるためには日本の保育園の方がいいということか。  
元子ども V: 【それに、しつても。】  
二瓶: ブラジル人のところは、ただ見るだけよね。小学校に入ったときに大変よ。  
青木: でもいつかブラジルに帰ろうと思っているんだよね？  
元子ども V: 話してみたら、(娘はブラジルに) 帰りたくないって言うから。  
青木: 今は日本にしようと思ってる？ だから日本語を覚えさせて日本で教育を受けさせたい。  
元子ども V: でもブラジルの勉強もしてほしい。  
青木: 日本でどうやってするの。  
元子ども V: こっちで教える人がおるらしいんですよ。  
青木: ポルトガル語ということね。塾みたいな形で通わせて。  
元子ども V: もし彼女がブラジルに帰りたかったら。  
青木: 帰れるように、困らないように。  
二瓶: どっちに転んでもいいということね。それは大事よね。

彼らは、今、どちらの国にも縛られることなく、その時々状況(メリット)や気持ちに合わせて自分や家族の生きる場所を自由に選ぶようとしている。しかし、最初からこのように2つとも国を自分が生きていく場所の選択肢として捉えられていたわけではないようである。

- 田上: でも、ふとブラジルに帰ってもいいなと思うんだ。  
元子ども H: 今は思う。  
田上: 今は思うというのは？  
元子ども H: (ブラジルに一時的に) 帰る前までは、向こうに帰って、私は何をすればいいのみたいな。向こうに帰っても、向こうの学校を出たわけでもないし、手に職があるわけでもないし。  
田上: でも、帰ってもいいなと思うの？  
元子ども H: そのときは思っていなくて、遊びに帰ったときに、おじいちゃんが何もしていないんだしたら、ちょうど今日から募集しているから行ってこようという感じで、その(美容師の) 学校に行っただけです。  
青木: このドキュメンタリーに出てくる子たちも、小さいころに日本にきたり、日本で生まれたりして、3年くらい前にブラジル人の仕事が一気になくなったときに帰ることになったんだけど、それまでは日本しか知らないし、自分の居場所は日本だと思っていた。でも、ブラジルに帰って学校に通い始めて、ブラジルで生きていこうという子もいる。そうではない子もいるんだけど。やっぱり学校とかに通うと、ここで何かできるかもと希望が出るかもしれないね。学校に行ったから。  
元子ども H: 学校に行ったから。たぶんそれは大きかったかも。  
青木: ただ遊んでいたら、きっとどうかな。  
元子ども H: ただ遊びに行って戻ってきとったら、多分、考えは変わっていなかったかもしれない。向こうに帰っても何をすればいいのみたいに。  
青木: そうだね。学校に行ったのはきっと大きかったね。

- 元子ども T: この間にいろいろ起きて、中学校に入った瞬間に全然学校には行かなかった。  
青木: この間に学校が嫌になっちゃったんですね。  
元子ども T: そう。ここから嫌になっちゃって、早くブラジルに帰りたいという話になりました。  
青木: 言った。  
元子ども T: それでブラジルに行って本当に勉強はした。ここを卒業してブラジルに行ったとき、ああ良かったと思った。今度はブラジルにいるんだから頑張ろうということで、テストをどんどん受けて、OK ってなって勉強も進んでたし。  
青木: 日本ではもう学校が嫌だったんだよね。ブラジルでは勉強を頑張ろうと思ったんだね。どうしてそうなったと思う。  
元子ども T: ブラジルでは勉強する時間が短くて、同じ年の友達じゃなかったけど、友達が私の気持ちを分かってくれたの。そのブラジル人としゃべってるのが良くて、学校に行くのが本当に楽しかったんです。でも私は夜の学校だった。だから1日中何もしなかった(笑)。でもすごく楽しかった。  
(中略)  
元子ども T: 一つ、今思い出したのは、私が通訳になりたいという話です。なぜ通訳になりたいの、日本は好きじゃないんじゃないの(ブラジルの先生に)言われたので、日本で結構いじめられたり、日本語が分からなかったということを先生にも話してあげたの。(ブラジルの)高校へ来てから、日本語が分からない人々を手伝いたい気持ちになったの。いじめはあったけど、そういう気持ちには私はなつた。  
(中略 ※今会社で通訳をしているという話)  
元子ども T: そうです。それがちょっとね。でもそれだけであとは良いです。人の笑顔を見るのが好き。良かった、助かったみたい。  
青木: そう思えるようになったのは、ブラジルで友達ができてみんなに助けてもらったりしたからかな。  
元子ども T: そうかもしれない。  
(中略)  
青木: Tの今の夢は通訳。ブラジルに行って通訳というのがありますが、日本でやっていく。これからのことは考えてる。  
元子ども T: 一応は、今はここにいるから。  
青木: 今この場所でやっていくということね。今は帰りたいかと思う？  
元子ども T: あまり思わない。自分の生活が好きになりました。  
青木: 今はこうやって通訳してあげて、役に立っているという感じかな。  
元子ども T: そうかなと思う。
- 元子ども M: 仕事も学校と同じようにいろいろ苦労したんですけど、別に不自由していないし、富山に帰ってきたときも、今の社長が若いときの友達で、すぐに手助けしてくれたし。前は〔都市名〕で仕事をしていたのですが、そこは先月で切られて、今の社長に「あそこは一応27日まで来いということなので、27日まで行く？」と聞かれて、「いやもう行かん、もうクビにされたんやから行く必要ないじゃん」と言ったら、「行かんがやったらこっち来いよ、俺の会社来いよ」と呼んでくれた。俺が努力しているところも見てるから、すぐに来いと言われたんだと思うんで。  
田上: 分かってくれているわけだね。  
二瓶: 認められている。  
元子ども M: ある程度は、だから日本にいてうまくいかないことは多いかもしれないですけど、別にもうやっていけないと思うものじゃないし、ブラジルに行ったらうまくいくということじゃないし。逆に日本の方が生活は長いんで。勉強もしていないんで、ブラジル行ったらすぐに仕事が見つかることも限らないので、今はこのままずっと日本で。  
田上: 自分のいる場所は日本だという気持ちがある？  
元子ども M: ありますね。

ブラジルでも、日本でも、何らかの成功体験があり、人に認められるという経験を得られれば、そこが自分の居場所となっていく。「ここしか生きる場所がない」という消極的な選択ではなく、日本とブラジル、2つの国から積極的に生きる場所を選択することができた「元子ども」は、日本であろうと、ブラジルであろうと、その場所に生きる周囲の人々に貢献しようとしている。

彼らにとって、「人に認められる」という経験は大きな意味を持つ。その「認められる」場・方法として、「学校」や「勉強」、そして今の彼らにとっては「職場」や「仕事」<sup>2</sup>が大きな役割を担っていることが、「元子ども」たちの語りからわかる。

### 7.3.6. 「元子ども」から子どもたちへ

デカセギの子どもとして幼い頃に来日した彼らは、大きな苦悩を背負いながらその子ども時代を駆け抜け、今、自身が親となって、親の立場から、自らの親に共感し、子どもたちの教育に悩んでいる。

- 青木: あの子には学校はどこまで行ってほしい？ 小学校、中学校、高校、大学とかあるけど。  
元子ども V: 高校は卒業してほしい。  
(中略)

青木： それは自分が後悔しているから？ 行けばよかったなって思っているから？

元子ども V： そう。

- 元子ども M： 俺も親として結構厳しい方だと思うんですよ。一番上の子とか、特に学校に行ってる子。自分でも思うんですけど、今ここまで来るのにすごい苦労してきているので、同じ苦労してほしくないから厳しくなるところがあるんですよ。

田上： そのお父さんの気持ちを子どもたちは分かってくれている？

元子ども M： 多分今だと分からないですね。俺の親も厳しい人だったけど、若いときは全然分からなかったですね。なるべく苦労しないようにこういうことを言っているんだなということは、そのときは分からなかったですね。今になって親になって、そういうことだったんだなというのはすごいありますね。

- 元子ども L： 【僕は、今までたくさん間違っただけをしてきた。弟には僕と同じ道に進んでほしくない。何とか変えなきゃと思ってるけど、弟が今考えていることは昔の自分の考えと同じ。昔の自分の間違っただけの行動など同じことを繰り返している。僕は弟にそのことを言うけど、彼は全然聞かない。】

青木： 同じ気持ち。

元子ども L： 【彼が勉強して変わるように色々手を尽くしてはいるけど。自分と同じ会社員ではなく、もっと勉強して将来自分より良い仕事についてほしい。後悔しないように。】

自分たちが味わってきた苦悩を今の子どもたちには背負わせまいと苦言を呈するものの、当時の自分たちと同じく、なかなか子どもたちは聞き入れないようである。

また、自分の子ども時代の経験から、今の子どもたちにはこうしてやりたいという思いはあるものの、現実として自分の親たちと同じことを繰り返さざるを得ないジレンマにも悩まされている。

- 青木： また話が戻るけど、今はお父さんやお母さんの気持ちが分かるのよね。お父さんお母さんも忙しかった、大変だったというのが分かると言っていたけど、そしたら自分も今親の立場で、お父さんお母さんと同じような仕事をしているわけだから、残業とかもあるし、夜勤とかもきつとあるだろうし、忙しいでしょう。あまり子どもを構う時間がないんじゃない？

元子ども M： 正直ないですね。特に奥さんも一緒に仕事をしてたんで、今彼女のお母さんが来てるんですけど、1カ月前までは来ていなかったんです。そしたら一番上の子がずっと一人になっていました。（中略）何回か学校から電話がかかって来て、「こんな時間まで子どもを一人にしちゃ駄目ですよ」と言っていたんですけど、「では学費はどうやって払うんですか。払ってくれるんですか」ともめたんですけど、先生たちは「〔個人名〕君はまだ子どもなんで、もうちょっとなんとかしてあげないと」と。「なんとかしてあげないと」と言われても、職場に8時から5時まで仕事をしますって言ったらくビにされるし。どっちがどっちなんですかって。

二瓶： 仕事がないと言われるね。

元子ども M： そう。仕事がないと食っていけないし、学費にしても。なので、学校も分かってはいると思うんですけど、学費が先月まで6カ月分くらいたまっていたんですよ。手紙で「払ってください」、電話がかかってきて「早く払ってください」と言うんですけど、〔個人名〕が一人になると、「こんな時間まで遅くしたら駄目ですよ、一人で学校に行かせたら駄目ですよ」と言われても、親としてどうすればいいか分かりませんよね。仕事しなきゃいけないし、子どもの面倒を見なきゃいけない。

最後に、大人となった「元子ども」たちから今の子どもたちへのメッセージを紹介して結びとしたい。

- 青木： 今、これから学校で勉強をする子どもたちに、何かアドバイスとか、言いたいことはある？何か伝えたいこととか。  
元子ども T： 私はそれ（学校でのいじめの経験など）を全部通って、この人たちの今の気持ちは分かります。学校に行きたくないという気持ち。でもいつか、あのときもっと勉強すればよかったという気持ちになる。そのときは自分のことしか考えていなくて、将来なんかどうでもいいという気持ちだった。でもいじめはされていたけど、勉強のために学校にいるという気持ちだったら（自分も勉強を続けて）、今、日本語が（もっと）うまくなっていったと思う。だから学校でいじめがあっても、それを気にしないとは言えないけど、（辛い時は）勉強のことを考えたらいいかもしれない。将来のために。また急にブラジルに行かないと駄目ってということになるかもしれないけど、でも日本の勉強はブラジルより進んでるじゃん。ブラジルへ行ったら勉強が分かるから、あまりつらくならないと思う。

- 青木： 今の子どもたちに言いたいこととかあるかな。例えば今中学2年生の子とか、小学校5年生で入ったから、5年生の子とかに向かって言いたいこと、伝えたいことはあるかな。今の25歳の自分が。

元子ども A： 人の意見を聞こうっていう。幾ら自分が大人だと思っても、やっぱ後で後悔するから。

- 元子どもC: 不良をやつとるやつに言いたいことは「不良をやるなら一生懸命やれ、でも、いつか元に戻れよ」と言いたいね。ちゃんと頭整理しろよって。今したいことは思いきってやればいいけど、後から後悔するようなことはすんなよと。(中略) あとは絶対仲間を裏切るなどということ言いたいね。逆に助けてやらんと。

## 7.4. おわりに

7.1.でも述べたとおり、当初このインタビューはイベントのための内々の情報収集として行われた。しかし、彼らの話を聞けば聞くほど、映画に描き出されていた若者たちと共通した悩みや葛藤、後悔、そして希望が、富山の「元子ども」たちにも見出され、彼らの経験を通して、富山の、そして日本の抱える教育の課題がはっきりと浮かび上がってくるように思われた。我々は、いくつかのインタビューを通して、ディスカッションの重要なポイントを抽出することができたわけだが、このインタビューの内容、すなわち「元子ども」たちの語りそのものが提起しうる問題群は、短いイベントのディスカッションで扱いきれるようなものではなく、この語りを広く公開することで、一人でも多くの人に一緒に考えてもらいたいのではないかと強く思うようになった。

今回このような形でインタビューの一部を公開するにあたり、「元子ども」の青年たちには、事後承諾という形で同意書にサインを求めることになってしまった。しかし、彼らは全員こころよく応じてくれ、中には、「自分の経験が、今の子どもたちの役に立つなら」と、イベントの参加を仲間や親戚に呼びかけてくれた青年や、インタビューのポルトガル語部分の文字化を手伝ってくれた青年もいた。十分な分析もできず、本稿が彼らの思いを的確に捉え、伝えられているか、全く自信はないのだが、外国にルーツをもつ子どもたちへのこれからの支援を考えるための一次的な資料として、一人でも多くの方の目に触れる機会を提供できていれば、幸いである。

---

<sup>1</sup>二瓶博子氏は、日本国籍を持つ日本人である。3歳で渡伯し、ブラジルで教育を受け、大学を卒業。45歳で来日するが、ブラジルにおいても家庭内で日本語を使用していたため日本語に堪能であり、富山県においては、その語学力を生かし、通訳・翻訳者として長年活躍している。

<sup>2</sup>現在も彼らは「認められたい」「もっと認められるべきだ」と、もがき、戦っている。

- 元子どもM: (※職場で髪型や服装のことで細かく注意されることについての話題で) 確かに外見の問題はあると思うんですけど、外見だけじゃないんですよ。結局その人の中身がどうかだと思うんですよ。(中略) だから見返してやりたいと思いますよ。多分今〔個人名〕は〔会社名〕の人を見返しているんじゃないですか。今自分は自分の格好でやっているわけで。(中略) それがかくだらないというか、なんでそこにいくんですか、もっと大切なところがあるんじゃないですかとなるんですよ、先に。ルールに自分が押しつぶされるような感じになって、それが嫌なんですよ。
- 元子どもL:【僕の考えだけど、日本人は、僕たち外国人が日本という国をものすごく助けているということに目を向けるべきだと思う。でも、日本人はそんなこと考えもしない。】

## 第8章 創造/想像的異文化の主体としての移民の子どもたち

小倉利丸（富山大学経済学部）

本稿で私は、この三年にわたる本プロジェクトへの関わりの中から得た「共生」という困難な課題についての私なりの総括的な見解を述べることにしたい。本報告書の各執筆者による具体的な事例とは違って、以下で述べることはやや抽象的であり、また、移民とその子どもたちが地域で置かれている現状に対して極めて批判的なスタンスをとっている。とりわけ、学校教育という制度が果たす役割については、私は、異なる文化の相互理解に基づく共存は、「国民教育」という枠組そのものの根本的な再考なしにはありえないのではないか、という観点に立っている。一見するとオール・オア・ナッシングであるかのような印象を持たれるかもしれない。しかし、そうではない。制度の大枠は「国民教育」という観念に縛られねばならないとしても、主体である子どもたちや地域の人びとの共同（協同）のなかには、「国民」といういまや狭過ぎるアイデンティティを越える可能性もあるのだということを示唆したつもりである。

「多文化共生」や「異文化共生」という言葉は、政府や自治体が公式文書で用いるようになってきていることからわかるように、すでにコンセンサスを得た概念になっている感がある。しかし、現実には、少数の異文化的な背景を持つ人びとが、地域で多数を構成するエスニックグループ（日本では「日本人」ということになるが）から十分な理解を得て、差別や偏見なく生活することができるかといえば、これは、そう容易なことではない。大原則として、人種や性別によって資質や能力に優劣はないにもかかわらず、国籍が外国籍であることによって、その人の人格そのものに何か問題があるのではないかというような疑いの感情を、多数者の側が抱くということが起こりうるものが少なくない。だから、人種差別や民族差別がいわれのないこととして社会問題化し、だからこそ「多文化共生」が自治体などの政策として採用されてきたともいえる。

たとえば、「外国人犯罪」という言葉がマスメディアの報道や警察などの政府機関が用いることがある。何か事件が起きた時に、その犯罪が特定の国の人によって引き起こされたりしたときに、「〇〇人の犯罪組織」といった表現が用いられると、ごくわずかな人の逸脱した行為から、その人が属するエスニックグループ全体があたかも潜在的な犯罪者集団でもあるかのような偏見にさらされることがある。あるいは、2001年の同時多発テロ以降、イスラム教徒をテロリストの可能性のある人びととみなして、他の宗教と区別して、イスラム教徒全体をより厳しい監視下に置くことを容認するような世論が、欧米社会で広がった。このことが更に、宗教間の対立と緊張を増長させることにもなった。そして、近年、日本と近隣諸国との間の領土問題についても、国境をめぐる紛争という国家間の外交・安全保障問題が浮上すると、国家間の対立が個人間の感情的な民族対立に転移して、地域の異文化共生を支える人間関係に深刻な亀裂を生じさせるといった事態も生じかねないことになっている。国家の立場と個人の価値観をきちんと区別することができない結果として、国家という存在が、むしろ個人の安全や安心を脅かす原因を形成してしまっている。ここ20年ほど、こうした国家がもたらす個人の生存への危険については、「人間の安全保障」という観点から国家の安全保障とは別の（時には対立する）視点からのアプローチが必要であることが少しずつ理解されるようになってきた。なかでも、移民や難民など国境を越えて移動する人びとの人権や生存の権利、居住の権利は、重要な課題となりつつある。

世界のどの地域においても、移民の問題は、その社会・国家の国際関係の歴史と切り離すことはできない。非西欧世界と西欧世界との人の結びつきは、奴隷貿易や植民地としての政治・経済関係の深いつながりなど、平等とはとうてい言い難い関係を前提とした人の移動をともなって展開してきた。かつて植民地であった地域からその宗主国であった国へと向う人の移動は、日本においても旧植民地地域から日本への人の移動として顕著であった。戦前・戦中の強制連行や強制労働の影響を受けて、朝鮮人や中国人は、戦後日本における人口のなかの重要な「外国人」を構成してきた。明治以降の日本が「脱亜入

欧」と「富国強兵」の政策と植民地支配のなかで、アジア人への蔑視と自民族への優越意識が繰り返され強調され、侵略を正当化する心情が形成されてきた。教育はこうした民族的な優越を強調する日本人のアイデンティティ形成に重要な役割を果たしてきた。そして戦後の日本は、軍事的敗北を逆手にとるかのようにして、高度経済成長を経て世界第二位の「経済大国」に登りつめたことから、経済的優位を日本人の優秀さの証しとみなす感情が形成された。高度成長が、アジアにおける二つの大きな戦争、朝鮮戦争とベトナム戦争の特需に依存していたことなどより、むしろ、日本人が優秀だから世界のトップに登りつめることができたのだという神話ばかりがはびこることになった。その裏返しとして、経済的に後発のアジア諸国を見下すかのような価値観が広がり、これが戦後日本のナショナリズムを形成してきた。一見すると何の問題もなさそうに見える「経済大国日本」を自慢したり誇りに思う心情が、その裏側に無意識のうちに他民族への蔑視と欧米諸国への羨望や卑屈な追従意識を大衆の日常意識のレベルで生み出してきた。

しかし、かつて日本が植民地とした中国や韓国に経済力において追い抜かれ、あるいは互角の競争相手となっている現在、戦後日本の経済ナショナリズムもまたその根拠を失いはじめており、この意味で、近隣諸国に対する優越的な地位を暗黙のうちに前提した温情主義的あるいはパターンリズム的な「多文化共生」の発想そのものが根本から問われているのが現在の状況だろう。文字通りの意味において、民族の人口における多数か少数か、日本国籍か外国籍かといった差異に基づく差別を制度的にも感情や価値観のレベルにおいても払拭する新しい「共生」の理念を創造することが問われる時代になったのである。

あるいは更に、日本ではあたかも重大犯罪であるかのようにみなされている「不法滞在」の外国人の人びとについても、「不法」とか「違法」といったカテゴリーではなく、未登録undocumentedの外国人として位置づけなおし、地域の正当な住民として受け入れることができるような発想の転換も求められている。グローバル化の時代といわれ、資本や物・サービスがますます容易に国境を越えて、市場経済の原理に沿って最も収益率の高い行動をとることが可能になっているのにもかかわらず、人間については、その生存に必要な労働と所得を得るための自由な選択が未だに困難な状態のままにある。

こうした困難に挑戦する人びとが国境を越え、異なる社会環境のなかで新たな人間関係を構築しようとするとき、この異文化環境にあって最も脆弱な状態に置かれるのは、子どもや女性である。生まれ故郷の国から離れて日本に来た移民の子どもたちは、直面する「異文化」体験を通じて、「排除と同化」という、相反するベクトルのなかで、そのいずれでもない第三のベクトルを試行錯誤しながら構築する創造的な未来の主体でもある。同じ地域からの大量の移民が都市の一部に集中的に居住するような形態をとるばあい、こうした移民の居住地は、時には多数の民族からは、空間的な排除の場所としてゲットー化され、また、移民のコミュニティはその民族的な記憶を再生産するなかで、過去の伝統を自らのアイデンティティの中核に据えることによって排除に対抗しようとする。これは、近代国家が生まれて以来、この数世紀、どの国でも見ることのできるエスニック・マイノリティの状況のようにみなされてきた。しかし、この一見わかりやすい図式は、現実の社会が長期的に形成してきた文化的な変容の条件に着目したときに、説得力がないことがよくわかる。移民を差別し排除しようとする力は確実に存在する。この排除に抗う移民たちの抵抗の存在も重要な権利のための生存のための闘いとして、歴史的な意義ある結果をもたらしたことはいくらかでも示すことが可能だ。しかし、これは、排除を拒否して同化を要求するものではない。他方で、同化の圧力に対して、移民たちは一見すると自民族や母国の伝統とみえるものを維持しようとしているように見える場合があるが、必ずしもそうではない。同化ではなく、異なる民族の伝統をも受け入れるべきだという要求のように見える場合があるが、世代を越えて形成される「異文化」は、固定された伝統的な異文化ではない。とりわけ若い世代は、先にも述べたように、そのいずれでもない第三のベクトルを創造するのである。それも、彼らが住む、「異郷」の地において。支配的な文化とも親（どちらの親であれ）の文化とも異なる文化を生み出す主体が移民の若い世代なのである。

学校という場はもちろんのこと、学校外の日常生活の場においても、肌の色などの身体的な見かけから、言葉、文化的な慣習に至るまで、身体性の全てが、この排除と同化のベクトルのなかで、一瞬一瞬

の試練の連続を経験する。だから、移民たちは、母国の伝統や文化を単純に持ち込むのではない。むしろ、ポール・ギルロイが強調したように、彼らの存在は常に、今ここにある支配的な文化との関わりのなかで、常に、この支配的な文化にはない文化や価値観や言語表現を、母国での経験を参照しながらもこれとは決定的に異なる別のものとして、日々生み出すのである。とくに、子どもたち（往々にして、母親と父親とは異なる民族的出自である場合も珍しくない）は、まさに親の文化を受け売りするものでもない。学校文化を無条件に受け入れるわけでもない存在として、いずれの側にとっても、批判的な未来の世代なのである。

すでに、ジョン・デューイなど教育学の古典的な革新者たちが指摘してきたように、学校という秩序は、自由と多様性を奪い、子どもたちを画一的な秩序のなかで訓育する国家の制度となる危険性を常にはらんでいた。そして、20世紀後半には、ブラジルの革新的な民衆教育の提唱者、パウロ・フレイレもフランスの哲学者、ミシェル・フーコーも、メキシコの思想家、イヴァン・イリイチも、学校の本質とは、教えられる「教育」の内容そのものではなく、むしろ、監獄とならんで、近代の工場制度に適應できる人間を訓育する組織、社会のなかの被抑圧者たちを抑圧したり同化するための制度であるということを経験する観点から世界中でみられるようになる。また、イギリスの社会学者、ポール・ウィリスは『ハマータウンの野郎ども』のなかで、なぜイギリスの労働者階級の若者たちは、高学歴の方が有利であることがわかっていながら、進学を選択せずに、学校をドロップアウトする道を選択するのかを調査し、学校という制度が労働者階級の価値観を否定し、支配的価値観を押し付けるある種のイデオロギーの制度となっているということへの若者たちの拒否の感情を明らかにした。かれらは、学校という公式の制度がそれじたいとして、何か道徳的にも知識の教授という点においても、好ましい価値の具体的な制度であるという既成の前提を退ける。むしろ、学校は新たな創造的な可能性を抑圧してはいないか、既存の秩序への同調を強いてはいないか、と問うのである。

確かに、学校が体现している知識と文化的な価値への同調は、学歴によって労働市場の階層化と差別化が構造化している日本のような社会においては、サバイバルと「まともな仕事」へのアクセスのために必要最低限の条件であることは事実であろう。しかし、この事実は、学校の制度から無視できない数の移民の子どもたちがドロップアウトする現実を説明できるものではない。ましてや、ドロップアウトする子どもたちの側が内包している既存の文化や価値観の間尺にあわない潜勢力にこそ、新しい文化と価値観の可能性の萌芽があるなどということは夢にも思えないに違いない。しかし、ほとんど全ての大衆文化（たとえば、ジャズやロックからヒップホップに至る音楽文化を想起すればわかりやすいかもしれない）は、その源流をたどれば、多かれ少なかれ移民の若者たちが創造した文化ぬきには語ることはできないものである。そして、こうした確立された大衆文化はまた、新しい世代の新たな創造/想像力によって乗り越えられるべき対象となる。こうしたダイナミックな潜勢力は学校文化からも支配的な文化からも生まれることはないのである。

近代国家による学校教育が「国民」の世代的再生産の制度としてある以上、移民の子どもたちにとって学校という制度が抑圧的に機能せざるをえないことは避けられない。これは、学歴社会のなかで、成績で選別され、「劣等生」のレッテルを貼られる若者たちにも言えることである。しかし、上で述べたように、こうした若者たちは、公教育の制度の側からは不可視であり、不可解であり、厄介者扱いされるにしても、彼らには、教育の制度が生み出すことのできない創造/想像力の潜在的な主体としての大きな可能性があることを忘れるべきではない。そして、同時に、こうした子どもたちの潜勢力を抑圧しないような関係を、学校制度を前提してもなお、かろうじて、維持できるとすれば、それは、学校現場にいる多くのマジョリティに属する子どもたち自身が、こうした自分たちとは異質な存在が持つ可能性に気づき、学校文化とは異なる価値観をも内面化する力を自立的に形成できるかどうかにかかっている。このことを、古い世代の大人たちが、どこまで寛容とリスペクトの気持ちをもって見守り、支えられるか、これが地域の文字通りの意味における「異文化共生」「多文化共生」の試金石になるであろうと思う。

## 参考文献

- [1] イヴァン・イリイチ, 『脱学校の社会』 東洋, 小澤周三訳, 東京創元社, 1977年
- [2] ポール・E・ウィリス, 『ハマータウンの野郎ども』, 熊沢誠, 山田潤訳, ちくま学芸文庫, 1996年
- [3] ポール・ギルロイ, 『ブラック・アトランティック』, 上野俊哉, 鈴木慎一郎, 毛利嘉孝 訳, 月曜社, 2006年
- [4] ジョン・デューイ, 『学校と社会』, 宮原誠一訳, 岩波文庫, 1957年
- [5] ミッシェル・フーコー, 『監獄の誕生』 田村俣訳, 新潮社, 1977年
- [6] パウロ・フレイレ, 『被抑圧者の教育学』, 三砂ちづる訳, 亜紀書房, 2011年
- [7] 同, 『希望の教育学』, 里見実訳, 太郎次郎社, 2001年

## 【巻末資料】 活動の記録

◆ 2011年度～2012年度の活動のあらましをまとめる

月日	内 容	場 所
2011年 11月25日	活動の計画案を持ち寄り、活動の方向性について話し合う	環日本海交流会館
2012年 1月22～23日	「外国人児童生徒教育シンポジウム 2011 in Matsusaka」に参加する ・外国人児童生徒初期適応教室「ふたば」の見学 ・小中学校公開授業を参観 ・シンポジウム『『いっぽ』からひろがり、つながる地域力』参加	三重県松阪市 ・松阪市民文化会館 ・子ども支援研究センター ・第二、第五小学校 久保中学校
4月11日	イベント事前打ち合わせ	高岡市内
4月29日 ～5月17日	元子どもの青年たちにインタビュー調査を行う	高岡市内
5月11日	イベント事前打ち合わせ	富山大学経済学部
5月20日	イベント実施 ドキュメンタリー上映会&トークイベント 「デカセギの子どもたちの今『孤独なツバメたち～デカセギの子どもに生まれて～』」	高岡市ふれあい福祉センター
7月13日	イベントの総括を行い、今後の活動計画を立てる	富山市内
9月16日	報告書作成の企画をまとめる	高岡市内
9月29日	高校進学説明会に協力する 高校進学・受験に関するアンケート調査を行う	射水市立小杉中学校
10月16日	高校進学説明会に協力する 高校進学・受験に関するアンケート調査を行う	富山市立奥田中学校
10月24日	高校進学説明会に協力する 高校進学・受験に関するアンケート調査を行う	高岡市立志貴野中学校
2013年 3月	報告書完成	



<B>

<p>◆今回の説明会をどのようにして知りましたか。(※あてはまるもの全てに○をつけてください。)          Como soube desta orientação? Circule todas as respostas que se enquadram.</p>	
<p>a. 学校<small>がっこう</small>からのお便り<small>たよ</small> Informativo da Escola</p> <p>b. 先生<small>せんせい</small>から聞いた<small>き</small> através do Professor</p> <p>c. 市役所<small>しやくしょ</small>で聞いた<small>き</small> na Prefeitura</p>	<p>d. 知人<small>ちじん</small>から聞いた<small>き</small> através de amigos, conhecidos</p> <p>e. その他<small>た</small>Outros ( )</p>
<p>◆今回の説明会で初めて知ったことはありませんでしたか。Teve alguma coisa que ficou sabendo pela 1ª vez nesta orientação?</p> <p>a. あった Sim → それは何<small>なん</small>ですか? O que?</p> <p>b. なかった Não → 何を<small>なに</small>知りたかった<small>し</small>ですか? O que mais gostaria de saber?</p>	
<p>◆説明の内容<small>せつめい</small>はどうでしたか? O que achou quanto ao conteúdo da orientação?</p> <p>a. よかった Bom                      b. ふつう Mais ou menos                      c. わるかった Mal</p>	
<p>◆説明はわかりやすかったですか? A explicação foi compreensível?</p> <p>a. わかりやすかった Sim                      b. ふつう Mais ou menos                      c. わかりにくかった Não</p>	
<p>◆先輩<small>せんぱい</small>の体験談<small>たいけんだん</small>はどうでしたか? O que achou das histórias das experiências contadas pelos veteranos?</p> <p>a. 興味深<small>きょうみぶか</small>かった Interessante                      b. ふつう Mais ou menos                      c. あまり参考<small>さんこう</small>にならなかった Não foi interessante</p>	
<p>◆説明会<small>せつめいかい</small>の進め方<small>すす</small>はどうでしたか? O que achou do procedimento da orientação?</p> <p>a. よかった Ocorreu bem                      b. ふつう Mais ou menos                      c. わるかった Mal</p>	
<p>◆会場<small>かいじょう</small>はどうでしたか? Como achou sobre o local da orientação?</p> <p>a. よかった Gostei                      b. ふつう Mais ou menos                      c. わるかった Não gostei</p>	
<p>◆進路<small>しんろ</small>に関する情報<small>かん</small>をいつもどのように得<small>え</small>ていますか? Como você junta as informações sobre o seguimento futuro?</p> <p>a. 学校<small>がっこう</small>から                      b. 市役所<small>しやくしょ</small>から                      c. 子ども<small>こ</small>から                      d. 友人<small>ゆうじん</small>から                      e. その他<small>た</small></p> <p>( )</p> <p>pela Escola                      pela Prefeitura                      pelo filho(a)                      pelos amigos                      outros</p>	
<p>◆進路<small>しんろ</small>に関する情報<small>かん</small>をどこから得<small>え</small>たいですか? De onde você gostaria ter informações sobre o seguimento futuro?</p> <p>a. 学校<small>がっこう</small>から                      b. 市役所<small>しやくしょ</small>から                      c. 子ども<small>こ</small>から                      d. 友人<small>ゆうじん</small>から                      e. その他<small>た</small></p> <p>pela Escola                      pela Prefeitura                      pelo filho(a)                      pelos amigos                      outros</p>	
<p>◆来年度も説明会を開きたいと思<small>おも</small>います。よりよい説明会のために、ご意見・アドバイス等ありましたら、お書きください。 Pretendemos realizar esta orientação ano que vem também. Por favor ,gostaríamos que escrevesse a sua opinião ,conselho, etc, para a melhoria.</p>	

※Responsável : responder o formulário <C> ( Não precisa responder o formulário<D> )

※Aluno : responder o formulário <D> (Não precisa responder o formulário<C> )

ほごしゃよう

<C> 保護者用 somente Responsáveis

◆今回の説明会の対象となるお子さんの国籍・年齢・学年

Marque a idade, série e nacionalidade do filho (a) que se refere nesta orientação

国籍 : 年齢 : 学年 :  
Nacionalidade Idade Série

◆子どもには、将来どの国で暮らしてほしいですか。

Em que País gostaria que seu filho(a) residisse futuramente?

それはどうしてですか。Isto porque?

◆いつまで教育を受けさせたいですか。Até que idade pretende dar educação aos seus filhos(as)?

a. 中学まで até ginásio b. 高校まで até colégio c. 専門学校・短期大学まで até escola de especialização ou fac. curta duração d. 大学まで até faculdade e. 大学院以上 Além da faculdade

それはどうしてですか。Isto porque?

◆どのような職業についてほしいですか。Que tipo de trabalho, profissão gostaria que seu filho(a) tivesse?

それはどうしてですか。Isto porque?

◆子どもの教育について悩みや心配なことはありますか。(※あてはまるもの全てに○をつけてください。)

Tem alguma preocupação quanto a educação do seu filho(a) ? Circule todas as respostas que se enquadram.

- a. 日本語の習得 sobre ling. Japonesa, b. 学校の成績 Nota escolar, c. 進学・受検 Seguimento nos estudos, vestibulares,  
d. いじめ・友人関係 Bullying, relação com colegas, e. 不登校 Deixar de ir para aulas,  
f. 問題行動 atitude problemática, g. 教育費 Despesas escolares, h. 学校との連絡 Comunicação com Escola,  
i. 母語の維持 Esquecimento da língua materna, j. 子どもとの意思疎通 Comunicação com filho(a)  
k. その他 outros ( ) l. 悩みはない Não tem preocupação

上に選んだ悩みや心配ごとについて、具体的に教えてください。Favor escrever com mais detalhes sobre a preocupação acima.

◆これまで、学校や地域で日本語や勉強のサポートを受けたことがありますか。

Até agora tem recebido auxílio ou apoio nos estudos da língua japonesa pela Escola ou pelas instituições dos Bairros ?

- a. サポートを受けたことがある já recebeu apoio b. サポートを受けたことはない Nunca recebeu apoio

a. サポートを受けたことのある方→ これまで受けたサポートでよかったものは何ですか。  
Para quem respondeu que recebeu apoio. Que tipo de apoio recebido foi melhor de todos?

◆子どもの教育に関して、どのようなサポートがあったらよいと思いますか。

Que tipo de apoio deveria ter para educação dos filhos?

◆ご意見、ご要望など、ご自由にお書きください。

Se tiver alguma opinião, sugestão, pedido, escreva aqui à vontade.



## あとがき

私が2010年に外国人の子どもたちの学習支援ボランティアを開始したとき、頭の中にあっただのは、ある3人のブラジル人の子どもたちを進学させたい、そのことだけであった。その子たちは、2009年度当時に私が外国人相談員として小中学校で指導を担当した児童生徒のうちの、思春期を迎えていた3人であった。3人はそれぞれ別の学校に通っていたが、いずれもその前の年度までは、私のような相談員による特別な支援、いわゆる「日本語指導」を学校で受けていなかったという。実際、彼らは日本で生まれたり幼少期に来日したりした子どもたちであり、普段の日本語での会話には全く問題がない。しぐさや行動も日本的で、全く他の日本人と見分けのつかない子もいた。しかし、3人に共通していたのは、とにかく「勉強がわからない、授業に全くついていけない」ということ、そして、二言目には「どうせ…」「自分なんか…」「無理」「自分はバカだから」と、全く自分に自信がないことだった。一人目は、授業が全くわからず何もすることができないまま何時間も教室で座っていることができず、周りにちょっかいを出して問題を起し、教室に出入り禁止となっていた。その子は、結局高校を受検しなかった。彼は、小学校の時必死になって勉強を教えてくれた担任の先生との思い出を、ずっと大事にしていた。「あの時、あの先生のおかげで、少し授業がわかって、テストで点数が取れた。」彼にとっては、それがそれまでで唯一の学業上の成功体験だった。そして最初で最後の成功体験になってしまった。二人目は、勉強は全く駄目だったが、柔道という特技を持っていた。気が優しく、いつも自信なさげにしていたが、最後は推薦で私立高校に入ることができた。しかし、高校で勉強に柔道にとバリバリやっていく自分が想像できないようで、高校合格に喜びながらも戸惑っているような表情も見せていた。三人目は、当時小学6年生にして「自分は高校には行かない」と私に言った。私はその言葉に衝撃を受けた。自分が小学6年生の頃、果たして自分が高校へ行かないという選択肢について考えたことがあっただろうか。行けないかもしれないという可能性について考えたことがあっただろうか。担任の先生は、「あんなに漢字が書けない子は、知的な障がいのある子を除いて今まで他に知らない」と、普通とは違う何かに気づき、首をかきげながらも、結局は「あの子は、頑張ろうという気持ちがなくて」と意欲の問題と認識してしまっていた。私は、何とかしなければと、必死に指導していたが、週に1時間や2時間の付け焼刃的な支援では、焼け石に水のような無力感を感じる日々。それでも、子どもたちは日一日と成長していく。そして、学校という舞台から、去っていく。毎年毎年、私は小学校や中学校で新たな外国人生徒に出会うが、言葉の壁、学習の壁、進学の壁…みな深刻な、そして共通の悩みを抱えている。そして、毎年毎年同じことを繰り返している…。

ボランティアの学習支援を始めて、何か変わっただろうか。子どもたちをとりまく厳しい現実は今も変わっていない。ボランティアでできる支援など、本当に取るに足らないものにすぎないと実感する。しかし、当時小学6年生だったあの子は今、ボランティア教室で高校入学をめざして一生懸命勉強している。「将来は調理師になりたい」、そう夢を語る彼女の表情は、真剣だ。

このプロジェクトに協力してくれた元外国人相談員の二瓶博子氏は言う。「長年、ブラジル人の子どもたちと関わってきて、本当にいろんなことがあった。でも、振り返って思うのは、どんな問題の解決も、自分一人では何もできなかったということ。担任をはじめ、校長、教頭、教務、養護教諭…いろんな先生に相談して、協力してもらって、連携をとることで、いつも問題を解決できた。」

富山では、多くの人々が学校や地域で模索を続けている。そしてそれぞれが課題を抱えて活動している。子どもたちの現実の一方で、富山では手探りの状態からスタートし、多くの経験や蓄積を得てきた。これまでにどのような取り組みが行われてきたのか、今支援の体制はどのような状況にあるのか、どこまでできて何が依然として課題なのか、今後目指すべき方向性を見出すためにも、それらを明らかにすることが必要であろう。多方面の方々の貴重な協力を得て、本報告書において一旦整理できたと思う。ここに文章を寄せてくださったすべての方々に改めて御礼を申し上げたい。

外国人の問題は、一般にはなかなか「見えない」のかもしれない。でも「見えない」と「問題が小さい」ということはイコールではない。それぞれの支援者、組織が問題を共有し、いかに連携していくことができるか、そして現在の支援体制をさらに整えていくことができるのか、多くの関係者で考えていく材料、資料集としてこの報告書を読んでいただきたいと思う。

2013年2月

アレッセ高岡 青木由香  
トヤマ・ヤポニカ 田上栄子

平成 25 年 3 月 印刷・発行

富山における外国人の子どもたちの教育  
—子どもたちの声と支援をめぐる動き—

編集代表 小倉利丸

編集委員 田上栄子 (トヤマ・ヤポニカ講師)、青木由香 (アレッセ高岡代表)

発行 富山大学『東アジア「共生」学創成の学際的融合研究 (CEAKS)』

住所 〒930-8555 富山市五福 3190, 極東地域研究センター内 CEAKS 事務局

印刷 能登印刷株式会社



発行 富山大学『東アジア「共生」学創成の学際的融合研究』(CEAKS)事務局  
〒930-8555 富山県富山市五福3190 富山大学極東地域研究センター内

リサイクル適性  **A**  
この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。